志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書　18

神原Ⅱ遺跡（3）

003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書　18

神原Ⅱ遺跡（3）

2003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

当事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画３点セットの一翼を担う事業として神戸川上流に平成22年度完成を目標に志津見ダムの建設事業を進めています。このダムにより、頓原町大字角井・志津見・八神にわたり面積2.3km²もの貯水池ができることとなりますが、神戸川流域では古くから鈩製鉄が行われていたように、ダムによる水没予定地内にもこれらを含め多くの遺跡の存在が予想されたことから、ダム建設に先立ち、島根県教育委員会を始め関係各位のご協力を頂き、これら遺跡についての調査を計画的に実施してきております。

当報告書は、そのうち神原Ⅱ遺跡の調査結果をとりまとめていただいたものです。当遺跡からは、奈良時代の集落を確認できたことから、『出雲国風土記』の時代の志津見の歴史を知る上で貴重な資料が得られたのではないかと思われます。

当遺跡の場所は、ダム事業によって地形改変を行うため、現状での保存は困難です。そのような意味からも、ダム事業を契機として得られたこの貴重な資料をできるだけ正確かつ詳細に記録し、後世に残すことが、せめてもの我々の努めでもあり、この報告書はその成果とも言えるものです。

最後になりましたが、当遺跡の調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成15年３月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長　田　中　　靖

序

本報告書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成11年から平成12年にかけて実施した志津見ダム建設予定地内の神原Ⅱ遺跡の発掘調査報告書です。

志津見ダムの建設される神戸川は中国山地に源を発し頓原町から佐田町をぬけ出雲市に達し、日本海に注いでいます。この川は古くから陰陽を結ぶ交通路として重要な役割を果たしていました。古くは縄文時代に三瓶山の噴火による火災流に脅かされながらもこの地で生活を始め、弥生時代、古墳時代にかけても集落が営まれていました。特に古代から近世・近代にかけて良質な砂鉄と豊富な森林資源に恵まれたことから鉄生産が盛んに行われていました。

神原Ⅱ遺跡の調査では、縄文時代後期から晩期にかけての集落のあり方、奈良時代の集落の様子、近世から近代にかけての村の変遷を知る貴重な資料となりました。本書が、埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに少なからず寄与すれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の方々、頓原町教育委員会、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所をはじめとする関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会
教育長　広　澤　卓　嗣

例　　言

1．本書は、平成11、12（1999）年度に島根県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）より委託を受けて実施した志津見ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．本書に掲載した遺跡とその地番は下記のとおりである。

神原Ⅱ遺跡　島根県飯石郡頓原町大字志津見外

3．調査組織は次のとおりである。（役職名については当時の呼称を用いた）

調査主体　島根県教育委員会

（平成11年度）現地調査

事　務　局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、秋山　実（課長補佐）
松本岩雄（課長補佐）、今岡　宏（総務係長）

調　査　員　廣江耕史（埋蔵文化財調査センター調査第６係長）、野津　弘（同教諭兼主事）、
坂根健悦（調査補助員）

（平成12年度）現地調査

事　務　局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（総務課長）
松本岩雄（調査第１課長）、今岡　宏（総務係長）

調　査　員　丹羽野裕（埋蔵文化財調査センター調査第５係長）、釈　龍爾（同教諭兼主事）、
舟木千晴（調査補助員）

（平成13年度）報告書

事　務　局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（総務課長）
松本岩雄（調査第１課長）

調　査　員　丹羽野裕（古代文化センター主任研究員）、廣江耕史（埋蔵文化財調査センター調査１係長）、釈　龍爾（同教諭文化財保護主事）、伊藤幸子（同補助員）、
是田和美（同）、舟木千晴（同）

4．調査指導　　田中義昭（島根県文化財保護審議委員）

5．調査に当たっては以下の方に有益なご助言、ご助力をいただいた。

家田淳一（佐賀県陶磁文化館）、角田徳幸（島根県埋蔵文化財調査センター）、
田中迪亮、山崎順子、石飛幹祐（頓原町教育委員会）

6．挿図中の方位は、測量法による第Ⅲ座標系のＸ軸方向であり、平面直角座標系ＸＹ座標は、日本測地系による。

7．本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

SI（竪穴住居）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土壙）、SX（特殊遺構）、SD（溝）、N（粘土貼り土坑）

8．本書の執筆と編集は、丹羽野と廣江が協議してこれを行った。

9．本報告書に使用した実測図は、各調査員、調査補助員が作成し、佐々木澄江、門脇弘美が浄書した。

10．出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過 ……（丹羽野）　1

第２章　位置と環境 ……（丹羽野）　3

第３章　調査の概要 ……（廣　江）　5

第４章　平成11年度調査 ……（廣　江）　7

第５章　平成12年度調査 ……（丹羽野）　64

第６章　ま　と　め ……（廣江・丹羽野）　97

第７章　自然科学分析 ……　99

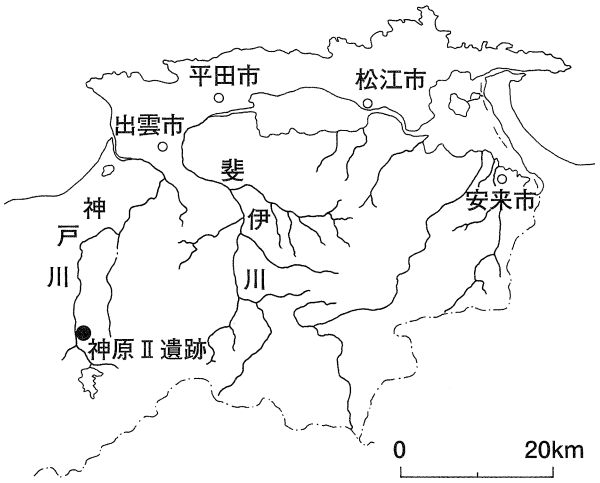
第１章　調査に至る経緯と経過

志津見ダムは、斐伊川神戸川治水計画の一環として、斐伊川放水路の開削、神戸川の拡幅、尾原ダムによる斐伊川の洪水調節、大橋川の改修等とともに、神戸川の洪水調整を主な目的に、工業用水の供給などの利水も含めて計画された多目的ダムである。ダムは神戸川上流の頓原町と佐田町の境界付近に建設される計画で、湛水地域は頓原町大字角井、志津見、八神にまたがって、その総面積は約230haにおよぶ。

志津見ダムに関わる事業は、直接的なダム建設だけではなく、道路の付け替え、移転用宅地の整備、生活再建事業、河川改修、代替農地整備に連動する圃場整備と多岐に及んでいる。湛水地やそれぞれの事業予定地において埋蔵文化財が存在する地域においては事前の発掘調査が必要であると判断され、志津見ダム事業の予定地については、1988年（昭和63年度）に、頓原町教育委員会と島根県教育委員会がその分布調査を行い、多くの遺跡の存在が明らかになった。その結果に基づき、翌年の1989年（平成元年度）から生活再建事業予定地や付け替え道路予定地などを皮切りに発掘調査が進められてきた。

発掘調査は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受け、島根県教育委員会が実施してきたが、1993年（平成５年度）からは宅地整備や生活再建事業などの周辺事業を中心に頓原町教育委員会も発掘調査を平行して行ってきた。調査は2002年まで14年にわたって続けられ、44遺跡の調査を行った。その経過と成果は表１にまとめたとおりである。当初の調査の計画では、さらに数年の調査が必要であったが、平成12年度から調査対象地の基準が変更され、常時満水位以上の遺跡については記録保存の措置を取らないこととなったため、権現山遺跡、徳原遺跡などの５遺跡は調査対象外となり、また継続調査中の神原Ⅱ遺跡も周辺事業地という位置付けとなって13年度以降は頓原町教委が引き継いで調査を行っている。よって、島根県教育委員会の現地調査は平成13年を持って全て終了し、平成14年度に未報告の遺跡の報告書を刊行して県担当の調査の全てを終了させることとなった。

神原Ⅱ遺跡の発掘調査は、対象面積が非常に広いこともあって1997年（平成９年度）から2002年度（平成14年度）まで行われている（2001年以降は頓原町教委が調査）。本書で報告するのはそのうちの1999年（平成11年度）と2000年（平成12年度）の調査分である。平成９年、10年の調査は、国道184号線の付け替えとなる部分を中心に調査を行い、平成11年度は付け替え184号線と県道川本波多線とをつなぐアクセス道の予定地を中心に調査を行っている。平成12年度は、９年度と11年度の調査地の間の区域について調査を実施した（第３図参照）。



第１図　神戸川と志津見ダム建設予定地位置図

表１　志津見ダム建設に関する調査一覧表

年度	遺　跡　名	面積(㎡)	調査主体	主要な遺構・遺物	報　告　書
1988	分布調査		島根県・頓原町		
1989	鉄井廻遺跡	130	島根県		志津見ダム２　1994
1989	引地遺跡	140	島根県		志津見ダム２　1994
1990	板屋Ⅰ遺跡	3,400	島根県	掘立柱建物跡、縄文土器	志津見ダム２　1994
1990	阿丹谷辻堂遺跡	600	島根県	石塔	志津見ダム２　1994
1990	森脇山城跡	400	島根県	山城	志津見ダム２　1994
1991	森遺跡	3,400	島根県	竪穴住居跡、縄文土器	志津見ダム２　1994
1992	板屋Ⅱ遺跡	450	島根県	掘立柱建物跡、縄文土器	志津見ダム１　1991
1992	門遺跡	3,200	島根県	竪穴住居跡、横穴式石室	志津見ダム３　1996
1992	森遺跡	1,600	島根県	竪穴住居跡、堀立柱建物跡	志津見ダム２　1994
1993	森Ⅱ遺跡	425	頓原町	竪穴住居跡、縄文土器、鉄器	
1993	壇原遺跡	300	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム４　1997
1993	門遺跡	5,000	島根県	竪穴住居跡、製鉄	志津見ダム３　1996
1994	壇原遺跡	1,500	島根県	製鉄（中近世）、近世墓	志津見ダム４　1997
1994	板屋Ⅲ遺跡	7,500	島根県	竪穴住居跡、製鉄、縄文土器	志津見ダム５　1998
1994	森Ⅲ遺跡	4,090	頓原町	竪穴住居跡、縄文土器、鉄器	
1995	戸井谷尻遺跡	4,000	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム９　2001
1995	長老畑遺跡	600	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム９　2001
1995	谷川遺跡	500	島根県	縄文土器・弥生土器・耳環	志津見ダム４　1997
1995	殿淵山毛宅前鈩跡	20	島根県	製鉄（中近世）	志津見ダム４　1997
1995	下山遺跡	7,000	島根県	竪穴状遺構、縄文土器	志津見ダム７　2000、志津見ダム12　2002
1995	板屋Ⅲ遺跡	4,500	島根県	竪穴住居跡、堀立柱建物跡、縄文土器	
1996	丸山遺跡	1,000	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム10　2001
1996	中原遺跡	11,000	島根県	横穴式石室、製鉄、掘立柱建物跡	志津見ダム６　1999
1996	下山遺跡	7,000	島根県	縄文土器、土偶、配石墓、製鉄	志津見ダム７　2000、志津見ダム12　2002
1996	大槇鈩跡	2,200	島根県	製鉄、堀立柱建物跡、近世墓	志津見ダム10　2001
1996	板屋Ⅲ遺跡	14,450	島根県	竪穴住居、集石炉、縄文土器	志津見ダム５　1998
1996	森Ⅳ遺跡	650	頓原町	竪穴住居跡	
1997	神原Ⅰ遺跡	5,000	島根県	竪穴住居跡、堀立柱建物跡	志津見ダム８　2000
1997	小丸遺跡	5,000	島根県	竪穴住居跡、堀立柱建物跡、縄文土器	志津見ダム14　2002
1997	森Ⅴ遺跡	1,300	頓原町	竪穴住居跡、鉄器、祭祀	『森Ⅴ遺跡』頓原町教委　2001
1997	神原Ⅱ遺跡	5,000	島根県	製鉄、堀立柱建物跡、製鉄（近世）	志津見ダム13　2002
1998	殿淵山遺跡	1,400	島根県	製鉄	志津見ダム15　2002、志津見ダム17　2003
1998	弓谷遺跡	3,430	頓原町	製鉄、縄文土器、弥生土器	『弓谷たたら』頓原町教委　2000
1998	獅子谷遺跡	1,900	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム15　2002、志津見ダム17　2003
1998	小丸遺跡	8,000	島根県	竪穴住居跡、人面付土器、縄文土器	志津見ダム14　2002
1998	森Ⅵ遺跡	1,350	頓原町	竪穴住居跡、縄文土器、鉄器	
1998	神原Ⅱ遺跡	6,000	島根県	竪穴住居跡、堀立柱建物跡、縄文土器	志津見ダム８　2000
1999	貝谷遺跡	5,000	島根県	竪穴住居跡、縄文土器	志津見ダム16　2002
1999	神原Ⅱ遺跡	6,000	島根県	竪穴住居跡、縄文土器	志津見ダム18　2003（本書）
2000	戸井谷遺跡	500	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム19　2003
2000	貝谷遺跡	900	島根県	縄文土器、弥生土器	志津見ダム16　2002
2000	神原Ⅱ遺跡	3,000	島根県	堀立建物跡、縄文土器、弥生土器	志津見ダム18　2003（本書）
2000	万場遺跡	420	島根県	堀立建物跡、カマド跡（中世）、陶磁器	『万場遺跡』頓原町教委　2002
2001	丸山金屋子遺跡	500	島根県	祭祀？	志津見ダム21　2003
2001	板屋Ⅲ遺跡	2,000	島根県	竪穴住居跡、縄文土器	志津見ダム20　2003
2001	貝谷遺跡	500	島根県	製鉄（近世）	志津見ダム21　2003
2001	神原Ⅱ遺跡	1,610	頓原町	横穴式石室、製鉄、竪穴住居跡	
2002	神原Ⅱ遺跡	250	頓原町	竪穴住居跡、製鉄（近世）	
合　計　面　積		144,115			

第2章　位置と環境

神原Ⅱ遺跡がある島根県飯石郡頓原町志津見地区は、島根県東部の出雲地方東部を貫流する神戸川の上流に位置している。神戸川はその源を島根県と広島県の境にそびえる女亀山（標高830m）に発し、途中、頓原川、伊佐川、波多川、角井川などの支流を合流しながら、赤来町、頓原町、佐田町、出雲市を貫いて日本海に注ぐ二級河川である。流域面積は471km^2、流路延長87kmで、出雲地方では斐伊川に次ぐ規模を持つ。この神戸川は近代以前には、出雲地方の山間部と沿岸部を結ぶ動脈であったと同時に、上流域は比較的標高の低い山地で石見地方に隣接しており、石見地方山間部と出雲地方をつなぐ交通の要衝でもあった。

一方志津見ダム予定地の東側には、旧石器時代以降縄文時代にいたるまで活発に活動していた三瓶山がそびえており、その活動の影響を大きく受けてきた地域でもある。度重なる火山灰の噴出や火砕流の流出は、志津見地区周辺の地形形成にも大きな影響を与えている。大規模な火山活動の後には、神戸川が流れる谷は火山堆積物で埋め尽くされ、そこをまた神戸川が開析するという繰り返しがあったと推測され、現在川の両岸や谷に見られる平坦面はその火山活動と開析作用の累積の結果生じたものと考えられる。志津見ダム予定地の遺跡の大部分は、こうした平坦地の上に立地しており、神原Ⅱ遺跡も例外ではない。

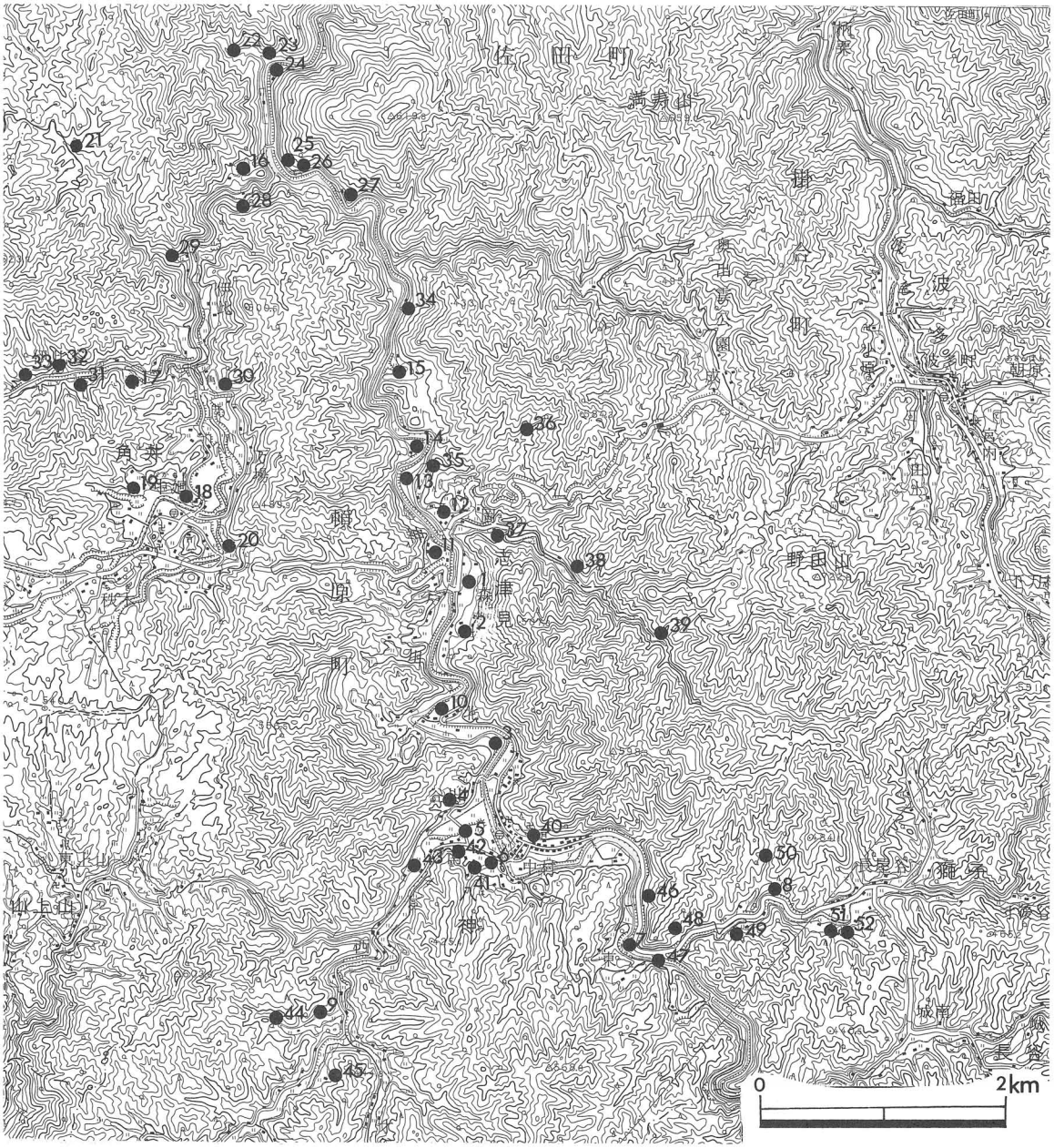
さて志津見ダム予定地周辺では、10,000年前以降の厚い火山灰堆積もあって、旧石器時代の遺跡は知られていない。現在最も古い遺物は板屋Ⅲ遺跡の第３黒色土下層から出土した縄文時代草創期末の土器で、それ以後ほぼ縄文時代を通じて遺物が出土している。主な遺跡としては、下山遺跡、貝谷遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、五明田遺跡、森遺跡などがあげられる。

弥生時代には、既に前期に板屋Ⅲ遺跡で遺構、遺物が検出されている。遺構、遺物が多いのは中期後半以降で、主な遺跡としては板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、森遺跡、小丸遺跡などがある。特に後期後半以降は遺構も多く、また鉄器の出土量が多いのも特徴である。

古墳時代以降も同様に多くの遺跡が知られる。古墳は中原古墳や門遺跡で横穴式石室が調査され、また八神地区の上流の比丘尼塚古墳でも横穴式石室が見られる。集落は森遺跡、門遺跡、板屋遺跡、小丸遺跡などで古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡などが検出され、門遺跡では大形の掘立柱建物、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡では帯金具が出土するなど、奈良時代の公的施設があった可能性がある。

中世以降は、多くの製鉄関連遺跡が知られる。中世の製鉄炉や精錬鍛冶炉が検出された遺跡としては、門遺跡、戸井谷遺跡、戸井谷尻遺跡、貝谷遺跡、板屋Ⅲ遺跡、壇原遺跡、梅ヶ迫遺跡などが上げられる。また近世以降の製鉄に関わる遺跡としては下山遺跡、壇原遺跡、大槇鈩跡、丸山遺跡、弓谷鈩跡、長老畑遺跡、殿淵山毛宅前鈩跡、殿淵山遺跡、戸井谷尻遺跡、獅子谷遺跡、中原遺跡、神原Ⅱ遺跡など枚挙に暇がないほどである。

中世以降は鈩以外でも多くの遺跡が知られる。中世末の山城としては森脇山城が知られており、中世の祭祀跡と考えられる遺構が森Ⅴ遺跡で検出されている。中世以降の陶磁器や掘立柱建物跡なども板屋Ⅲ遺跡、神原Ⅱ遺跡などから検出されている。また近世には麻がこの地域の産物であったことが知られ、麻を蒸したと考えられる集石土坑が板屋Ⅲ遺跡や神原Ⅱ遺跡で多く検出されている。



第２図　神原Ⅱ遺跡と周辺の遺跡

1	神原Ⅱ遺跡	2	神原Ⅰ遺跡	3	中原遺跡	4	谷川遺跡	5	森遺跡群
6	五名田遺跡	7	比久尼塚古墳	8	竹谷遺跡	9	三代木遺跡	10	小丸遺跡
11	門遺跡	12	板屋遺跡群	13	徳原遺跡	14	後平遺跡	15	貝谷遺跡
16	下山遺跡	17	伊比谷遺跡	18	角井遺跡	19	堂ノ原横穴墓	20	杉戸遺跡
21	獅子谷遺跡	22	戸井谷遺跡	23	戸井谷尻遺跡	24	長老畑遺跡	25	殿淵山毛宅前鈩跡
26	殿淵カナクソ畑鈩跡	27	大槇鈩跡	28	権現山鈩跡	29	獅子谷遺跡(大鍛冶場)	30	向原鈩跡
31	伊比谷１号鈩跡	32	伊比谷２号鈩跡	33	伊比谷２号鈩跡	34	丸山鈩跡	35	徳原鈩跡
36	板屋奥鈩跡	37	弓谷尻鈩跡	38	弓谷鈩跡	39	弓谷奥鈩跡	40	慶雲寺鈩跡
41	段原鈩跡	42	土居ノ上鈩跡	43	坂根鍛冶跡	44	三代木鈩跡	45	大蔵鈩跡
46	鈩原鈩跡	47	落合製錬所跡	48	獅子尻鈩跡	49	獅子古鈩跡	50	梅ヶ迫谷鈩跡
51	市場鈩跡	52	仁井屋鈩跡						

第3章　調査の概要

神原Ⅱ遺跡は、島根県の東部、日本海に流れる神戸川の上流部右岸川の標高270mほどの河岸段丘上から川岸にかけての斜面に位置している。遺跡は、縄文時代から近世に至る複合遺跡で、総面積32,000m²の大規模な遺跡である。平成９年度から平成12年度まで発掘調査を実施しており、今回は平成11、12年度調査の報告書である。

平成11年度は約4,500m²を調査し、調査区は便宜的にⅠ～Ⅴ区に分けて調査している。第Ⅰ調査区は、谷状に窪んだ場所に第２黒色土が残り、縄文土器が出土している。第２ハイカの上面でピットを検出している。

第Ⅱ、Ⅲ調査区は西側に平坦面があり、第１ハイカ上面から土坑43基が検出され、内10基は粘土貼りで、拳大の石が入ったものが２基であった。粘土貼りの土坑はⅡ区の南側とⅢ区の北側に集中しており、平面形は円形で底部が平坦であり木製の桶が入れられていたものと思われる。南側の粘土貼り土坑の周囲にピットが並んでおり、建物の中に位置するものと思われる。土坑上面に拳大の焼け石が入ったものは、近世後期から近代にかけての麻蒸し窯の跡と考えられる。Ⅱ区は厚さ40cmの第一ハイカを取り除くと、第２黒色土があり、縄文土器の後期のものが出土している。

Ⅲ区の中央を南北に斜面に沿うように、幅1.5mの溝（SD－05）が位置している。斜面に直交するような溝（SD－01、02）は、側面と上部に河原石を並べて補強している。溝には砂が詰まっていた。この溝は、近現代のもので建物に伴う施設と思われる。Ⅲ区の南側は谷状に窪んでおり、この場所の第Ⅰ黒色土中から縄文時代晩期の土器、石器が総数3,500点出土している。

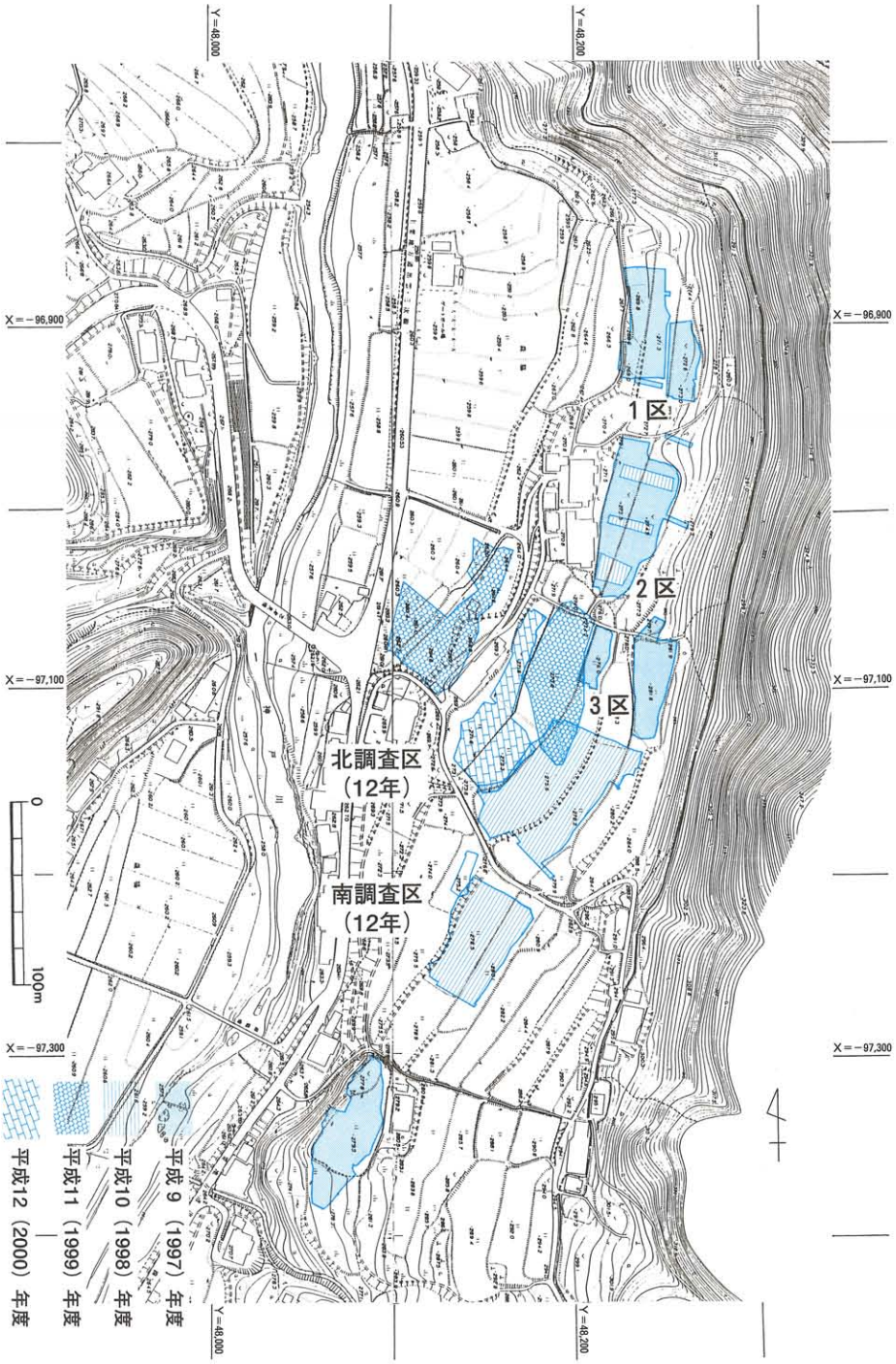
Ⅳ区は、Ⅱ区の西側神戸川に近い場所で、ピットを検出している。

Ⅴ区は第１ハイカ上面において奈良時代の竪穴住居跡３棟を検出している。調査区の中央部には近世から近代にかけての大きな土坑が４基あり、中には石が多く入り、床面の一部が焼けていた。第２ハイカ上面からピット86、炉跡３基を検出している。時期は縄文時代後期である。

平成12年度の調査は、面積約3,000m²を対象に調査している。調査の結果、南北２つの調査区から７カ所の遺構集中箇所と４つの旧谷地形が検出された。

遺構群１は、調査区の北端で炉状の壁面が焼けた土坑があり、表面が還元しており、鍛冶炉の可能性がある。遺構群２は、多数の柱穴、集積土坑、溝１で構成される。柱穴から４棟程度の建物が想定される。土坑は麻蒸し等の用途が考えられる。遺構群３は平行する２条の溝とその北側の柱穴群、南側の平坦面と土坑からなる。遺構群４は北側調査区のほぼ中央部で検出された大規模な柱穴群である。４棟以上の掘立柱建物跡が復元できる。遺構群５は、加工段２と炉状の土坑が検出され鍛冶炉の可能性がある。遺構群６は柱穴群、墓と考えられる土坑、粘土貼り土坑２が検出されている。柱穴から２棟の掘立柱建物跡が復元される。遺構群７は、粘土貼り土坑３と柱穴状ピット数穴である。遺構群の時期は、出土した陶磁器が中近世であり、およそ近世を中心とする時期である。

旧流路が４カ所検出されており、黒色土が堆積し縄文土器、土師器、弥生土器が出土している。今年度の調査では、中近世の遺構が主で古代以前の遺構は検出されなかった。後世の削平によるものと考えられる。



第３図　神原Ⅱ・神原Ⅰ遺跡1997～2000年度調査区位置図（S=1／4,000）

第４章　平成11年度調査

１．第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ調査区

第１黒色土の調査

第Ⅰから第Ⅲ調査区は、神戸川沿いに走る国道375号線から一段高い場所に位置しており、道路からの標高差２～７ｍである。それぞれの調査区を北東から南西方向に幅263m～265mの平坦面がある。この平坦面は、調査前に水田と牛舎があった場所である。

調査はⅡ区から行い、平坦面の表土、耕作土、床土を除去すると灰黄色土に掘り込まれた土坑を検出している。斜面側に集中するこれらの土坑の中には、粘土を詰めたものが６基みられた。狭い範囲に切り合いながら堀り込まれている。これらの土坑の東側において柱穴の並びを検出しており、掘立柱建物の存在が確認された。平坦地の南側の斜面を削り出した壁寄りから浅い土坑が並ぶ様に検出されている。これらの土坑は深さが浅いもので時期も近代のものであった。調査区の西側の斜面からは明瞭な遺構は確認していない。斜面からは部分的に地下水が湧き出している。

第Ⅲ調査区にもⅡ区と同様の平坦面が続いており、この平坦面に沿う様に幅1.5mの溝（SD－05）が走っている。この溝と直交するように溝（SD－01、02）が２本検出された。この溝には側面と上面を河原石により補強している。調査区の西側から土坑の上部に礫を敷き詰めたもの２基を検出している。礫が被熱し、炭化物が多く含まれている。調査区の北側においては粘土貼りの土坑３基を検出している。調査区のほぼ中央部において縄文時代晩期の土器が集中して出土している。多少谷状の窪んだ10×８ｍの範囲にぽぽまんべんなく散布した状態である。北西方向に向け斜面が傾斜しており、途中からは第２ハイカ層の面となっており、上部が削平されているようである。調査区の中央部に建築材を埋め込んだ大きなカクランの穴がある。

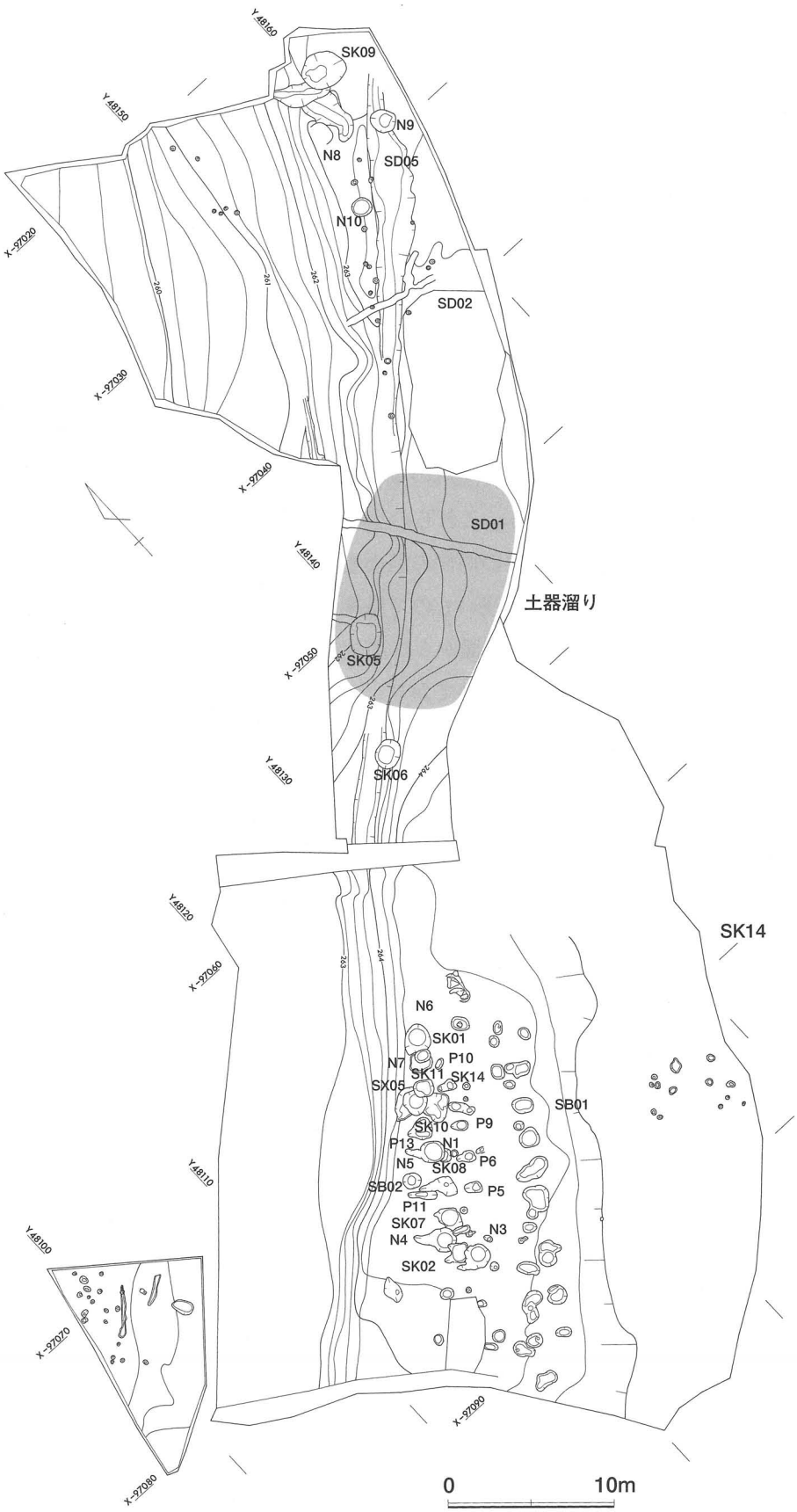
粘土貼り土坑

N－01　土坑群の中央部においてSK12、P13と切り合って検出している。両者との新旧関係は、Ｎ１が新しいものである。土坑の平面形は円形で、内法の底径は1.1m、底部は平坦である。側面と底部に灰黄茶色の粘土が貼られ、厚さは10cmを測る。

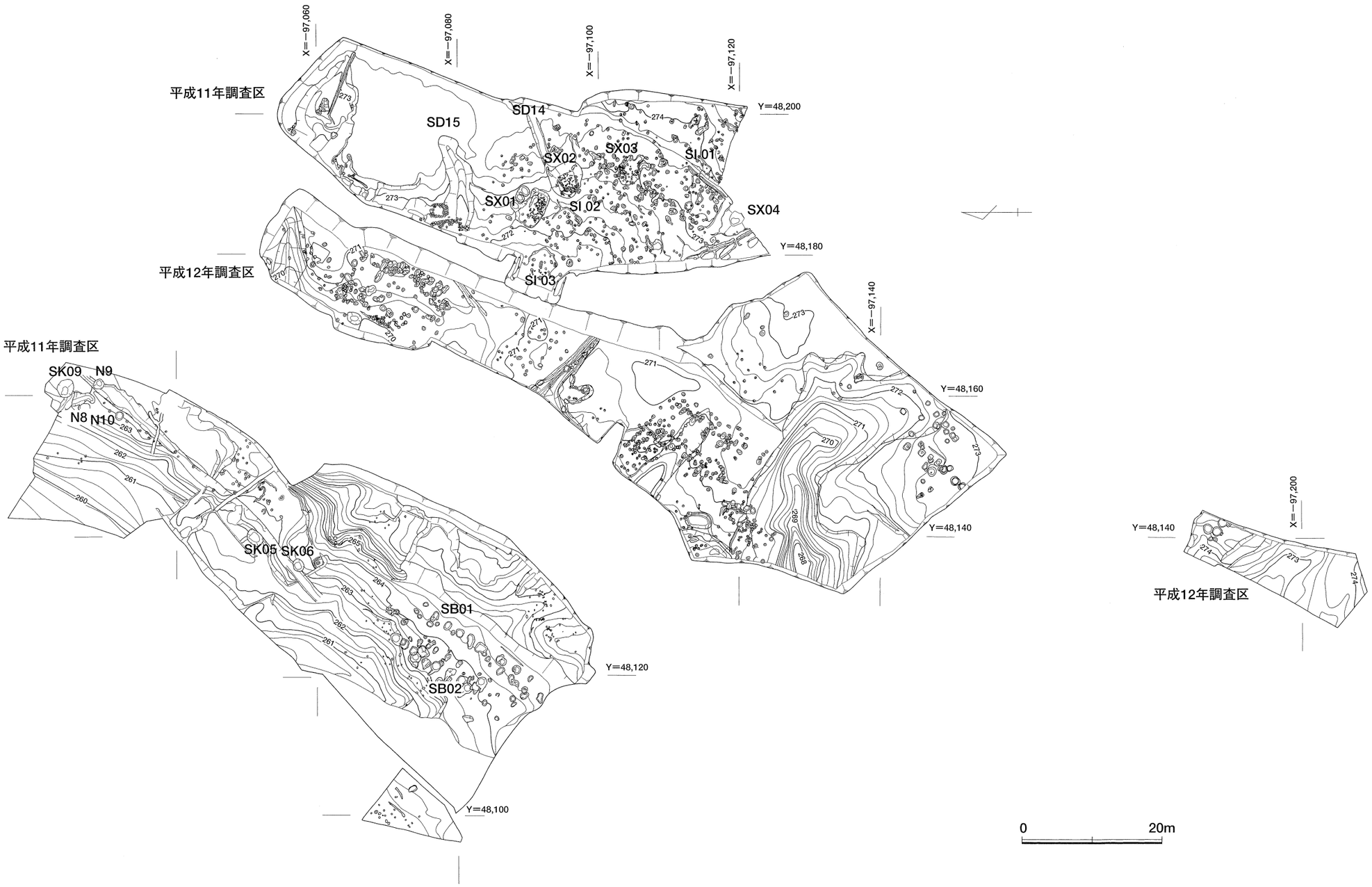
N－02　土坑群の北側においてSK11、SX５と切り合っており、Ｎ１が両者より新しいものである。土坑の平面形は円形で、内法の低径は0.85mで底部は平坦であり、周囲が浅く窪んでいる。側面と底部には黄色粘土が貼られ、底部の厚さ７cmに比べ側面が30cmと厚く貼られている。

N－03　土坑群の南側でSK02と切り合って検出している。新旧関係はN３のほうが新しいものである。土坑の掘り方は径1.5mであり、内法の径0.95mの粘土貼りの土坑である。底部は平坦で周囲に浅く溝状に窪んでいる。底部の粘土は掘り方の底部に接しているが、側面の粘土は掘り方との間に隙間がみられる。

N－04　SK02、SK07と切り合って位置している。新旧関係はN４の方が新しいものである。掘り方の径1.4m、粘土の内法0.9m、深さ0.7mを測る。土坑底部の周囲に深さ５cmの溝が巡っている。土坑内には大小の石が入っている。



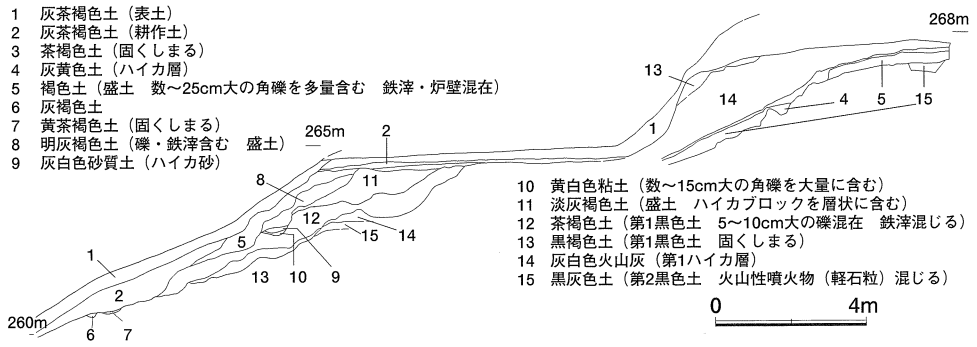
第４図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・区第１ハイカ層遺構配置図（S=1／400）



第５図　神原Ⅱ遺跡遺構配置図（S＝1／600）

神原Ⅱ遺跡遺構一覧表

調査区	遺構名	種別	規模(m) 口は現状もの 長軸	単軸	深さ	出土遺物	共伴遺構
2区	N−1	粘土貼土坑	1.65	1.43	0.92	陶磁器7・土器6・鉄製品3・鉄滓5・砥石1	SK-12,SK-11,SK-4,SX-5
2区	N−2	〃	1.52	1.37	0.74	陶磁器4・土器3・鉄滓4	SK-2
2区	N−3	〃	1.65	1.36	0.61	陶磁器4・土器1・鉄製品3・鉄滓2	SK-2,SK-3
2区	N−4	〃	1.65	1.40	0.69	陶磁器5・土器8・鉄滓8	
2区	N−5	〃	1.05	0.91	0.27	陶磁器1・土器1・鉄製品1・鉄滓1・羽口1	N-6,N-7,SK-1
2区	N−6	〃	1.33	1.20	0.45	陶磁器5・土器5・鉄滓1・羽口1	N-6,SK-1
2区	N−7	〃	1.45	1.25	0.17	鉄滓3	SD-4
3区	N−8	〃	1.40	1.20	0.11		SD-5
3区	N−9	〃	1.16	1.03	0.55	陶磁器2・鉄滓4・羽口1	
3区	N−10	〃	1.20	1.00	0.11	陶磁器1	N-6,N-7
2区	SK−1		0.96	0.76	0.52	陶磁器4・鉄滓7	N-3,N-4
2区	SK−2		1.14	0.76	0.70	陶磁器1・土器4	
2区	SK−3		0.65	0.55	0.30	土器2・鉄滓2	SK-8
2区	SK−4		0.85	0.32	0.60		SD-3
3区	SK−5	集石土坑	2.63	1.75	0.48	陶磁器3・土器1	SD-5
3区	SK−6	〃	1.79	1.40	0.50		SK-13
2区	SK−7		1.28	1.06	0.90	陶磁器4・土器3・鉄製品1・鉄滓1	SK-4
2区	SK−8		1.25	0.93	0.72	陶磁器4・土器1・鉄製品2・鉄滓1・石1	SD-6
2区	SK−9		2.40	2.10	0.62	陶磁器7・土器2・鉄滓12・羽口1	
2区	SK−10		1.30	1.03	0.30	土器1	N-2,SK-14,SX-5
2区	SK−11		1.40	1.00	0.83	陶磁器2・土器1・鉄滓11	N-1
2区	SK−12		1.24	0.71	0.70		N-4,SK-7
2区	SK−13		0.70	1.29	0.79	土器4	N-2,SK-11
2区	SK−14		1.36	1.08	0.65		
5区	SK−15		2.36	1.08	0.34	土器	
5区	SK−16		2.47	0.62	0.60	土器	
5区	SK−17		1.05	0.68	0.30		
2区	SK−18		1.05	0.80	0.09		
2区	SK−19		0.85	0.53	0.11		
2区	SK−20		0.97	0.44	0.54		
2区	SK−21		0.96	0.82	0.50	柱根	
2区	SK−22		0.86	0.78	0.20	土器	
2区	SK−23		0.80	0.80	0.22		
2区	SK−24		0.53	0.53	0.30		
2区	SK−25		0.93	0.74	0.46		
2区	SK−26		0.76	0.70	0.15		
2区	SK−27		1.48	1.15	0.42	土製品	
2区	SK−28		1.18	0.75	0.24		
2区	SK−29		0.94	0.48	0.20		
2区	SK−30		1.13	1.05	0.25		
2区	SK−31		1.44	1.00	0.50		
2区	SK−32		1.40	1.20	0.50	陶器	
2区	SK−33		1.17	0.85	0.45	磁器・鉄滓	
2区	SK−34		1.50	0.93	0.34		
2区	SK−35		0.87	0.75	0.28	磁器	
2区	SK−36		1.00	0.70	0.12		



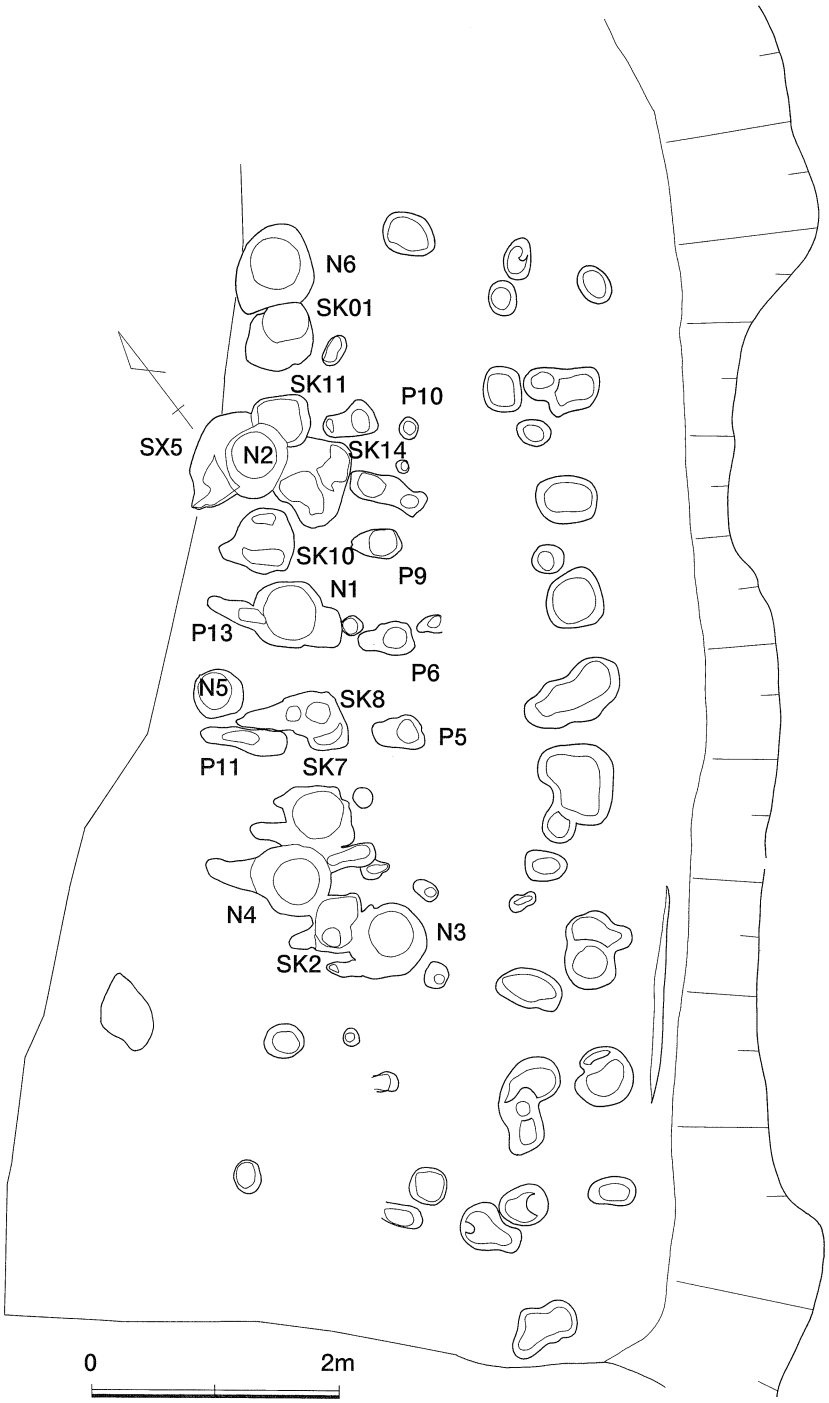
第6図 Ⅱ・Ⅲ区中間セクション実測図（S=1／200）

N－05　土坑群のほぼ中央部において、単独で検出している。円形の掘り方の径1.1m、粘土の内法の径0.8mで深さ0.25mである。

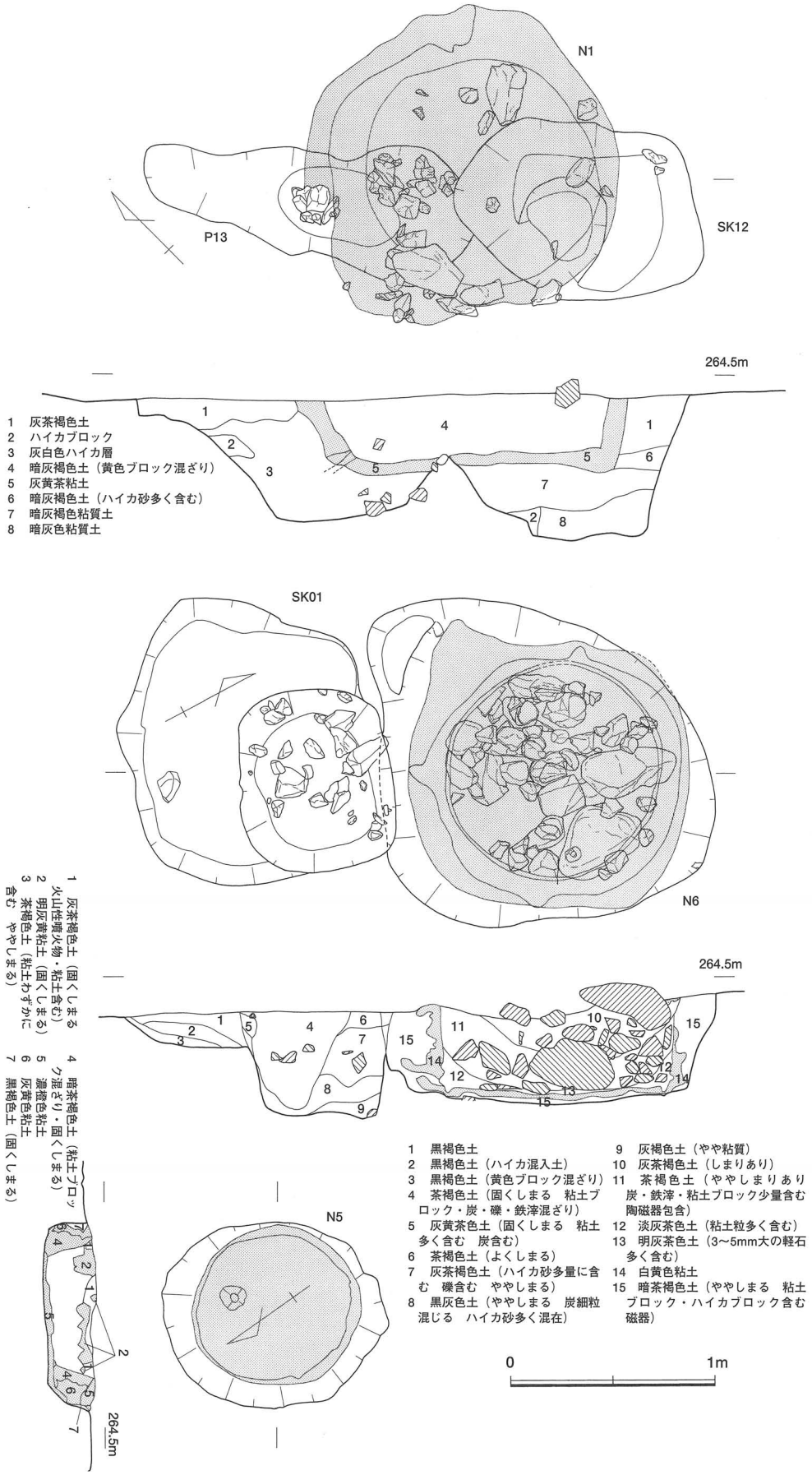
N－06　土坑群の最も北側においてSK１と切り合って位置している。粘土貼りの平面形は方形であり、内法は径1.1mの円形を呈している。底部の周囲に幅４cm、深さ３cmの溝が巡っている。土坑の中には礫が多量に入り込み、土より多い状態である。

N－08　Ⅲ区の北側において検出している。上部が削平されており、底部の粘土のみの検出である。

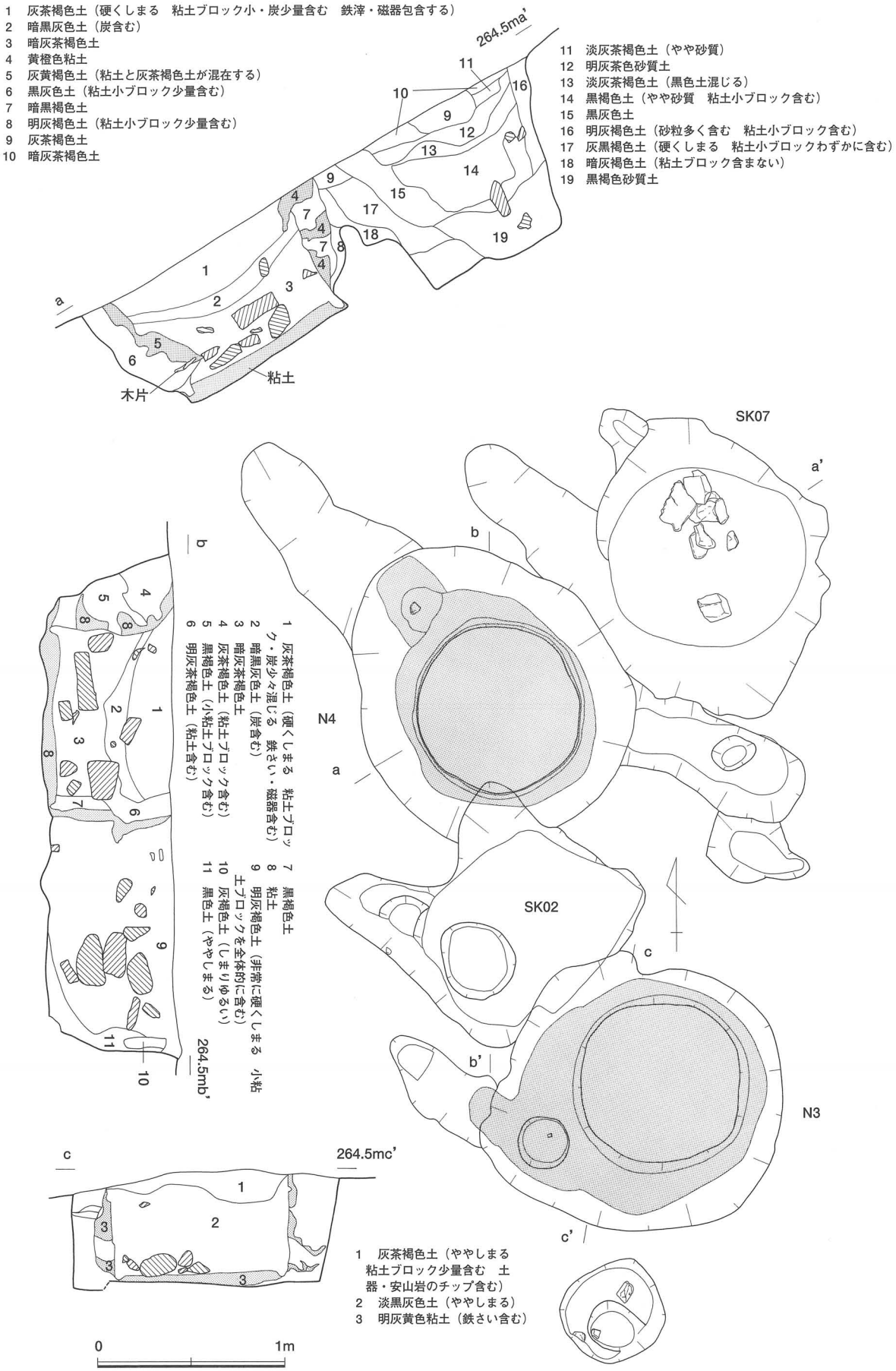
N－09　掘り方の径1.1m、深さ0.55mを測る。底部に径0.9mの溝状の痕跡が残る。



第７図　N（粘土貼土坑）・SK（土坑）実測図（S＝1／60）



第８図　SK01・12・N1・5～7・P13　実測図（S＝1／30）



第９図　SK02・07・N3・4　実測図（S＝1／30）

SK01（第８図）

Ｎ６と切り合い関係にあり、二段に掘り込まれた土坑である。浅い部分で深さ0.15m、深い部分で0.5mを測る。土坑中に礫を多く含む。

SK02（第９図）

Ｎ３とＮ４の間に切り合いながら位置する。方形のもので、床面は平坦で円形のピット状の落ち込みがあり、礫が入り込んでいる。

SK05（第11図）

平面形が隅丸長方形で長辺2.6m、短辺1.3m深さ0.5mを測る。土坑の覆土上面には集石があり、覆土中には炭化物が多く含まれている。

SK06（第11図）

平面形が隅丸方形で長辺1.75m、短辺1.4m、深さ0.3mを測り。覆土上半部に集石がみられる。覆土した下半には木の原形が分かるような木炭が出土している。SK05、06ともに麻蒸し土坑と考えられる。

SK08（第12図）

土坑群の中央部において検出している。２つの土坑が切り合いながら位置しており、土層堆積状況から確認される。底面にピット状の落ち込みがみられる。土坑の西側において礫が多く堆積している。

SK09（第13図）

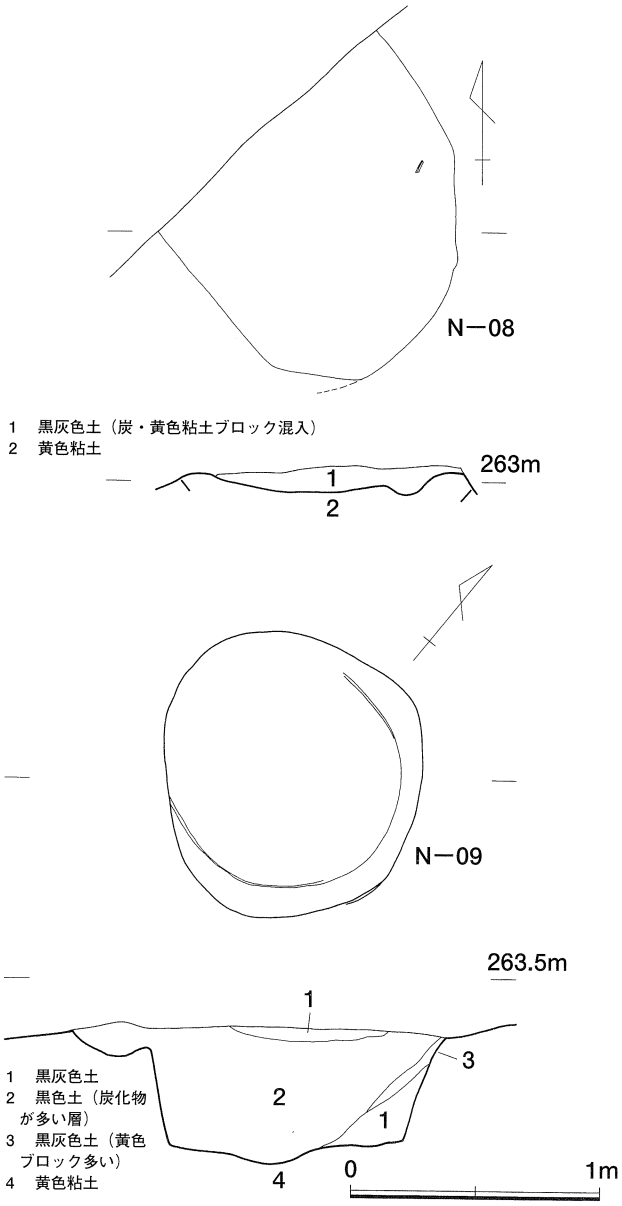
Ⅲ区の北端において検出している。平面形は楕円形を呈しており、長辺2.35m、短辺2.0m、深さ0.6mを測る。底部中央部がやや窪んでおり、壁が緩やかに立ち上がる。覆土には炭、鉄滓、礫を含み、底部近くの第7層は炭化物のみの堆積であった。

SK10（第12図）

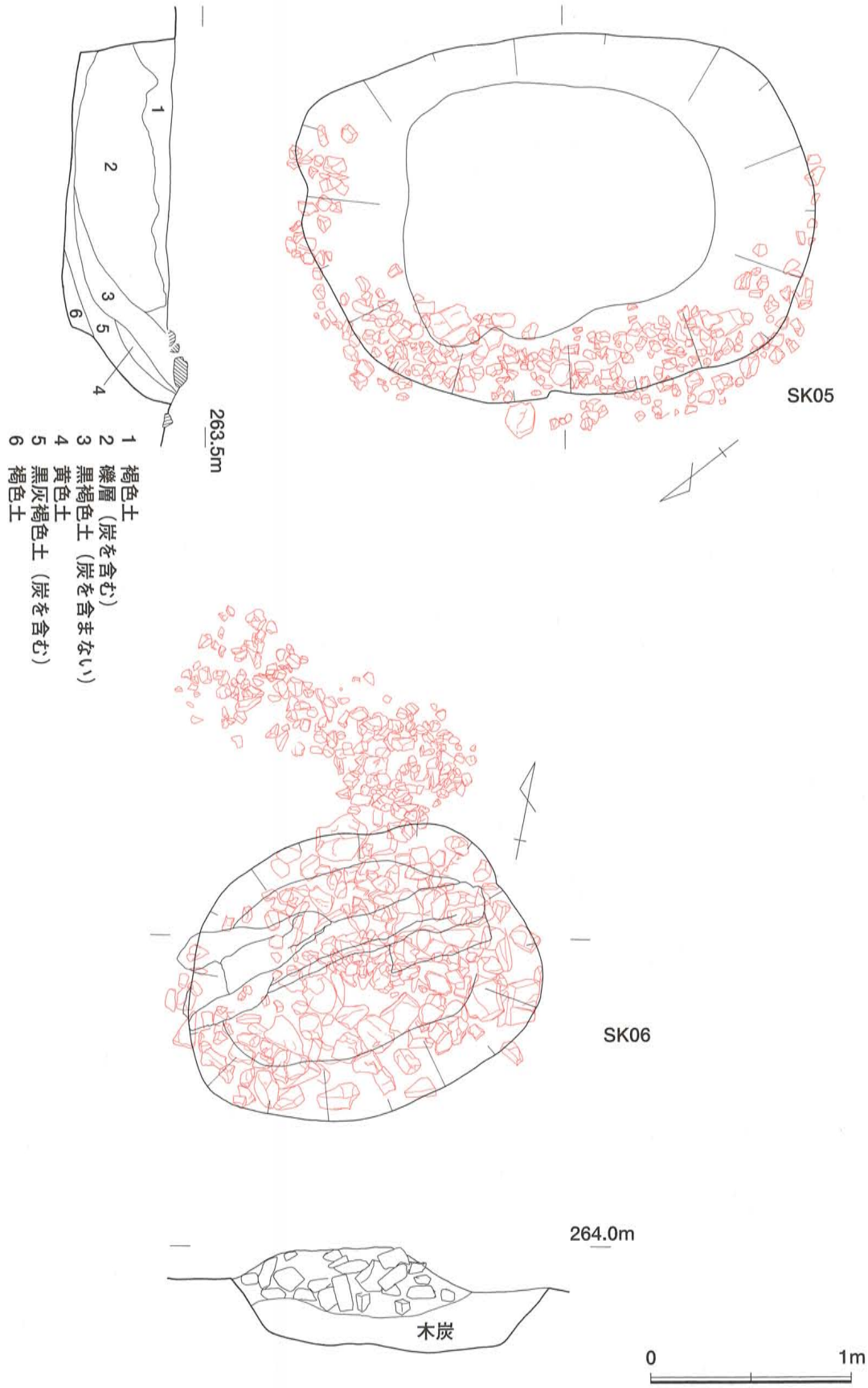
土坑群中央部において検出している。P12と切り合い関係にあり、長方形で床面は平坦である。長辺1.2m、短辺1.0m、深さ0.6mである。

SK11（第14図）

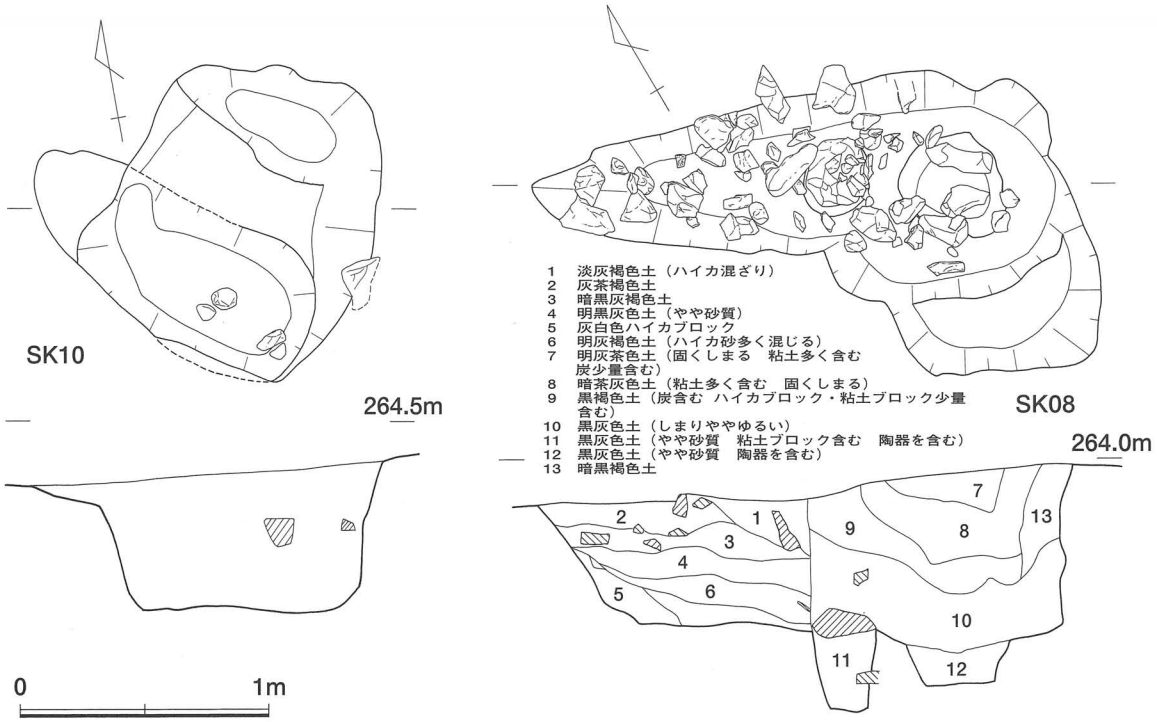
Ｎ２、SK14、SX05と切り合っている。平面形は、長方形で長辺1.2m、1.0m、深さ0.8mを測る。Ｎ２（新）、SK11（古）の新旧関係である。



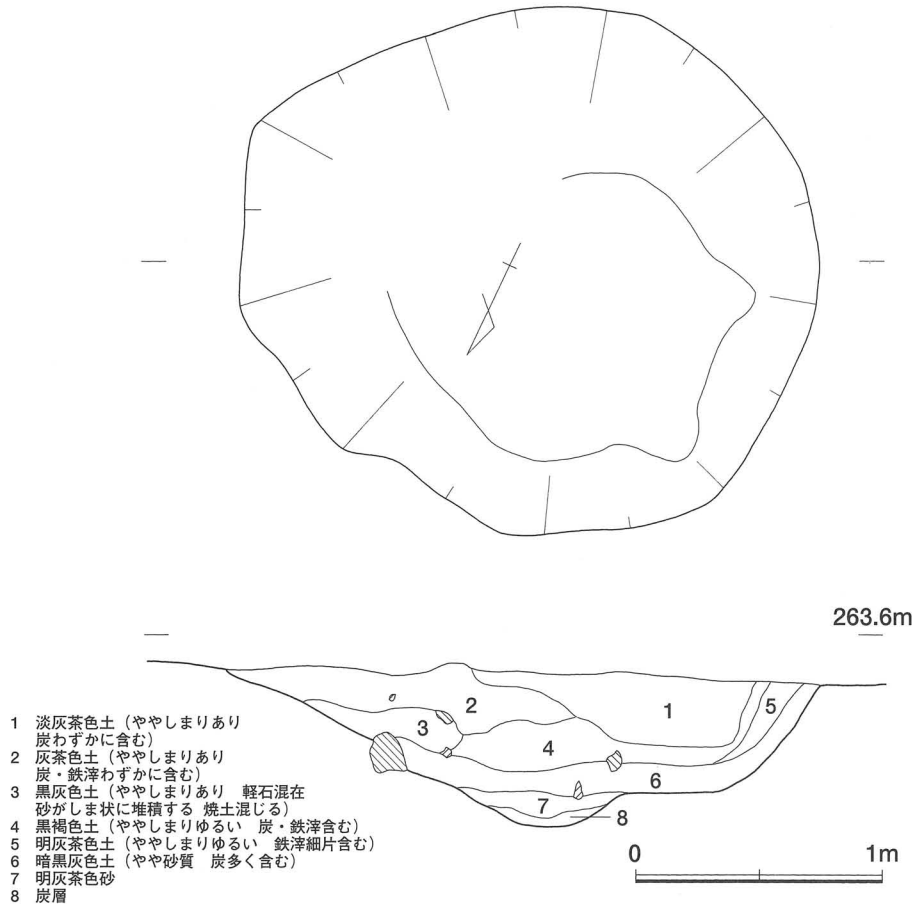
第10図　N－08・09実測図（S＝1／30）



第11図　SK05・06実測図（S=1／30）



第12図　SK08・10実測図（S＝1／30）



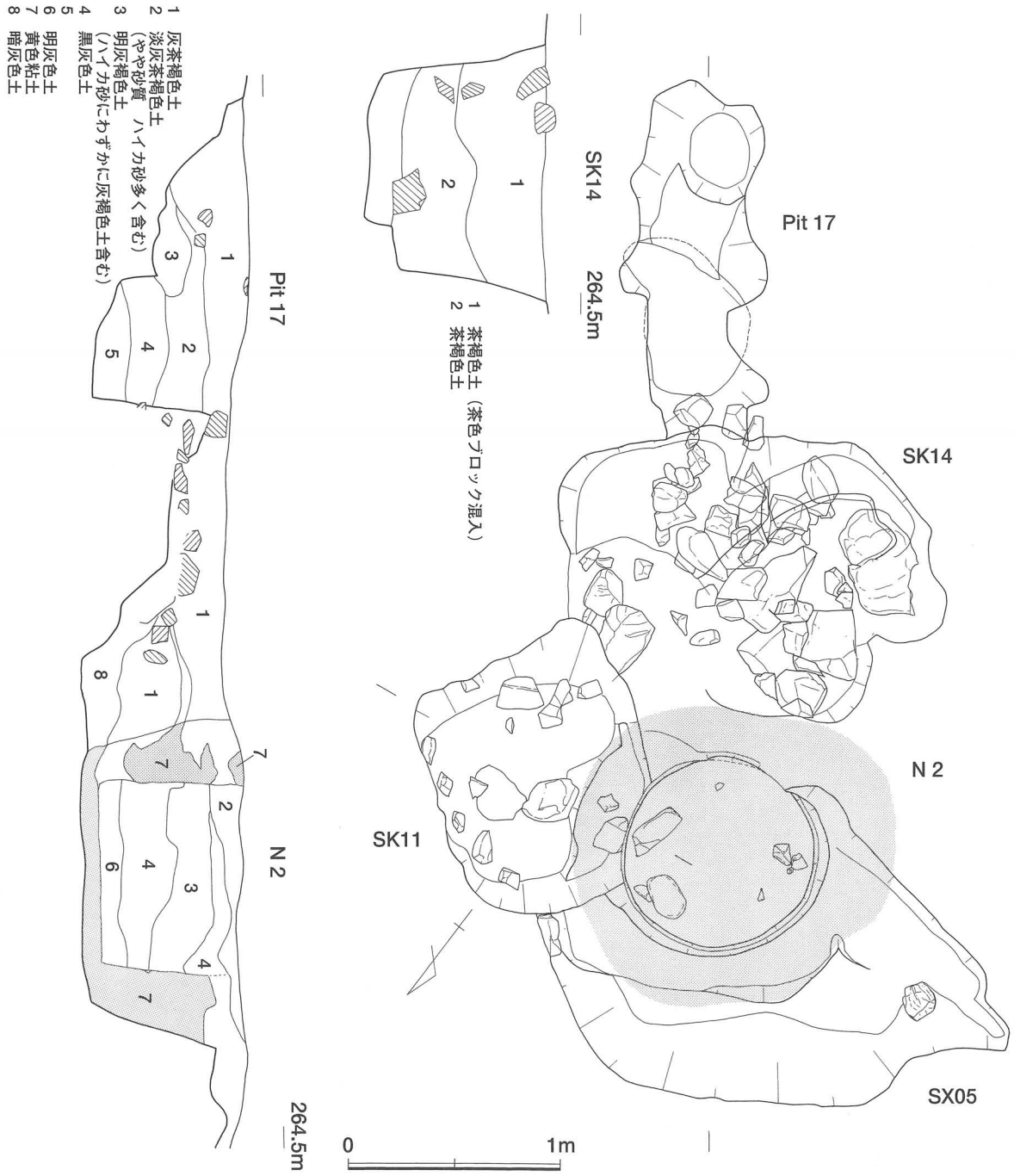
第13図　SK09実測図（S＝1／30）

SK12（第８図）

N1、SK12と切り合い関係にあり、Ｎ１が新しく、P13との新旧は不明である。長辺1.2m、短辺0.9m、深さ0.7mを測る。

SK14（第14図）

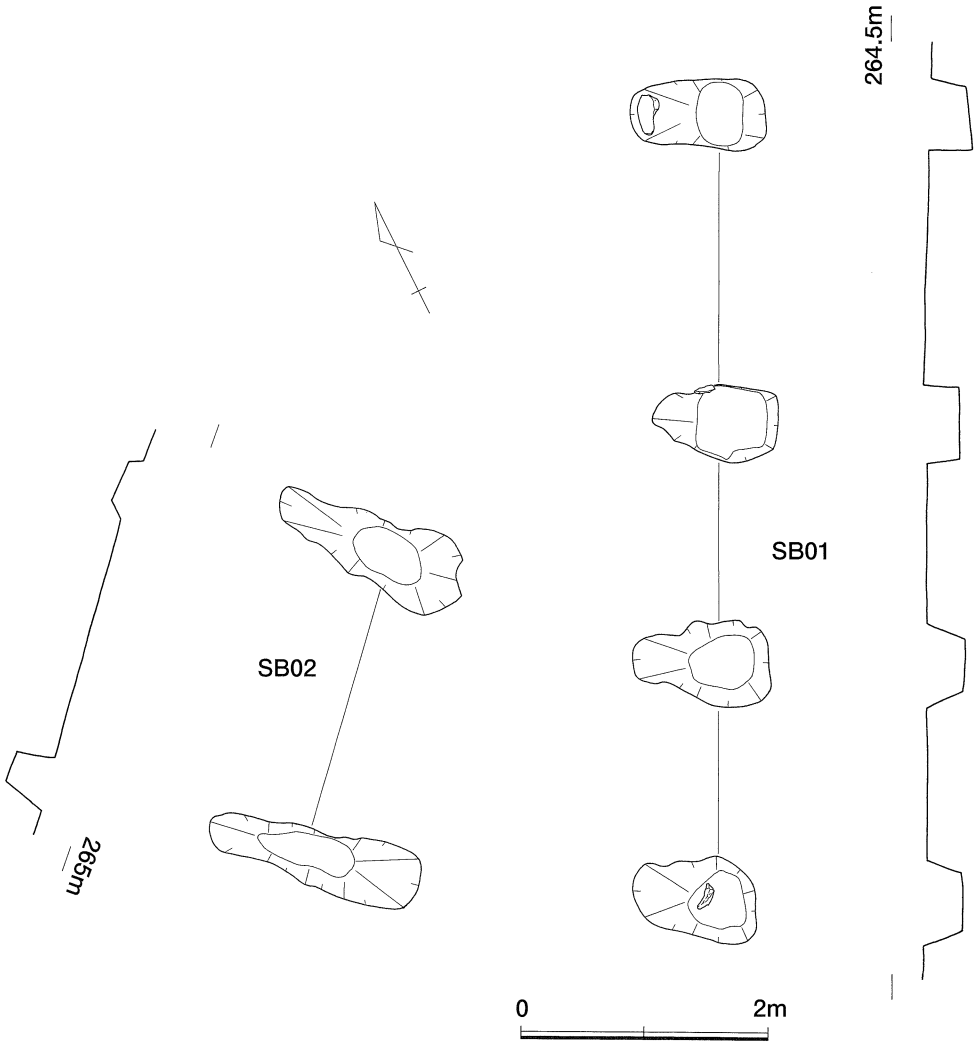
P17、SK11、Ｎ２と切り合い関係にあり、P17（古）－SK14、－SK11、Ｎ２（新）である。長辺1.9m、短辺1.3m、深さ0.8mを測る。底部が二段になり、土坑内に多くの礫を含んでいる。



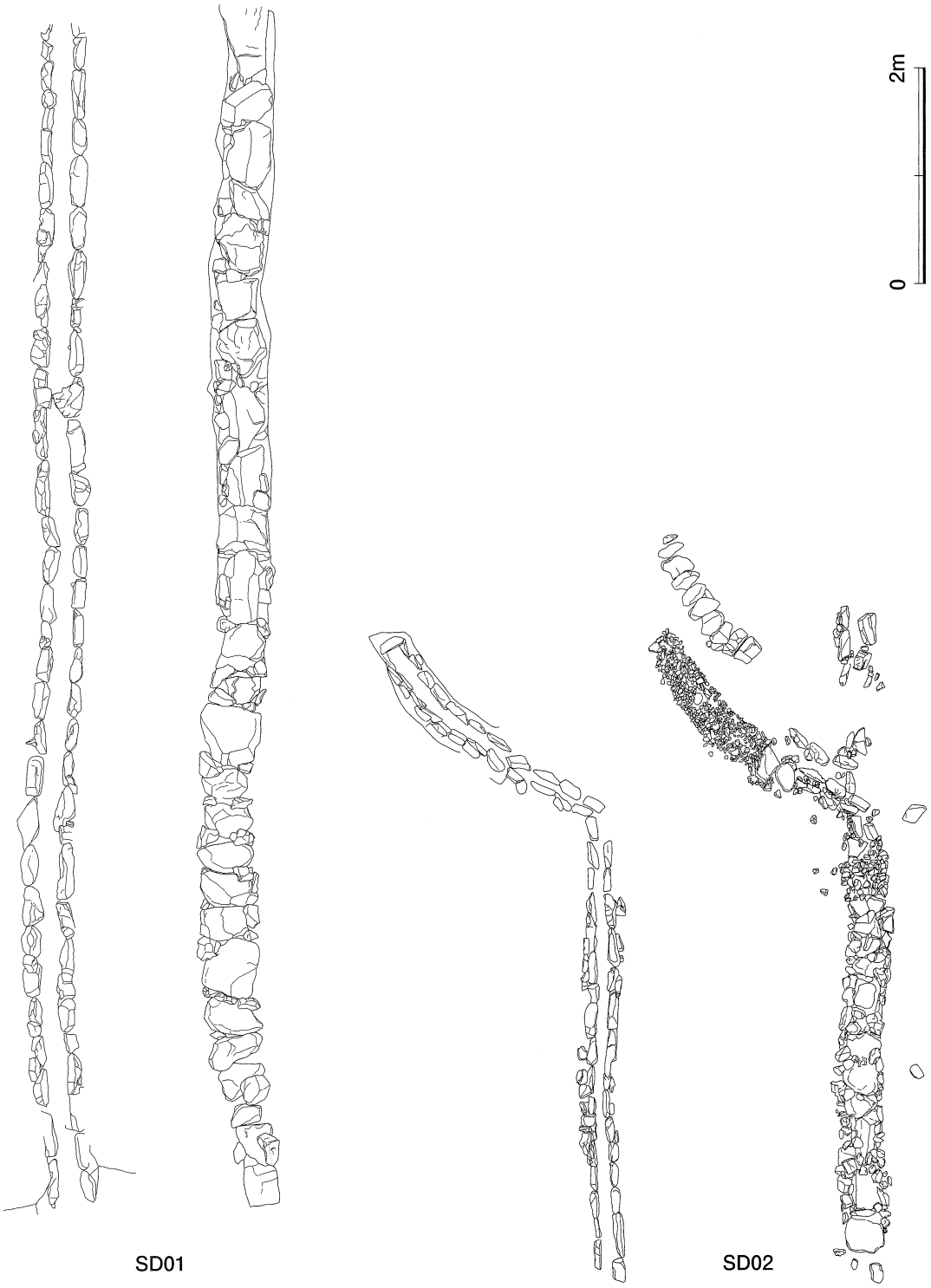
第14図　SK11・14、SX05 Pit17実測図（S＝1／30）

SB01（第15図）

第１ハイカ上面において、柱穴４穴を検出している。柱間は、1.8mから2.4mを測る。それぞれの柱穴は平面形が楕円形を呈しており、北西側の立ち上がりは緩い傾斜であり、その他は直立気味である。柱を立てる際に、柱を斜面の下部から斜めに差込み、直立させたためと思われる。深さ0.3mを測る。



第15図　SB01・02実測図（S＝1／60）



第16図　SD01・02実測図（S＝1／60）

SB02（第15図）

SB01の西側において検出した柱穴２穴である。軸方向は平行しない、平面形は長楕円形を呈している。長軸1.6m、短軸0.65mを測る。この柱穴も底面の位置が山側へやや偏った位置にある。

SD01（第16図）

第１黒色土に堀り込まれた溝で幅0.2m、深さ0.2mの溝が掘られ、その溝の両側面に河原石を並べ、上部に蓋をする形で石が置かれている。ハイカ層という火山灰に掘られた溝のため壁が崩れやすいために石で補強したものである。この溝の南東方向、斜面上部からは自然の湧水がみられる。

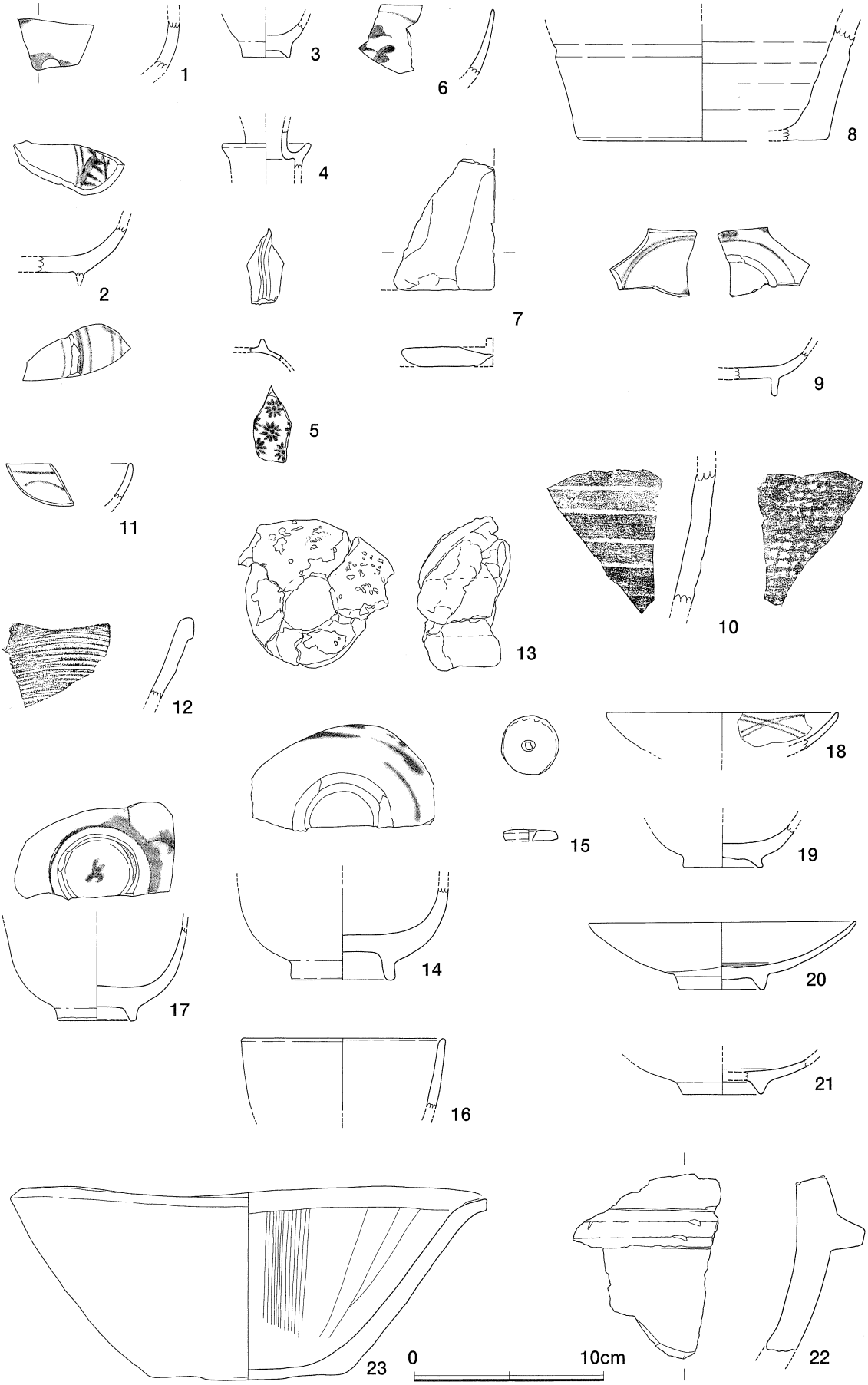
SD02（第16図）

SD01と同様に第１黒色土層に掘り込まれた溝であり、溝内に扁平な石を溝の側面に立て、上部にやや大きめの石で蓋をし、拳大から指頭大位の小石を隙間を埋めるようにして置かれている。溝は途中で折れ曲がっている。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区出土遺物（第17図）これらの遺物は土坑、粘土貼り土坑、ピットから出土している。12は捏ね鉢で、口縁部が玉縁状に肥厚し、内面に櫛描を施している。焼成は軟質である。23は擂り鉢で口径25cm、器高10cmを測る。内面には櫛状工具により、５本の擂り目が施されている。焼成は軟質であり時期は室町時代前半である。22は石鍋の口縁部の破片である。外面には突帯状に削り出されている。この時期は、室町時代である。８は備前系陶器の壺の底部である。この時期も室町時代である。１、２、６、９、11は肥前系磁器・碗であり、７は硯の破片で陸の一部分である。13

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調
17－1	Ⅱ区 粘土張り	陶磁器		小片					
17－2	Ⅱ区 粘土張り N－01	陶磁器		小片					
17－3	Ⅱ区 N2	陶磁器		小片					
17－4	Ⅱ区 粘土張り N－03			小片					
17－5	Ⅱ区 粘土張り No.4	陶磁器		小片					
17－6	Ⅲ区 粘土張り N－04	陶磁器		小片					
17－7	Ⅱ区 粘土張り		硯	小片					淡赤灰色
17－8	Ⅱ区 粘土張り06			小片				回転ナデ	外:灰褐色 内:赤灰色
17－9	Ⅲ区 粘土張り06	陶磁器		小片					
17－10	Ⅱ区 粘土張り06			小片				内:刺突痕。あて具痕か? 外:5条の沈線確認	淡赤褐色
17－11	Ⅲ区 粘土張り	陶磁器		小片					
17－12	Ⅱ区 SK02	須恵器	擂鉢	小片				内:スリメ　口縁端部:回転ナデ　外:回転ナデ後ナデ	淡灰色
17－13	Ⅱ区 N－06		羽口	小片					
17－14	Ⅱ区 SK11	陶磁器		小片					
17－15	Ⅱ区 SK27	土製品	紡錘車	小片					明茶褐色
17－16	Ⅱ区 SK32	陶磁器		小片				全面に釉がかかるが、釉のムラによって文様をつくっている。	淡黄緑の釉 胎土:灰色
17－17	Ⅲ区 SK33	陶磁器		小片					
17－18	Ⅱ区 PIT16	陶磁器	Ⅲ?	小片		12.2			
17－19	Ⅱ区 PIT16	陶磁器	碗?	小片				白釉ハケぬり。	
17－20	Ⅱ区 PIT16上	陶磁器	Ⅲ	小片	3.55	14.0		うわ薬かきとり。	
17－21	Ⅱ区 PIT23	陶磁器	碗?	1/2以下				うわ薬かきとり。	
17－22	Ⅲ区 E7	石器 (滑石)	石鍋	1/2以下				ノミ痕。	
17－23	Ⅲ区 PIT338	瓦質	擂鉢	完形	10.2	24.5		内:静止ナデ、すり目　口縁端部:回転ナデ　外:指頭によるナデ板状工具による圧痕。	灰～灰白色



第17図　Ⅱ・Ⅲ区　粘土張り土坑SK・Pit　出土遺物実測図（S=1／3）

は羽口の先端部分である。それ以外の遺物は肥前系の陶磁器類であり、主に18世紀代の時期のものである。1、2、6、9、11は磁器・碗である。これらの呉子の発色はやや薄い青色で輪郭もぼやけた状態である。14、17は陶胎染め付けの碗で器厚が厚く、文様も不明瞭である。18、21は磁器の皿で、20は陶器の皿である。10は肥前系陶器の甕の破片で内面に叩き痕が残る。15は素焼きの円盤状のものであり、中央に円形の穴があけられている。

Ⅲ区土器溜まり（第19図）

SD02の下層（第1黒色土）において10m×8mの範囲から縄文土器片約3,500点が出土している。この場所は谷状地形の出口となる場所であり、土器が集まったものと思われる。土器は土層堆積状況（第18図）をみると、1層の黒色土、3層の暗茶褐色土から出土しており包含層の厚さ50cmを測る。下層のほうが出土量が多い。平面的にみると大きく2カ所に集中地点があり、土器を取り除いたところ、第1ハイカ上面からピットを検出している。

無文粗製深鉢（口縁にキザミ）

第20図の土器は深鉢で口唇部にキザミを施しており、体部の内外面には条痕が残っている5、6、8以外は体部がやや内湾気味である。

刺突文を持つ無文深鉢

第21図1～3は口縁部がやや外反し体部に丸みを有している。4は、口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口縁部の上部に2列の刺突があり、口縁部と体部の境に2列の刺突を施している。第22図も口縁部の内側の端部からやや下に2列の刺突文が施されている。口縁部はやや外反している。1、5、7、8は細かな刺突である。第23図1～4は体部の外面に刺突文が施される。

無文深鉢

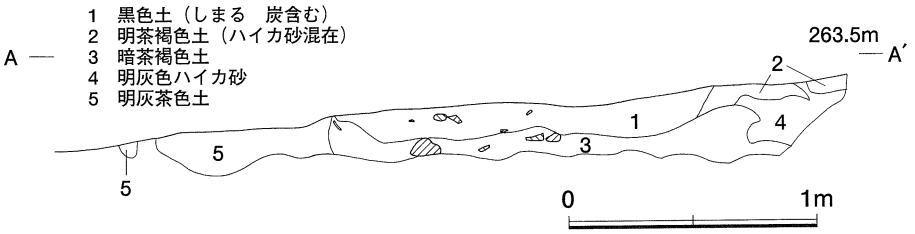
第23図5～9は内外面に条痕文を有している。5～7は口縁部が内湾し、8は内傾している。第24図は内外面に条痕文が残るものである。

無文深鉢（孔列）

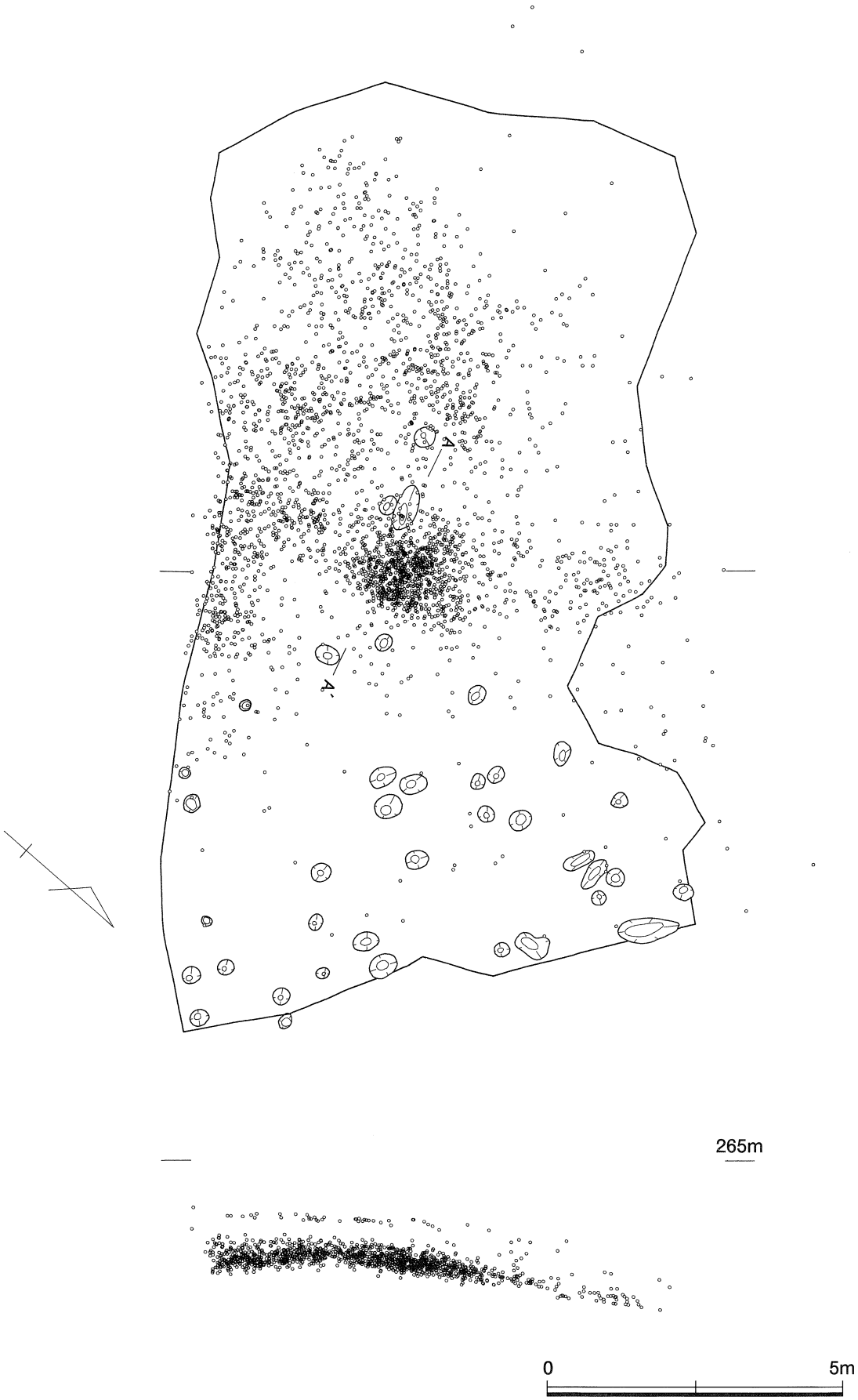
第25図1、2は口縁部の内側に径4mの円形の連続刺突が入れられ、外面にコブ状に突出した状態である。

突帯文土器

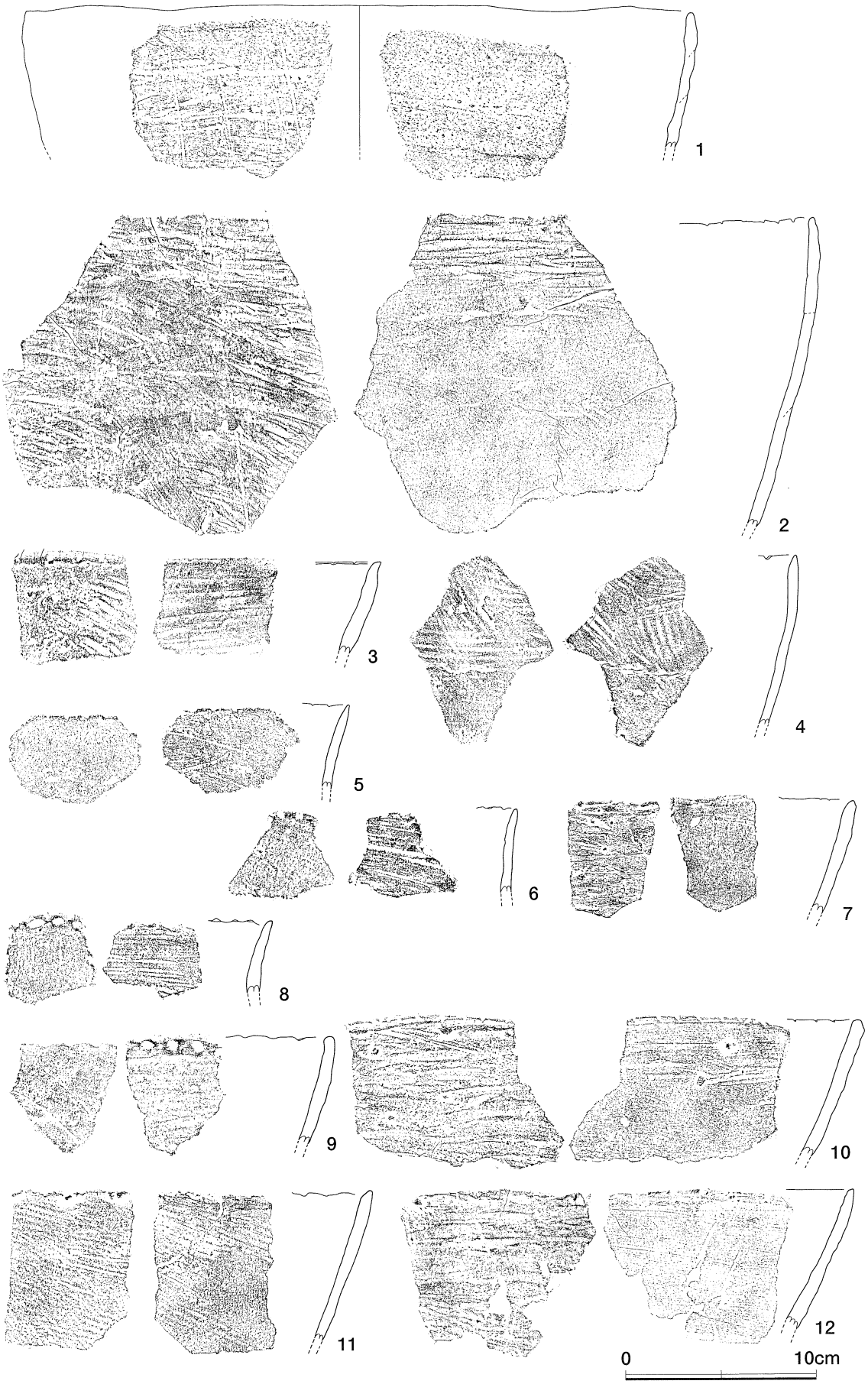
第26図1～4は、口縁端部と突帯にキザミを持つものである。6～18は突帯にキザミが施される。10、12の突帯はやや上向きに張り付けられている。



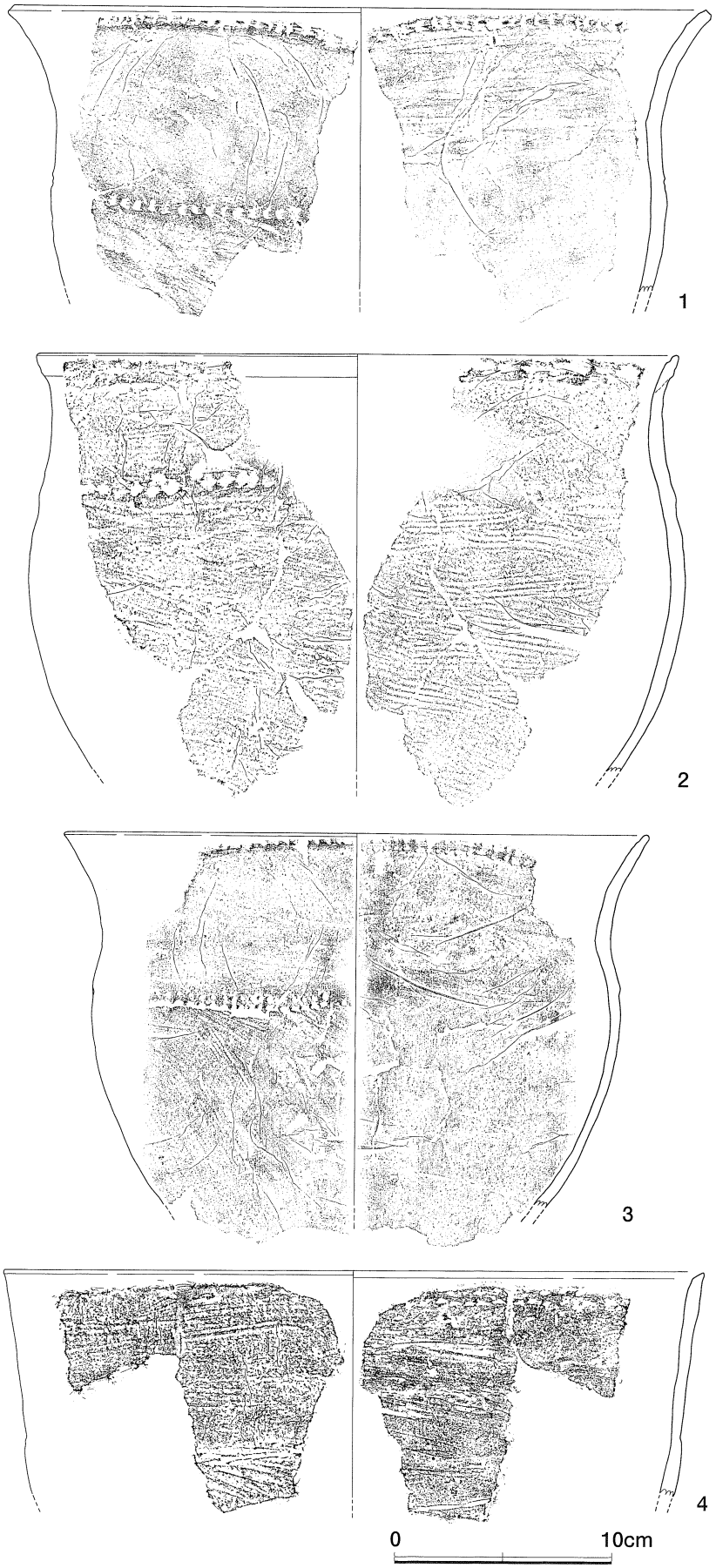
第18図　Ⅲ区土器溜まり土層断面図（S=1／30）



第19図　Ⅲ区土器溜まり遺物出土状況（S=1／100）



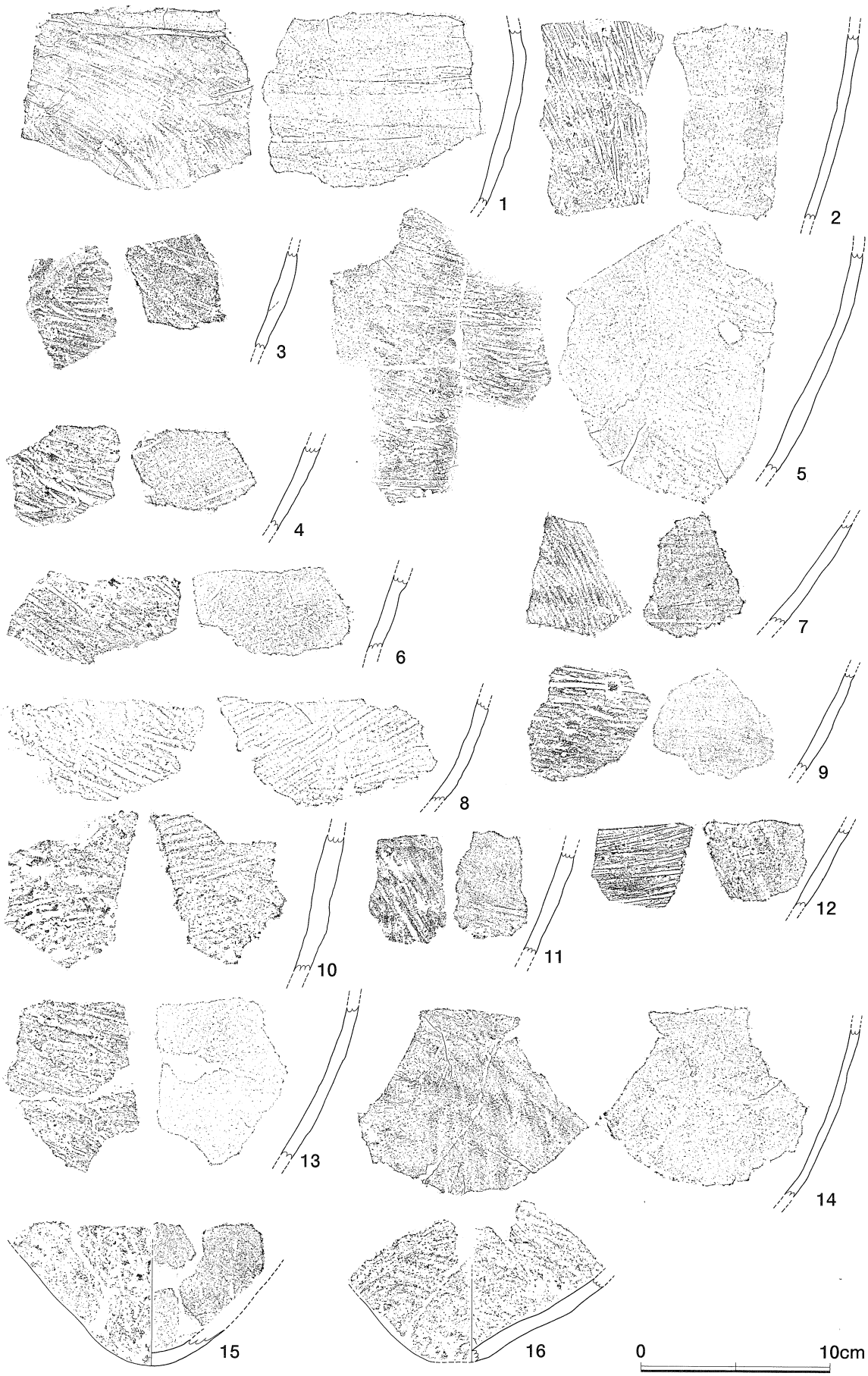
第20図　Ⅲ区第１黒色土　出土遺物実測図（S=1／3）



第21図　Ⅲ区第１黒色土出土遺物実測図（S=1／3）

第22図　Ⅲ区第１黒色土出土遺物実測図（S=1／3）

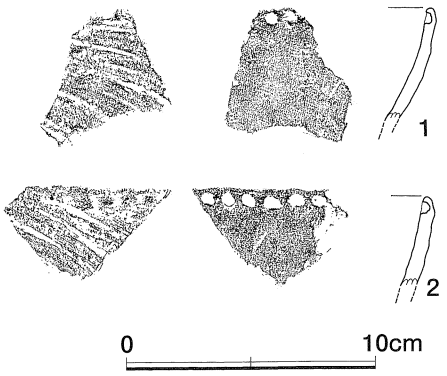
第23図　Ⅲ区第１黒色土出土遺物実測図（S＝1／3）



第24図　Ⅲ区第１黒色土出土遺物実測図（S=1／3）

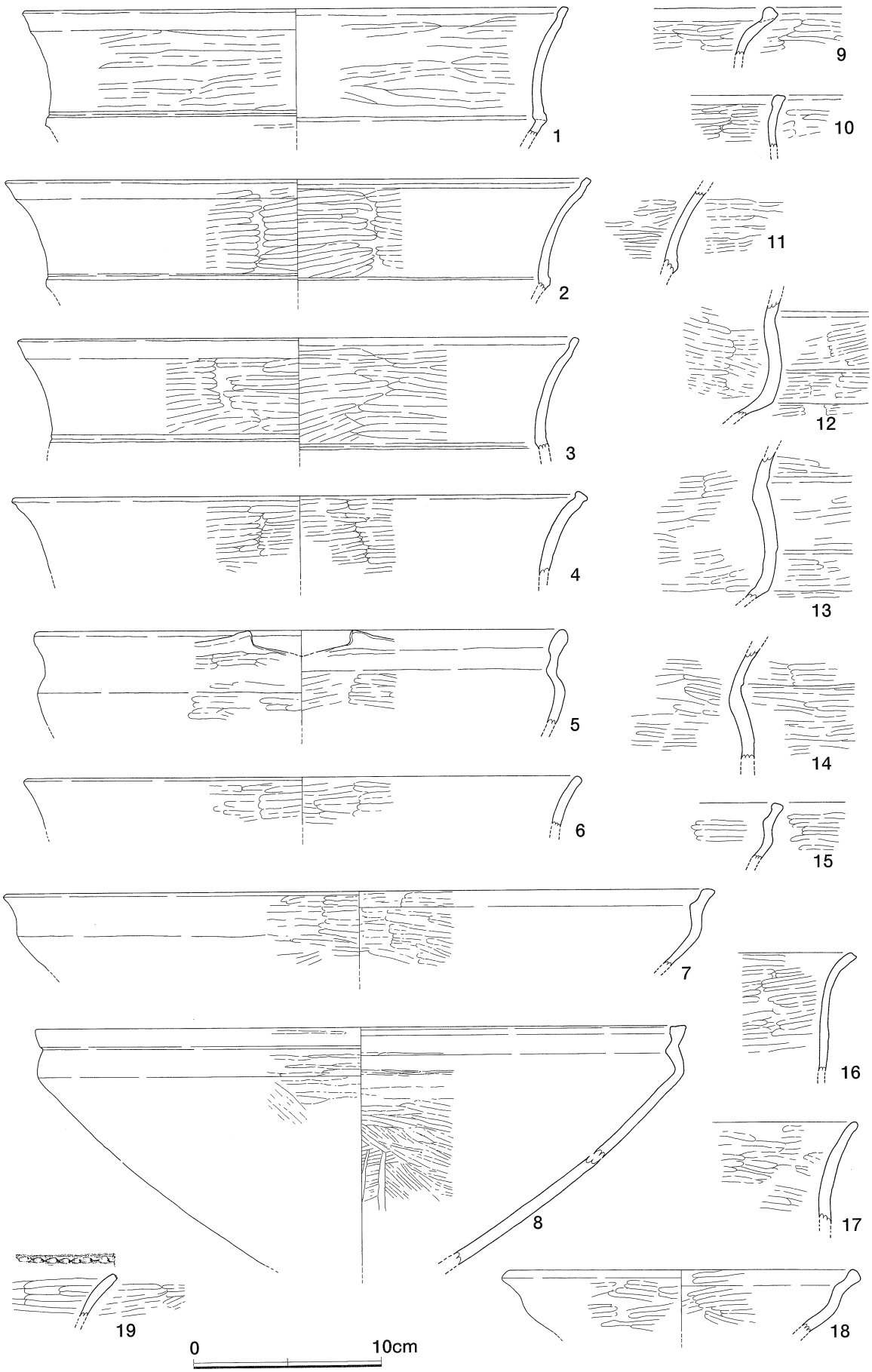
Ⅲ区第１黒色土出土縄文土器

挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	時期
20－1	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:黒褐色～橙褐色 内:黒褐色～橙褐色	晩期
20－2	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:暗褐色～黒褐色 内:暗褐色～黒褐色	晩期
20－3	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:淡橙色　内:灰茶褐色	晩期
20－4	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡橙色～灰褐色 内:灰色～灰褐色	晩期
20－5	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:ナデ　内:ナデ	外:淡橙色～茶褐色 内:淡橙色～茶褐色	晩期
20－6	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:茶褐色　内:灰褐色	晩期
20－7	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:ケズリ・ナデ　内:ナデ	外:黒褐色　内:黒褐色	晩期
20－8	E７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:暗橙褐色　内:茶褐色	晩期
20－9	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡橙色　内:暗褐色	晩期
20－10	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:ケズリ・ナデ　内:ナデ	外:黒褐色　内:黒褐色	晩期
20－11	E７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:黒褐色　内:暗褐色	晩期
20－12	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:暗褐色　内:暗褐色	晩期
21－1	F７	縄文	深鉢	1/2以下		32.0		外:ナデ・刺突文・ケズリ 内:条痕・ナデ	外:暗茶褐色 内:暗褐色	晩期
21－2	F７	縄文	深鉢	1/2以下		27.0		外:条痕・ナデ・刺突文 内:条痕・ナデ・ケズリ	外:淡褐色　内:灰褐色	晩期
21－3		縄文	深鉢	1/2以下		30.0		外:条痕・ミガキ・刺突文 内:ナデ	外:暗茶褐色 内:淡灰茶褐色	晩期
21－4	F７	縄文	深鉢	1/2以下		32.6		外:ケズリ　内:ケズリ	外:淡褐色　内:淡褐色	晩期
22－1	F７	縄文	深鉢	1/2以下		28.4		外:条痕・ナデ　内:条痕	外:淡茶褐色 内:淡灰茶褐色	晩期
22－2	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ　内:条痕・ナデ	外:淡灰褐色　内:暗灰褐色	晩期
22－3	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡明茶褐色 内:淡明茶褐色	晩期
22－4	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ　内:条痕	外:淡茶褐色　内:淡茶褐色	晩期
22－5	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:淡茶褐色　内:淡茶褐色	晩期
22－6	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡灰茶褐色 内:淡暗茶褐色	晩期
22－7	F７	縄文	深鉢	1/2以下		21.1		外:条痕　内:条痕	外:暗茶褐色　内:暗茶褐色	晩期
22－8	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ　内:条痕・ナデ	外:淡茶褐色　内:暗灰褐色	晩期
22－9	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ　内:条痕・ナデ	外:淡茶褐色　内:淡暗褐色	晩期
22－10	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:ナデ　内:条痕	外:淡明茶褐色 内:淡明茶褐色	晩期
22－11	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:淡暗褐色　内:淡暗褐色	晩期
22－12	F７	縄文	深鉢	1/2以下		23.0		外:条痕・ナデ 内:条痕・ナデ	外:淡茶褐色～暗茶褐色 内:淡茶褐色～暗茶褐色	晩期
23－1	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・刺突文 内:条痕	外:淡暗茶褐色 内:淡暗茶褐色	晩期
23－2	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:ナデ・刺突文 内:条痕・ナデ	外:淡明褐色 内:淡明褐色	晩期
23－3	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ミガキ・刺突文 内:ナデ	外:暗褐色～黒褐色 内:暗褐色～黒褐色	晩期
23－4	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・刺突文　内:条痕	外:淡暗茶褐色 内:淡暗茶褐色	晩期
23－5	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡茶褐色～淡暗茶褐色 内:淡橙色～茶褐色	晩期
23－6	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:暗褐色　内:淡暗灰褐色	晩期
23－7	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ　内:条痕	外:淡褐色　内:灰褐色	晩期
23－8	E７	縄文	深鉢	1/2以下		27.5		外:条痕　内:条痕・ナデ	外:淡茶褐色～橙褐色 内:淡茶褐色～橙褐色	晩期
23－9	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:淡褐色　内:灰褐色	晩期
25－1	F６	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ・刺突	外:単淡茶褐色 内:淡茶褐色	晩期
25－2	F７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ・刺突	外:淡暗茶褐色 内:淡灰茶褐色	晩期

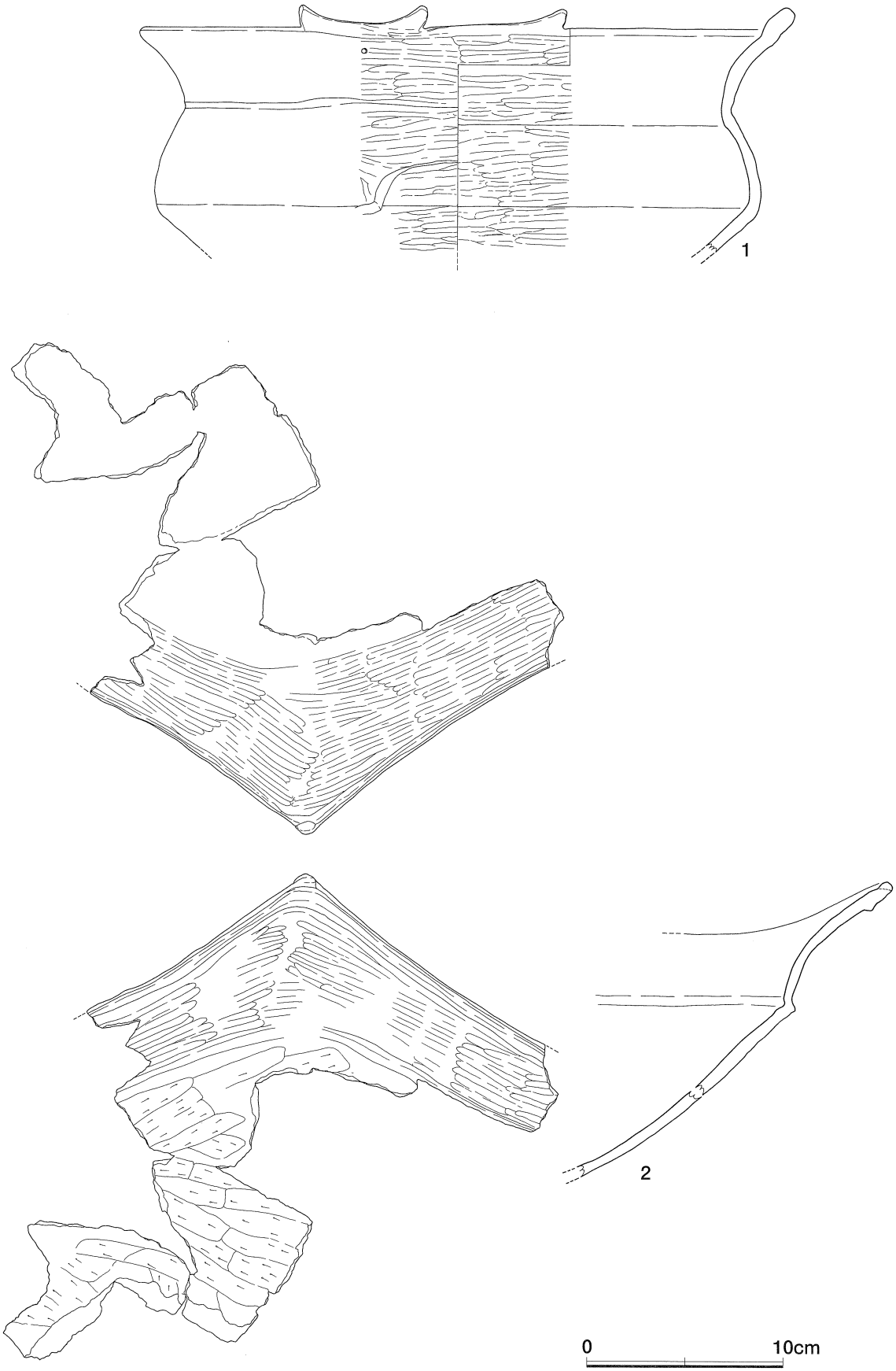


第25図　Ⅲ区第１黒色土出土遺物実測図（S＝1／3）

第26図　Ⅲ区第１黒色土出土遺物実測図（S=1／3）



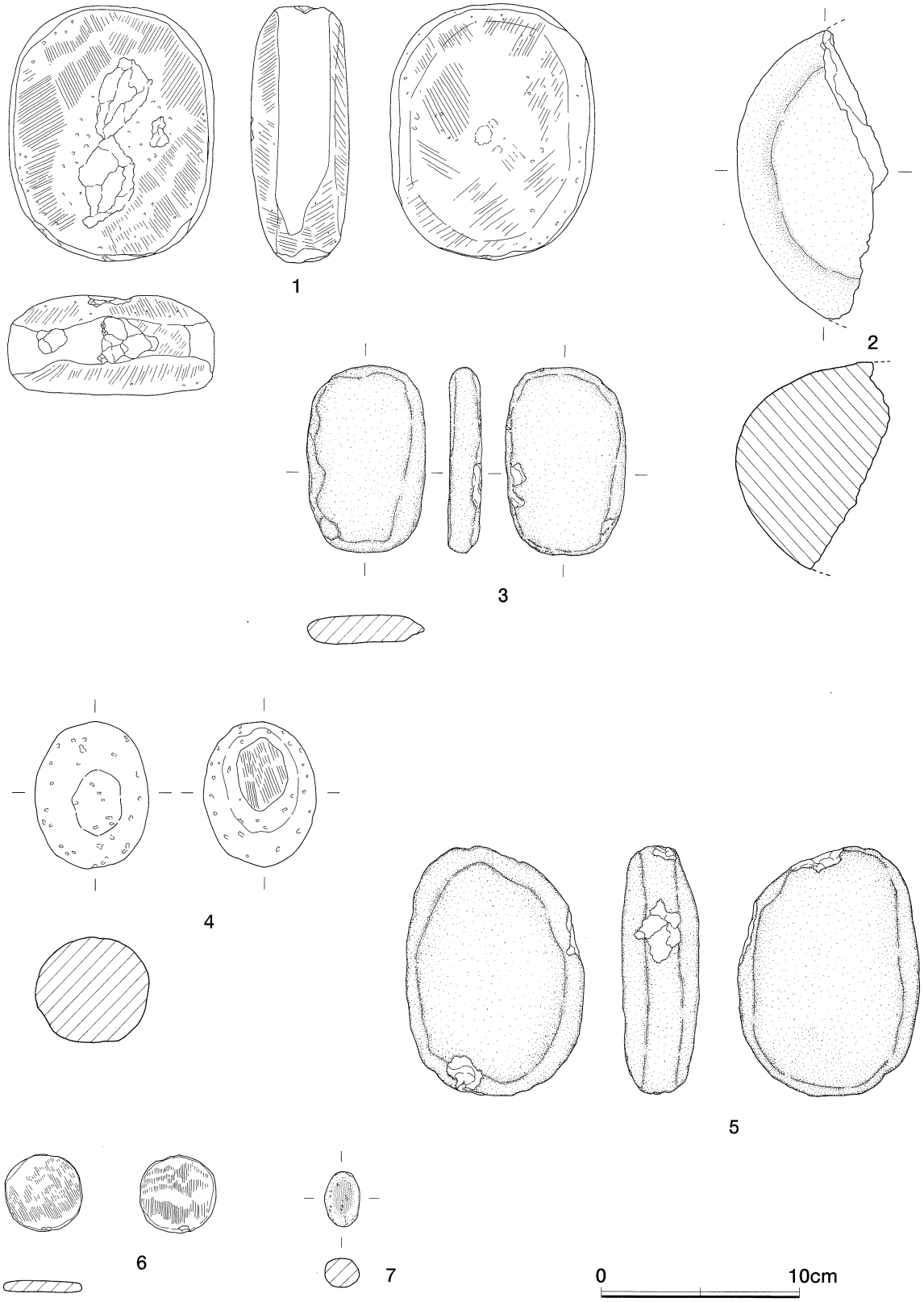
第27図　Ⅲ区出土遺物実測図（S=1／3）



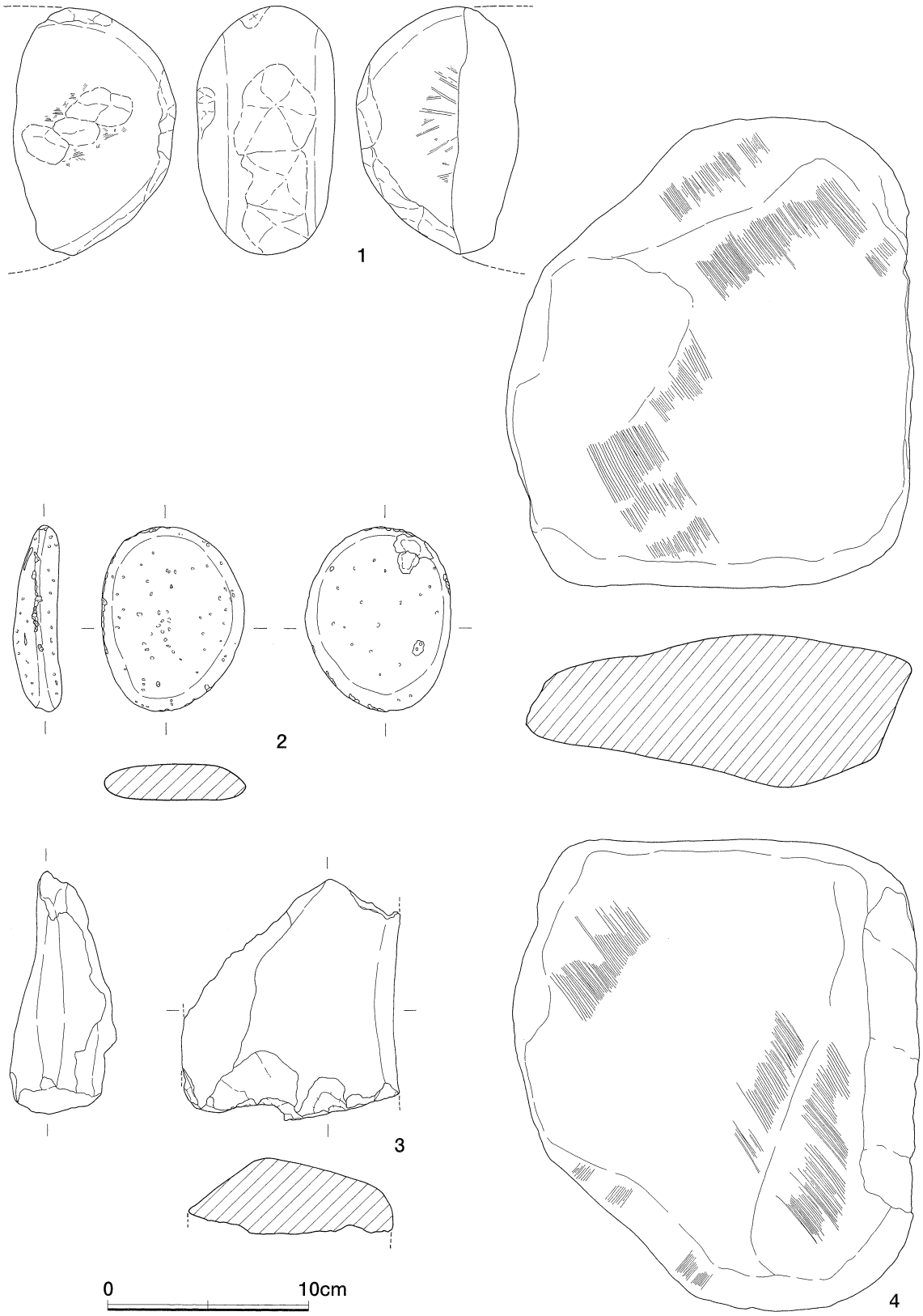
第28図　Ⅲ区出土遺物実測図（S＝1／3）

Ⅲ区第１黒色土出土縄文土器

挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	時期	備考
24－1	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:暗橙褐色 内:黒褐色	晩期	
24－2	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:黒褐色 内:暗橙褐色	晩期	
24－3	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:橙褐色 内:黒褐色	晩期	
24－4	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:暗橙褐色 内:黒色	晩期	
24－5	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:暗橙褐色 内:黒色	晩期	
24－6	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:黒褐色～暗褐色 内:黒褐色～暗褐色	晩期	
24－7	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:灰褐色 内:暗灰褐色	晩期	
24－8	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:黒褐色 内:暗褐色	晩期	
24－9	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:暗橙褐色 内:黒褐色	晩期	
24－10	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡暗褐色～黒褐色 内:淡暗褐色～黒褐色	晩期	
24－11	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:黒褐色 内:黒褐色	晩期	
24－12	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:黒褐色 内:黒褐色	晩期	
24－13	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:灰褐色 内:黒褐色	晩期	
24－14	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕・ナデ	外:暗茶褐色～黒褐色 内:暗茶褐色～黒褐色	晩期	
24－15	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:ナデ	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	晩期	
24－16	Ｆ７	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	晩期	
28－1	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗茶褐色 内:暗茶褐色	晩期	
28－2		縄文	浅鉢	1/2以下				外:ケズリ　内:ミガキ	外:淡暗茶褐色 内:淡暗茶褐色	晩期	
27－1	Ｅ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗茶褐色 内:淡茶褐色	晩期	
27－2	Ｅ７	縄文	浅鉢	1/2以下		29.5		外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗茶褐色 内:灰茶褐色	晩期	
27－3	Ｅ７	縄文	浅鉢	1/2以下		30.0		外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗褐色 内:暗茶褐色	晩期	
27－4	Ｆ６	縄文	浅鉢	1/2以下		28.0		外:ミガキ　内:ミガキ	外:黒褐色 内:黒褐色	晩期	
27－5	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下		29.6		外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗灰褐色 内:暗灰褐色	晩期	
27－6	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下		38.0		外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗灰褐色 内:暗灰褐色	晩期	
27－7		縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:灰褐色 内:暗灰褐色	晩期	
27－8	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗灰色 内:暗灰色	晩期	
27－9	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	晩期	
27－10	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡暗茶褐色 内:淡暗茶褐色	晩期	
27－11	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡暗褐色 内:淡暗褐色	晩期	
27－12	Ｆ６	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡暗褐色 内:淡暗褐色	晩期	
27－13	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡褐色 内:暗褐色	晩期	
27－14	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗灰褐色 内:暗灰褐色	晩期	
27－15		縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡明茶褐色 内:淡明茶褐色	晩期	
27－16	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ・条痕 内:ミガキ	外:淡暗茶褐色 内:淡暗茶褐色	晩期	
27－17	Ｆ７	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	晩期	
27－18	Ｆ６	縄文	浅鉢	1/2以下		18.4		外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡褐色 内:淡褐色	晩期	
30－1	Ⅲ区 F7 No.1607		磨石・たたき石		(長さ) 12.4	(幅) 8.1	(厚さ) 6.9	(重さg) 817.80			
30－2	Ⅲ区　盛土中		磨石・たたき石	完形	9.2	7.2	1.8	201.83			
30－3	Ⅲ区 埋土中		砥石		12.0	10.9	3.8	608.88			両端部を欠損する。
30－4	Ⅲ区 Ｆ７ No.197		石皿		23.6	20.3	7.7	6.50			
29－1	Ⅲ区 F7 No.1251		磨石・たたき石	完形	12.8	10.3	5.0	1,061.80			
29－2	Ⅱ区 法面 盛土中		石皿?	1/3	14.3	7.6	10.6	1,134.15			
29－3	Ⅲ区 盛土中		磨石	完形	9.2	6.0	1.4	143.00			
29－4	Ⅰ区 Ｅ10		磨石	完形	7.3	5.7	5.4	330.00			片面のみ使用。
29－5	Ⅲ区 Ｆ７ 盛土		石錘	完形	12.3	9.1	4.0	685.90			
29－6	Ⅲ区 Ｆ７		磨石?	完形	3.8	3.9	0.6	17.72			
29－7	Ⅱ区		磨石?	完形	2.7	1.7	1.7	9.96			
	Ⅴ区 J13 No.1038		磨石・凹石・たたき石	完形	11.4	9.1	2.9	391.00			
31－1	Ⅲ区 E7	弥生	甕			15.8		ナデ、横ナデ、ヘラ削り、ハケ目7本の沈線と波状文施される	淡褐色		
31－2	Ⅲ区 E7 No.580	弥生	甕			25.4		横ナデ、ハケ目後ナデ、ヘラ削り	淡褐色		
31－3	Ⅲ区 E7 No.185	弥生	?			8.2		ナデ、ハケ目	淡明褐色		
31－4	Ⅲ区 E7	弥生	甕					ナデ波状文施される	淡明褐色		
31－5	Ⅲ区 E7	土師器	椀			11.1		ハケ目後ナデ、不定方向のナデ	淡明褐色		
31－6	Ⅲ区 G5	弥生	甕?					横ナデ、ハケ目刺突文施される	淡褐色		
31－7	Ⅲ区 E7	土師器	椀?			12.6		ナデ、ヘラ削り	淡褐色		
31－8	Ⅲ区 E7 No.584	須恵器	蓋坏			11.2		回転ナデ	黒灰褐色		
31－9	Ⅲ区 No.573	須恵器	坏				3.7	回転ナデ	黒灰褐色		
31－10	Ⅲ区 F6 No.164	須恵器	高台付坏				9.2	回転ナデ、ナデ、回転糸切り	黒灰褐色		



第29図　Ⅲ区出土遺物実測図（S=1／3）



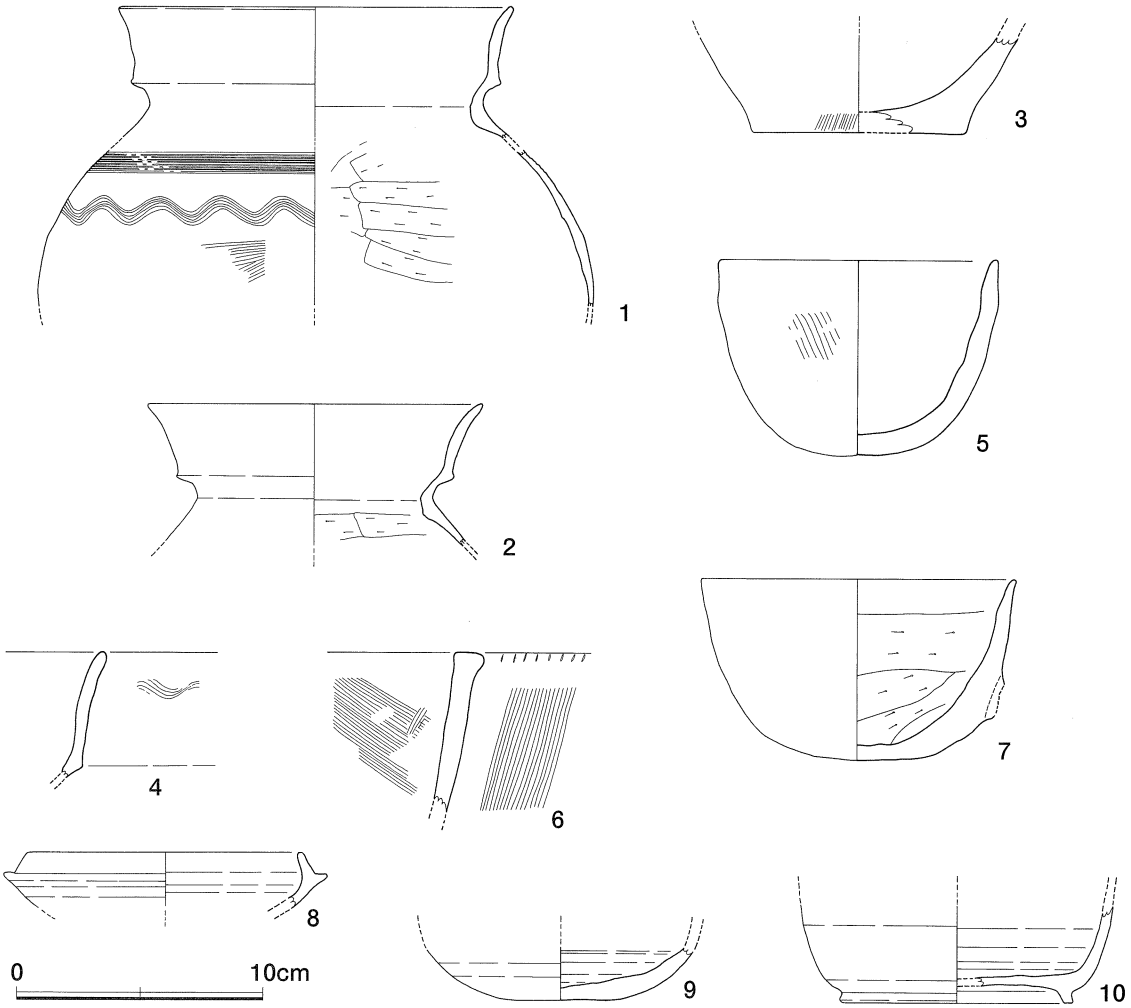
第30図　Ⅲ区出土遺物実測図（S＝1／3）

無文精製浅鉢

第27図は文様を持たず、内外面に丁寧なミガキを施す浅鉢である。1～4、9、10、11、16、17は頸部が屈曲し、比較的長い外傾する口縁部を有するものである。口縁端部はやや内側に傾斜している。5、7、8、15は頸部が屈曲し比較的短い口縁部を有している。5は口縁部に突起を有している、本来は両端が角状になるものと思われる。18は小形の浅鉢で口縁部が屈曲している。第28図1は頸部が屈曲し、口縁部が長く外反している。口縁端部に二重の突起を有し、突起の下には焼成後に穿孔し穴を開けている。体部の中程で屈曲している。内外面にミガキを施しており、外面を段状に磨いている。12、13、14は体部中程の破片で頸部が屈曲する部分の破片であり、内外面を丁寧にミガキを施している。

方形浅鉢

第28図2は、口縁部が大きく波状になり、上から見た場合に方形を呈している。器壁は黒色と灰白色を呈す黒色磨研系である。口縁部の内外面に沈線状にミガキを施し、頂部に突起状の膨らみを持たせている。口縁部の内外面をミガキ、体部外面をケズリ、内面をナデている精製土器である。



第31図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（S=1／3）

磨石・敲石・砥石（第31図）

第29図１は楕円形を呈しており、全面に擦痕が残る。上下の広い面がかなり平坦になっており、使用の跡が見られる。３、５も同様に楕円形で扁平な石であるが、全面に摩滅した状態である。２は川原石をそのまま使用したもので、円形の厚みのある石である。４は軽石と思われるもので、使用により摩滅し小さくなったものと思われる。６は円形で厚さ６mmに均一に仕上げられたものであり、周辺も丁寧に仕上げられている。第30図１は敲き石で片面と周囲に敲打痕が残っている。２は広い上下の面を磨り石として使用し、周囲を敲き石として使用している。３は砥石で全面を使用している。４も砥石状の使用をしたものと思われ、上下の面がかなり磨り減った状態である。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区第２ハイカ遺構面（第32図）

調査区の西側斜面では第１ハイカ層が流出しており斜面の途中にオドリ（第２黒色土直上の火山灰）と呼ばれる桃色の帯状の土層が確認される部分もある状態であった。また、第１ハイカ上面において検出していた土抗群のある斜面側は大きく削平を受けており、第２ハイカ層までケズリ込まれていた。

それ以外の部分では第２ハイカ層を検出する際に第２黒色土も残っており縄文土器が出土している。調査区の南側には丘陵上部へとつながる谷地形が確認されており、その中から縄文土器が石とともに出土している。調査区の西側では緩やかな傾斜の斜面から土器が点在する状態で出土している。

第２ハイカ上面においては明確な遺構は確認されず、土器、石器が出土しただけである。縄文時代に神戸川に面して傾斜していた状態であり、調査区の中央から北側にかけては急斜面となっていることが確認された。

第２黒色土層出土遺物（第33、34図）

第33図はⅠ区から出土した縄文土器である。

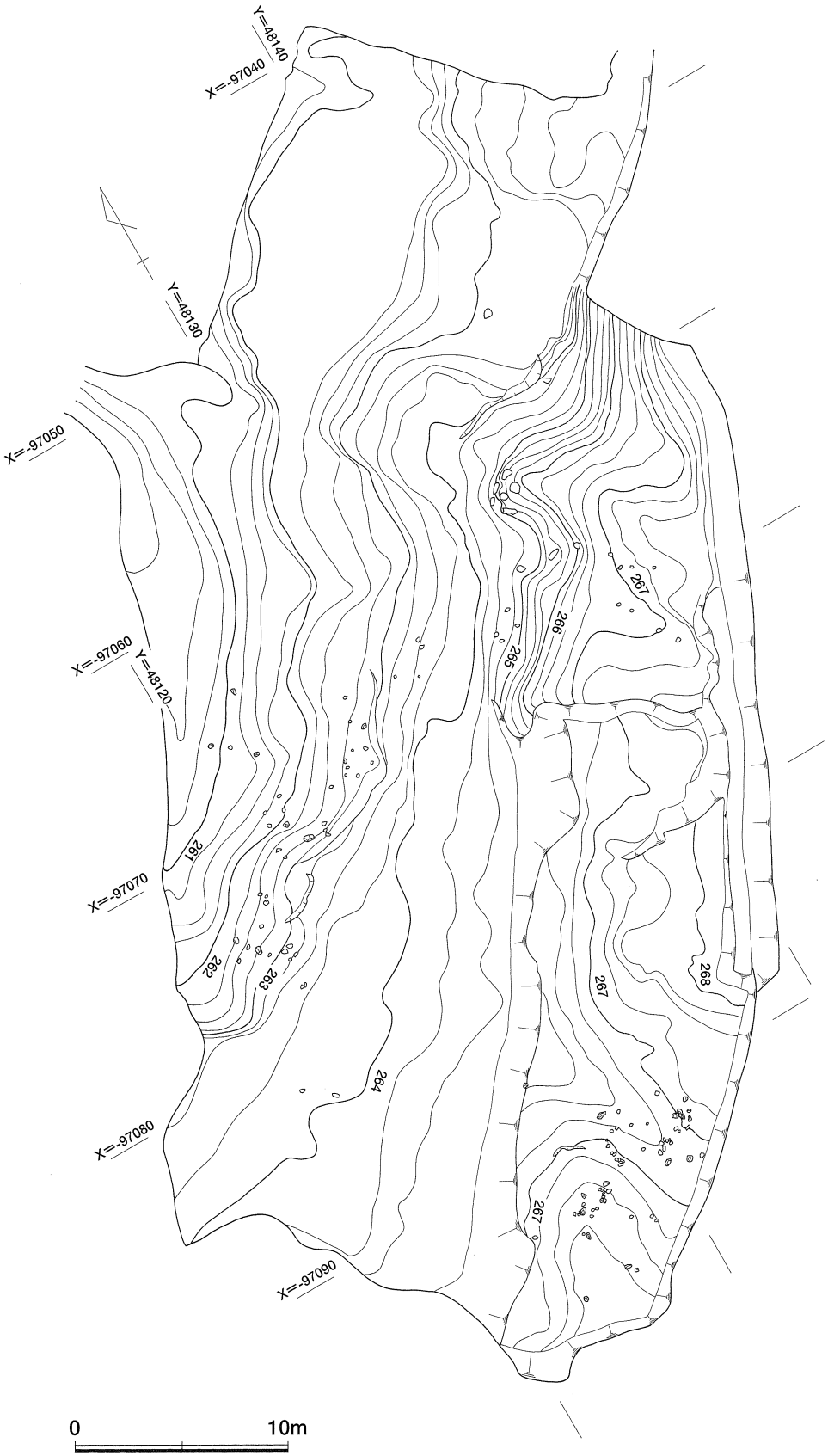
１は精製の浅鉢であり、内外面にミガキが施される。３～６は、外面に磨消縄文が施されている。板屋Ⅲ遺跡の第２黒色土の分類のⅤ類、福田ＫⅡ式に相当すると思われる。７、８は粗製深鉢で内外面に荒いナデ調整が施される。９、10は粗製深鉢で調整は２枚貝条痕が入る。11～13は底部の破片である。これらの土器の時期は縄文時代後期と考えられる。

第34図はⅡ区から出土した縄文土器である。

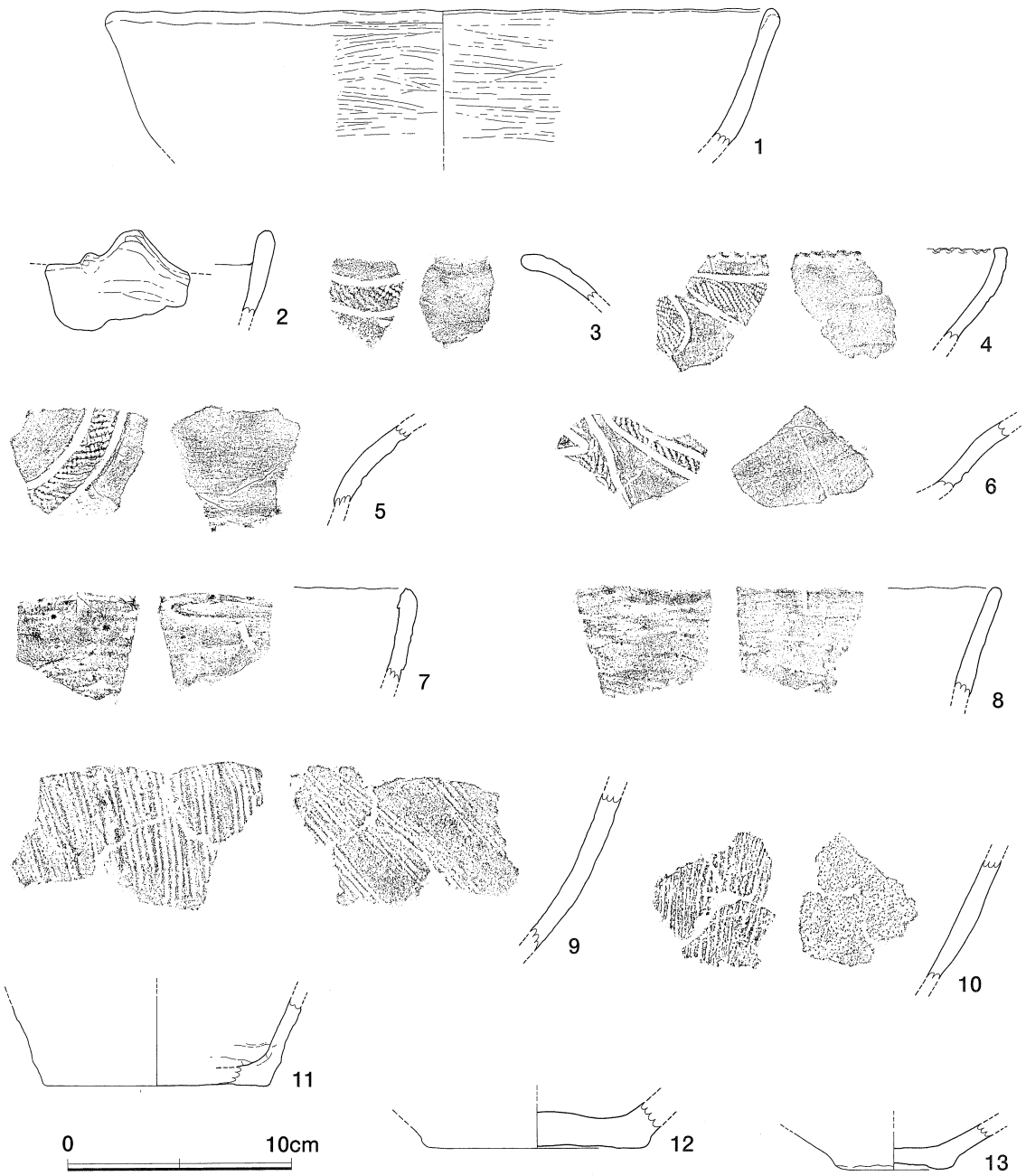
２、３は浅鉢で内外面に丁寧なミガキを施している。１、４、５、10は粗製深鉢で２枚貝条痕を施している。４は波状の口縁部である。６、７は外面に磨消縄文が施されており、板屋Ⅲ遺跡の第２黒色土の分類Ⅴ類、福田ＫⅡ式に相当する。８、９は底部で条痕の後ナデ調整を施している。これらの土器の時期は、縄文時代後期と考えられるものである。

第２黒色土出土石器（第35図）

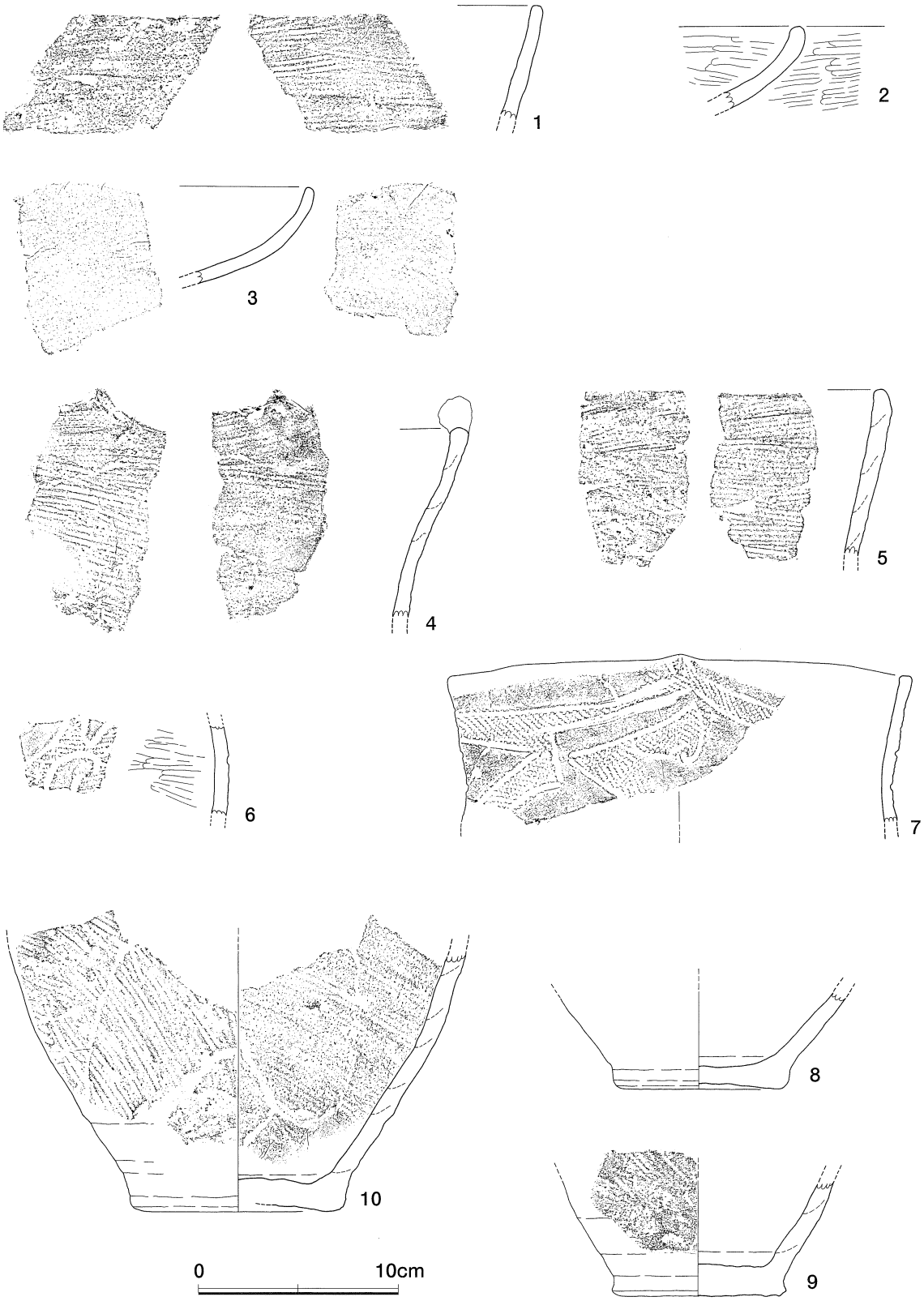
１～３は磨石である。１は扁平な楕円形を呈しており全面に摩滅しており使用の痕跡が見られる。２は河原石を使用したもので上下と周囲に使用痕跡が見られる。３は棒状の石で断面が三角形を呈している。三面ともに使用痕が残る。



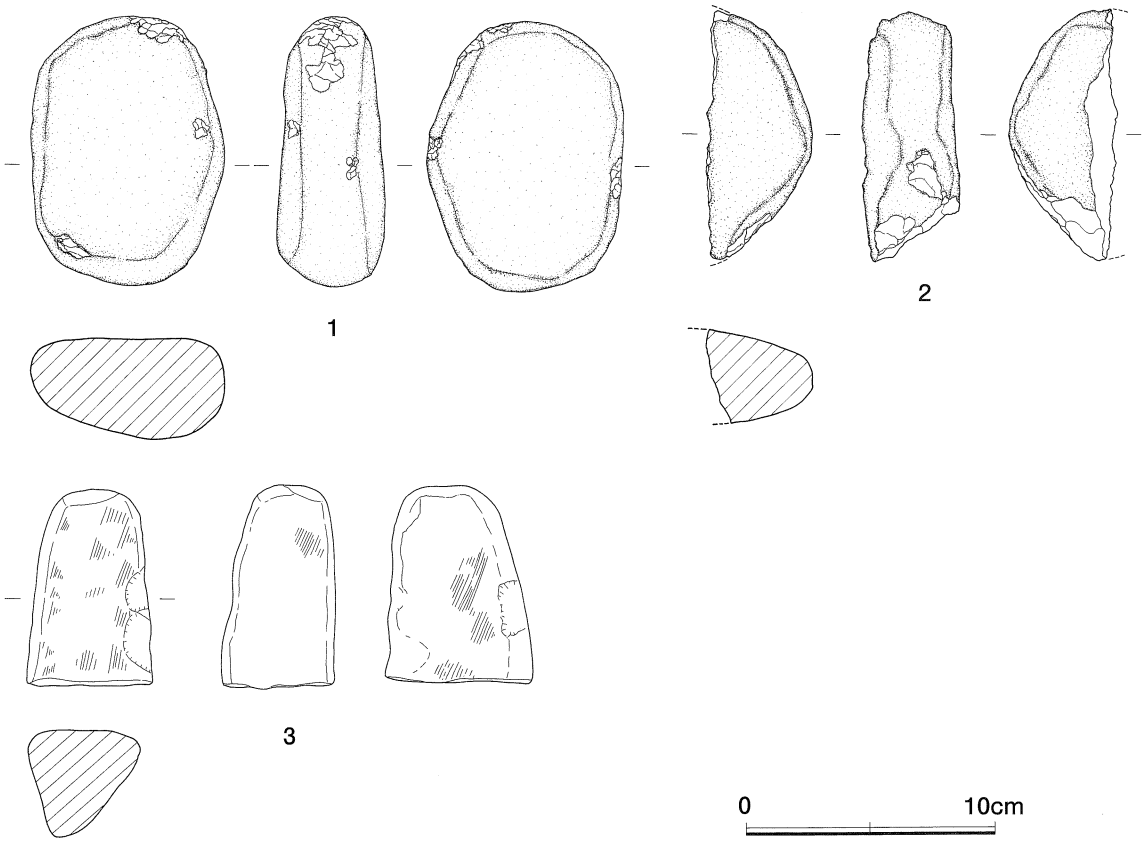
第32図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区第２ハイカ層調査後測量図（S＝1／300）



第33図　Ⅰ区第２黒色土出土遺物実測図（S=1／3）



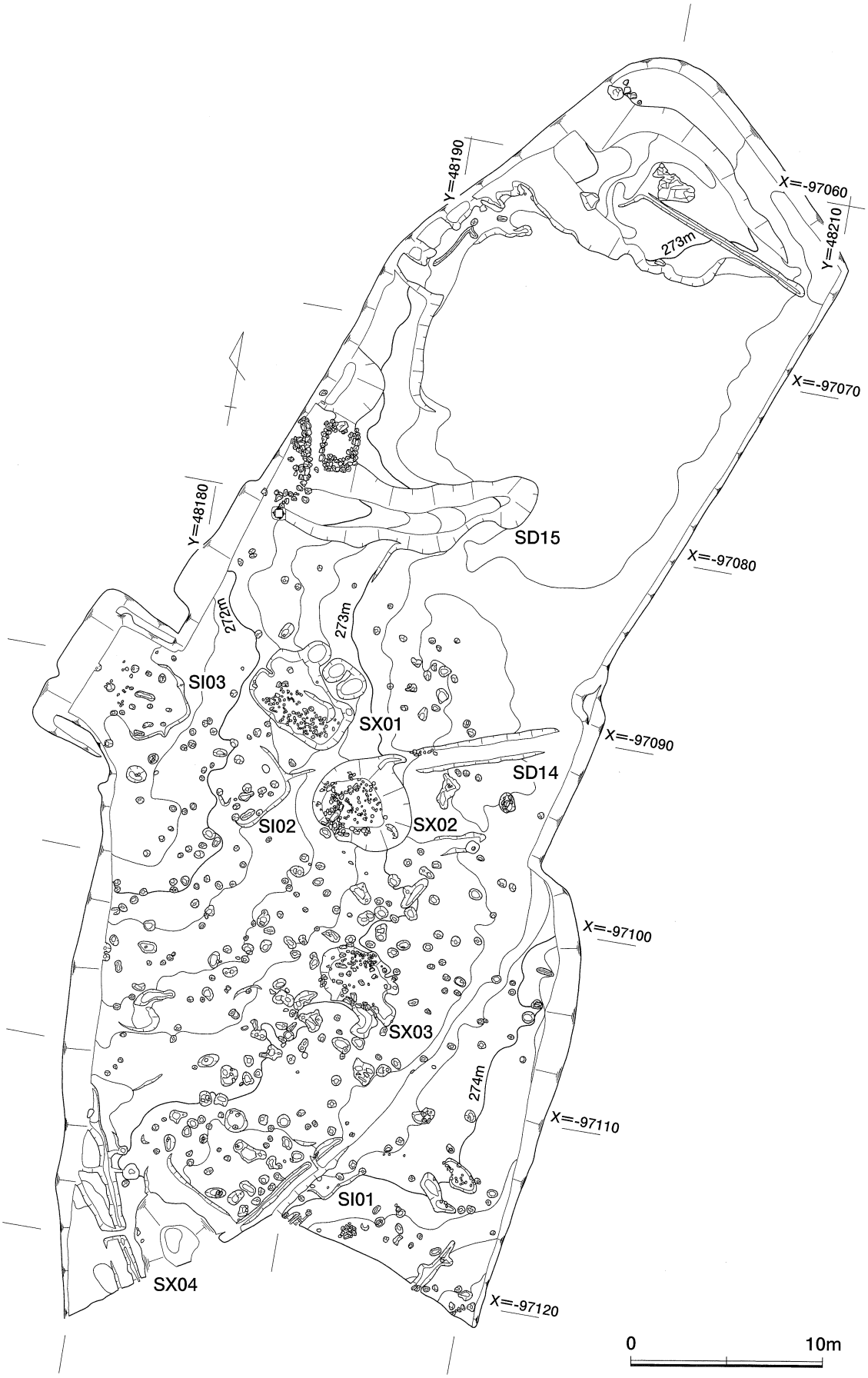
第34図　Ⅱ区第２黒色土出土遺物実測図（S＝1／3）



第35図　Ⅰ区・Ⅱ区第２黒色土出土遺物実測図（S=1／3）

Ⅰ区・Ⅱ区第２黒色土出土遺物

挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	時期	備考
33－1	D 11	縄文		1/2以下				外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	外:明灰色 内:明灰色	後期	
33－2	D 11	縄文	深鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:明灰色 内:明灰色	後期	
33－3	D 11	縄文		1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗褐色 内:暗褐色	後期	
33－4	E 11	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:明赤褐色 内:暗褐色	後期	
33－5	E 11	縄文		1/2以下				外:ミガキ　内:磨消	外:青桃色 内:暗褐色	後期	
33－6	E 11	縄文		1/2以下				外:縄文　内:ミガキ	外:赤褐色 内:黄白色	後期	中津式or 福田k2式
33－7	E 8	縄文		1/2以下				外:ナデ　内:ナデ	外:黒色 内:灰褐色	後期	外面すす 付着
33－8	D 11	縄文	深鉢	1/2以下				外:擦痕　内:ケズリ	外:明黄灰色 内:明黄灰色	後期	
33－9	D 11	縄文		1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:灰黄褐色 内:明黄褐色	後期	内面すす 付着
33－10	D 11	縄文		1/2以下				外:撚糸縄文　内:ナデ	外:赤褐色 内:赤褐色	後期	
33－11	D 11	縄文		1/2以下				外:指頭圧 内:指頭によるナデ	外:暗褐色 内:暗褐色	後期	
33－12	D 11	縄文		1/2以下				外:ナデ 内:指頭によるナデ	外:暗褐色 内:暗褐色	後期	
33－13	D 11	縄文		1/2以下				外:指頭圧　内:ナデ	外:赤褐色 内:赤褐色	後期	
34－1	P 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:ナデ　内:ナデ	外:黒褐色 内:黒褐色	後期	
34－2	C 9	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	後期	
34－3	C 9	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:淡明茶褐色 内:淡明茶褐色	後期	
34－4	C 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:灰茶褐色 内:明灰茶色	後期	
34－5		縄文	深鉢	1/2以下				外:ナデ　内:条痕	外:淡灰茶色 内:灰黄褐色	後期	
34－6	E 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:磨消　内:ミガキ	外:淡褐色 内:淡褐色	後期	中津式or 福田k2式
34－7	D 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:ナデ・摩消　内:ミガキ	外:淡明褐色 内:淡明褐色	後期	
34－8	D 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ 内:条痕・ナデ	外:暗灰橙色 内:明灰褐色	後期	
34－9	C 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ　内:ナデ	外:灰橙色 内:淡灰色	後期	
34－10	C 8	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ 内:条痕・ナデ	外:灰橙色 内:暗淡灰色	後期	
35－1	D 11 No.2098		磨石	完形	(長さ) 10.9	(幅) 7.9	(厚さ) 4.3	(重さg) 580.88			
35－2	C 9 No.4120		磨石	完形	10.1	4.3	3.3	213.12			打ち欠き部 は両短辺
35－3	D 11 No.2093		磨石	完形	7.9	5.1	6.0	244.41			



第36図　Ⅴ区第１ハイカ層遺構配置図（S＝1／300）

第Ⅴ調査区の調査（第36図）

第Ⅴ調査区は、平成９年度調査の３区の西側に当たり、平成10年調査の１区と一部重なる状態で調査を行っている。この場所は、新しい国道と現道をつなぐ仮設道路となるために、第１黒色土、第１ハイカ層上面、第２黒色土、第２ハイカ層上面の遺構面まで調査している。

層　序（第37図）

第Ⅴ調査区は、第Ⅰ調査区より東側に位置し、標高が12mほど高い位置であり、南北方向に平坦面が広がっている。第１ハイカ層の上面では、調査区の東側から西側に向けて傾斜している。調査区の北側はかなり削平を受けており平坦になっている。

調査区の中央部を東西に横断するように土層図を記録したところ、表土層の下に第１黒色土が厚さ40cmに堆積している。その下の第１ハイカ層は厚さは、２mを測りこの中には炭化した木材が含まれている。このハイカ層の下には一部で灰桃色層（オドリ）が薄く堆積している。この下に黒褐色土の第２黒色土があり、さらにその下が第２ハイカ層となっている。

第１ハイカ層上面において検出した遺構（第36図）

Ⅴ区においては、奈良時代の竪穴住居跡が古い時代の遺構であり、無数のピットが検出されているが時期は不明である。近世より新しい時代の遺構として、不明土坑４基、溝６が検出されている。

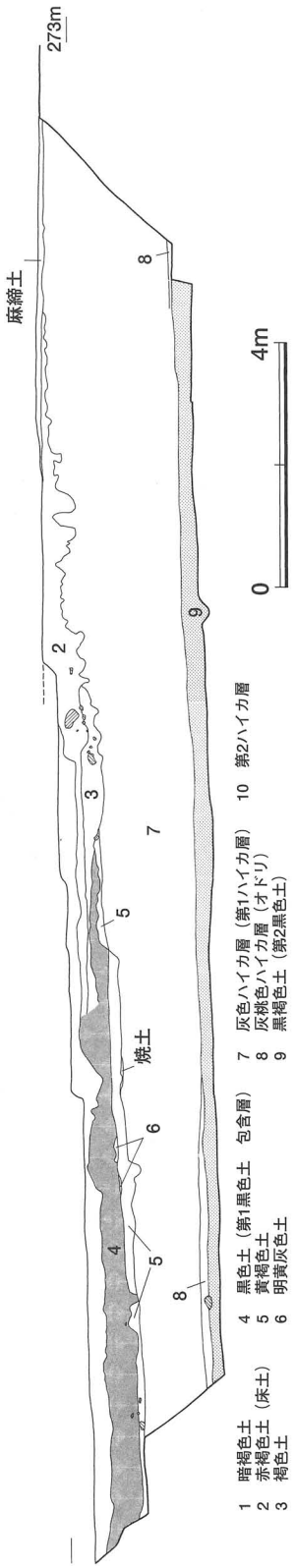
SI－01（第38図）

調査区の南側において検出している竪穴住居跡である。西側が削られており、全体の1／4が残るのみである。平面形は方形であり、東側の一辺の長さ2.6mを測る。掘り込み面の高低差は0.1mである。東側の床面には周溝が巡り、溝の底面の幅８cmを測る。床面において、ピット３を検出している。中央のピット（P－２）は主柱穴と思われ径0.25m、深さ0.8mを測る。その他の２穴は、深さが浅く主柱穴とは考えられないものである。

竪穴内からは、土師器片が僅かに出土しているが、器形を復元できるものは無かった。東側の周溝内からは、青銅製・帯金具の鉸具が出土している。出土した状態は、住居跡の壁近く、床面から多少浮いた状態であった。

SI－01出土帯金具（第39図）

金銅製で馬蹄形をした外形の中に「T」字形の刺金を填め込んだ状態のものである。外形の断面は円形で刺金の先端は平坦になっている。



第37図
Ⅴ区セクション実測図
（S＝1／120）

SI－02（第40図）

調査区の中央部のやや西側に位置している。第１黒色土を除去し、第１ハイカ層の上面において隅丸方形の竪穴住居跡を検出したもので、東側は削平によるものか、本来の地形が傾斜しておりハイカ層より上面の第１黒色土層中に掘り込み面があるものと思われ立ち上がりを検出していない。南東側の辺の長さは３mを測り、各辺の中央部はやや膨らんでいることから推定される長さは3.5mである。南東と南側のコーナーで周溝が残り、溝底の幅0.1mを測る。竪穴の深さは南東部分で0.2m、南側で0.15mである。

竪穴住居跡のプランを確認する前に覆土と思われた第１黒色土の上部において焼土層を確認している。この焼土の広がりは住居跡の西側半分を占めており、３m×２mの範囲であった。焼土の下はハイカの粒子を多く含むやや固めの黒色土が堆積していた。この焼土層に含まれた状態で土師器・甕（第41図10）が１個体出土している。住居跡の覆土中からは、須恵器が出土している。

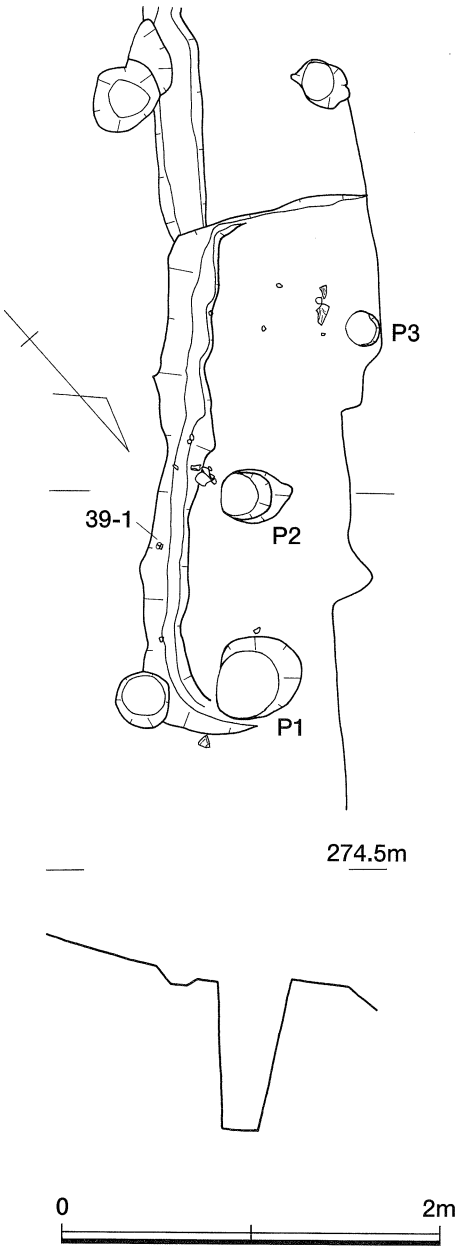
破片はかなり散らばった状態であり、床面に張り付いた状態のものは確認されていない。

竪穴に含まれると思われるピットは18穴確認しているが、主柱穴と確認できるものは３穴である。Ｐ１とＰ２の間は、長さ1.85m、Ｐ２とＰ３の間は長さ1.85mである。それぞれの床面からの深さはＰ１が0.2m、Ｐ２が0.45m、Ｐ３が0.2mである。Ｐ１とＰ２の底の標高はほぼ同様であった。これ以外のピットではＰ４、Ｐ５が深く0.5mあり、その他のピットは0.2m程度の浅いものであり柱穴とは確認できなかった。ピット中の覆土は、いずれも黒色土である。土で床面のほぼ中央部には0.5m×0.8mのやや大きめのピットが確認された。

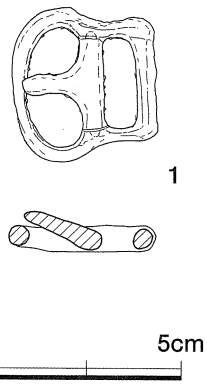
深さは浅く、中には明瞭な遺物も確認されていない。

SI－02出土遺物（第41図）

41－10は、土師器の甕で全形がわかるものである口径26cm、高さ25.5cmを測る。器高に比べて口径が大きい特徴を有している。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部に丸味を有している。体部の中央部に最大径があり全体的に丸みを持ち、底部も丸みを有している。器壁は全体的に厚く１cmを測る。口縁部の内外面



第38図　Ｖ区　SI01実測図（S=1／40）



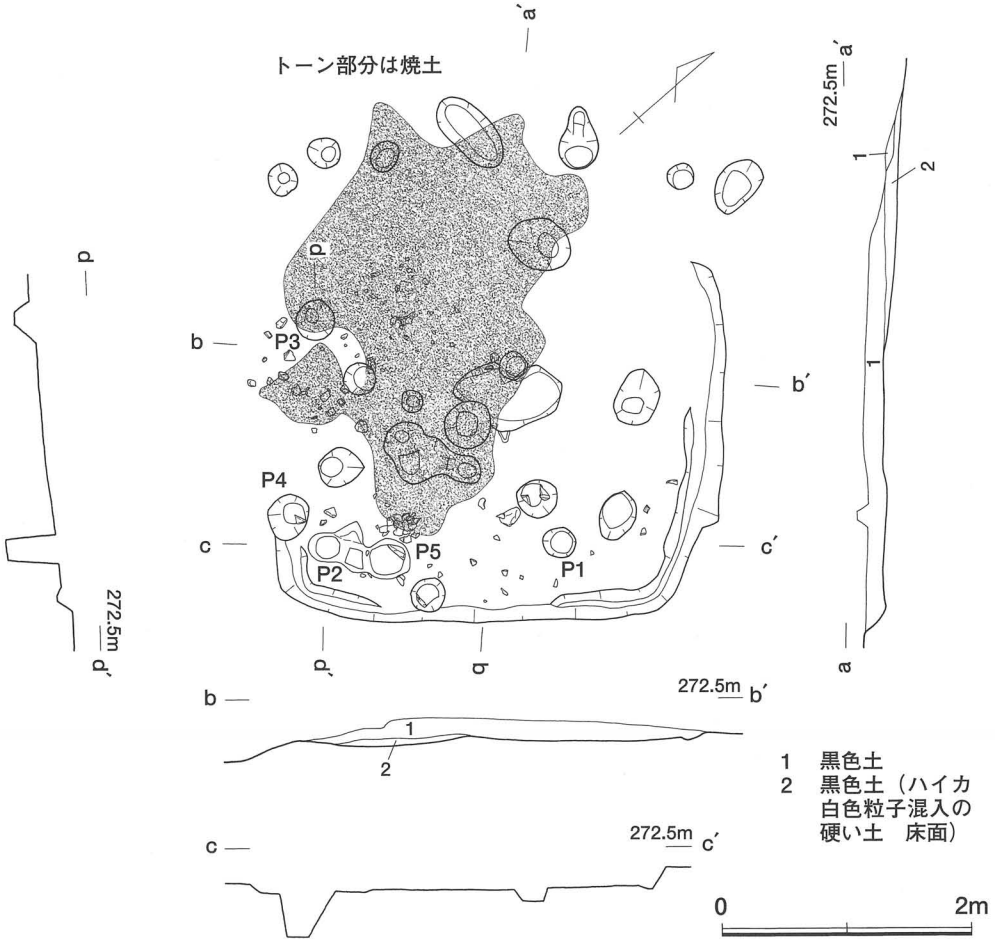
第39図　Ｖ区　SI01出土遺物実測図（S=1／2）

と体部の外面はナデ調整、体部の内面はヘラケズリを施している。

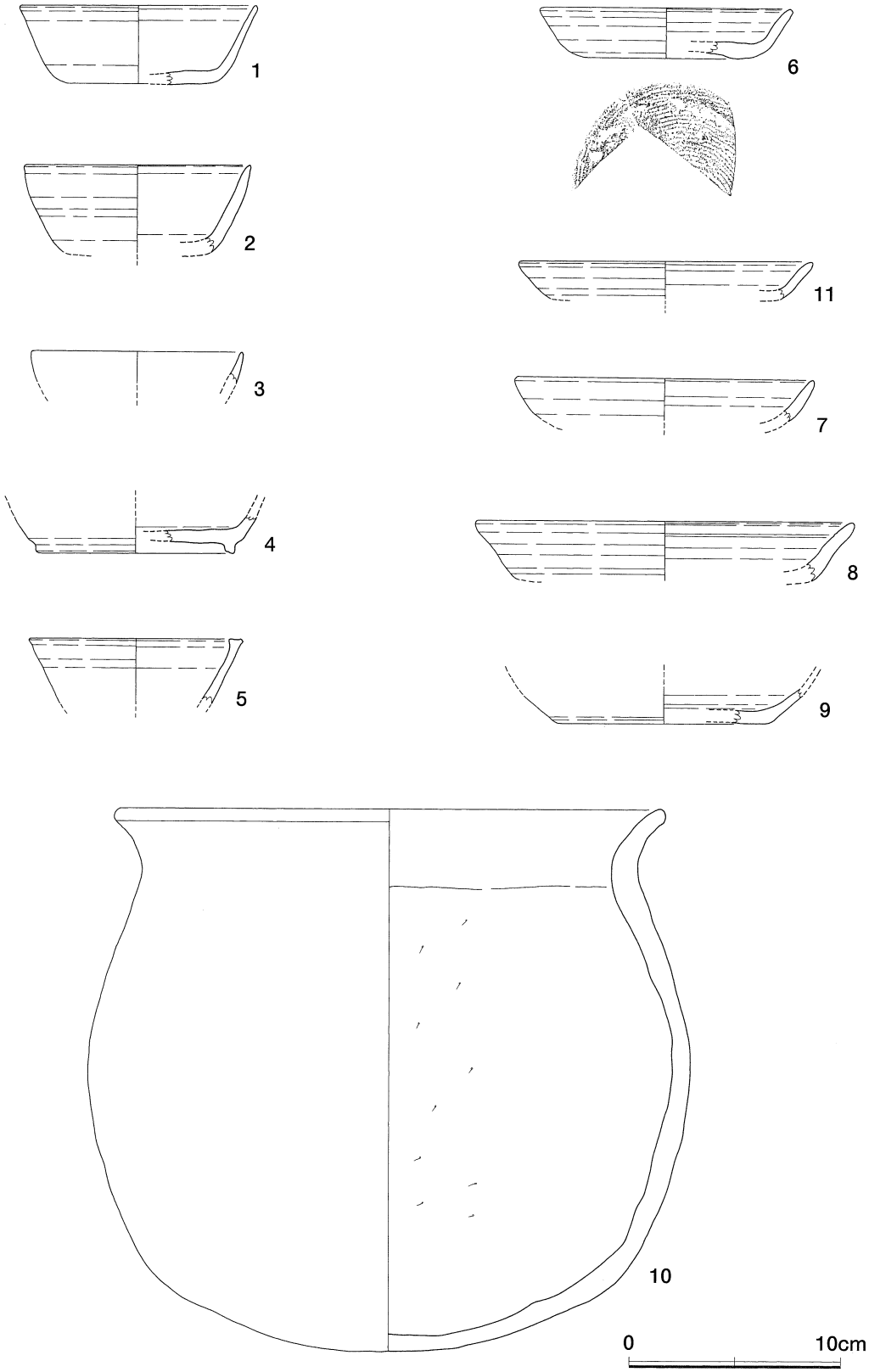
1～3は、須恵器・杯である。1、2は底部が平底で体部が直線的に口縁部に至る形態である。体部の内外面にヨコナデを施している。4は高台の付く杯である。6～8、11は皿である。6は底部外面に回転糸切り痕を残している。8は口径18cmと大きなものである。5は杯と思われるが、口縁端部が広がり、中央部が窪むようにナデられるという特異な形態である。9は、1～3の杯とは異なる形態の杯である。これらの須恵器の時期は、奈良時代である。

SI－02出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	備考
41－1	Ⅴ区 SI02 No.37	須恵器	坏		3.7	11.1	6.8	回転ナデ	明灰色	
41－2	Ⅴ区 SI02図 No.1	須恵器	坏			10.6		回転ナデ	暗灰色	
41－3	Ⅴ区 SI02	須恵器	坏			9.9		回転ナデ	淡灰色	外面自然釉
41－4	Ⅴ区 SI02 図No. 6	須恵器	高台付坏				9.2	回転ナデ	淡灰色	
41－5	Ⅴ区 SI02 No.980	須恵器	坏			10.0		回転ナデ	暗灰色	自然釉
41－6	Ⅴ区 SI02 No.36.40	須恵器	皿		2.39	11.8	7.2	内:不定方向のナデ、回転ナデ 外:回転ナデ、回転糸切り	暗灰褐色	
41－7	Ⅴ区 SI02 No.50	須恵器	皿			14.0		回転ナデ	明灰色	
41－8	Ⅴ区 SI02 No.51	須恵器	皿			17.8	10.0	回転ナデ	淡灰色	
41－9	Ⅴ区 SI02	須恵器	坏					回転ナデ	淡白色	
41－10	Ⅴ区 SI02	土師器	甕					内:ヘラ削り 外:横ナデ	明褐色	
41－11	Ⅴ区 SI02 図No.36	須恵器	皿			13.8		回転ナデ	暗灰色	



第40図 Ⅴ区 SI02実測図（S=1／60）



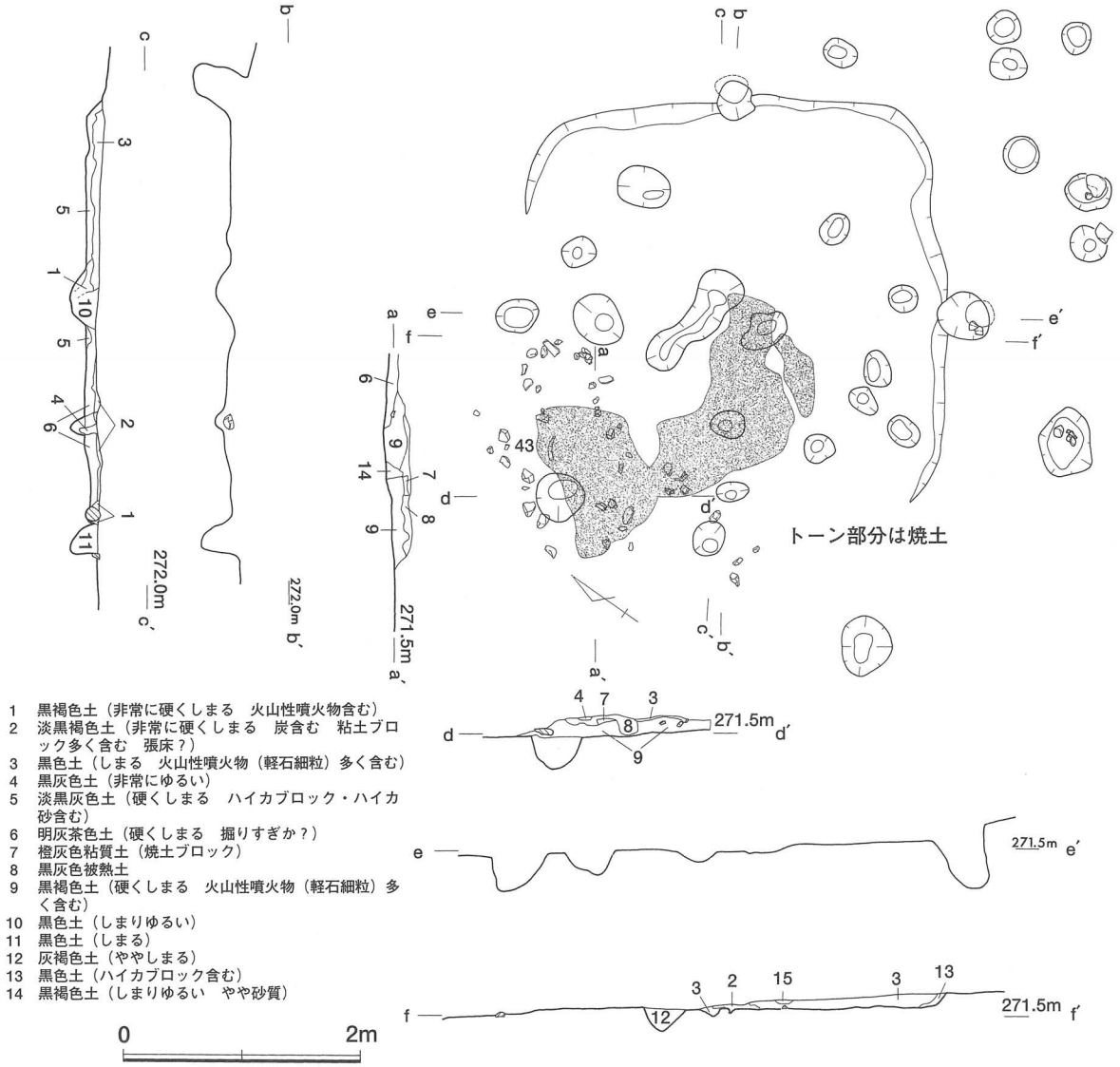
第41図　Ⅴ区SI02出土遺物実測図（S＝1／3）

SI－03（第42図）

調査区の中央部西側、SI－02の北西に隣接して位置する竪穴住居跡である。当初は南側の立ち上がりのみを確認しており、全貌を確認するために調査区を拡張している。竪穴住居の壁は東側半分のみ確認しているが、平面形は隅丸方形である。住居跡の上層において多量の遺物が出土しており、第１ハイカ層の検出面より上部の第１黒色土に掘り込み面があったと思われる。

住居の形態は、主柱穴が4本柱であり各柱穴が各辺の中央部に位置している。柱穴の中央部に壁がかかるような位置関係にあり、その位置から住居跡の規模を推定すると一辺の長さ3.8mである。壁の残存状況が良い北東辺は、高さ0.15mを測る。各柱穴の立ち上がりは内側に傾く状態であり、傾斜角55°を測る。この角度で柱が立ち上がると、柱の先端が住居の中央部で重なるようになり、上屋も特異な構造と考えられる。住居の中央部から西側にかけて焼土が広がっている。焼土は、床面上に黒褐色土が堆積し、その上に乗った状態である。

遺物は、須恵器、土師器と鉄鎌が住居の西側の床面から出土している。



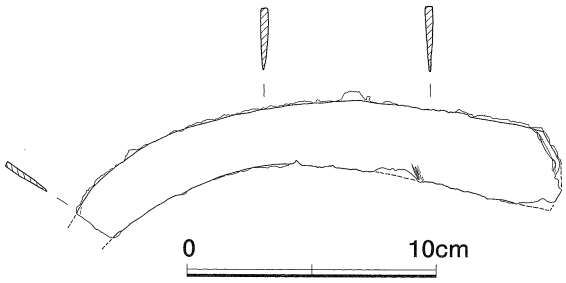
第42図　Ｖ区SI03実測図（S＝1／60）

SI－03出土遺物（第43、44、45図）

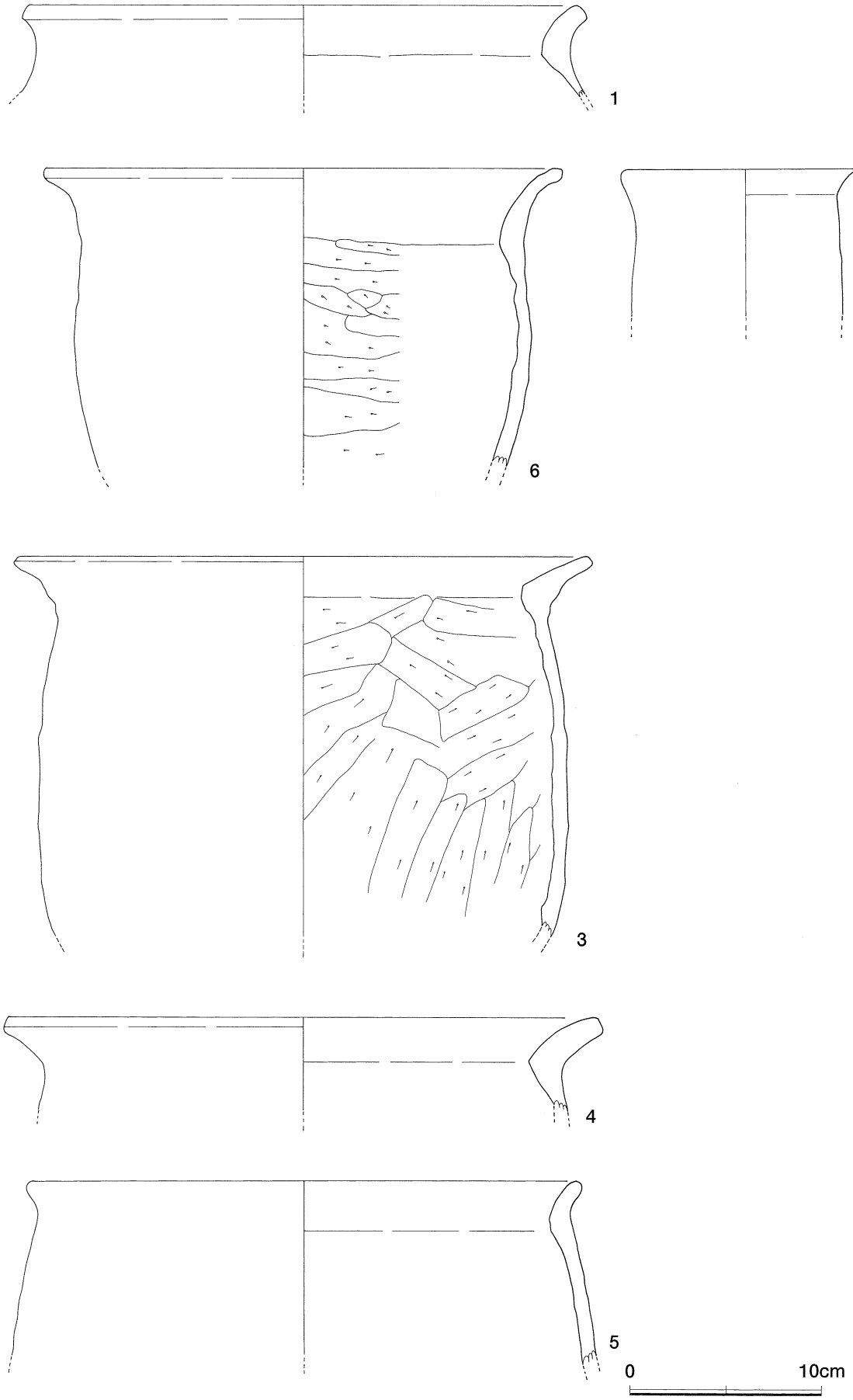
43図、44－１～４は土師器・甕である。44－３、４、６、45－１、３、４は口縁部が外反し「く」の字状に開いている。体部は張り出しが弱くやや長胴気味である。44－１、５は口縁部の屈曲が弱く、44－２は小型で口縁部と体部の厚さがほぼ同じである。45図５～20は須恵器である。５、６は杯で底部に糸切り痕を残す。体部に丸味を有し、口縁部近くで屈曲している。７～14は杯で体部が直線的に開き口径に比べ器高が低いものである。15は蓋で口縁部が折り返されている。16、20は高台の付く杯である。17～19は皿であり、18は底部に回転糸切り痕を残す。19は口径が大きく、盤と呼ぶべきものである。21は棒状の磨り石である。43図は鉄鎌であり、刃部の先端を欠いており、基部が折り返されている。全体的に湾曲している。

SI－03出土遺物観察表

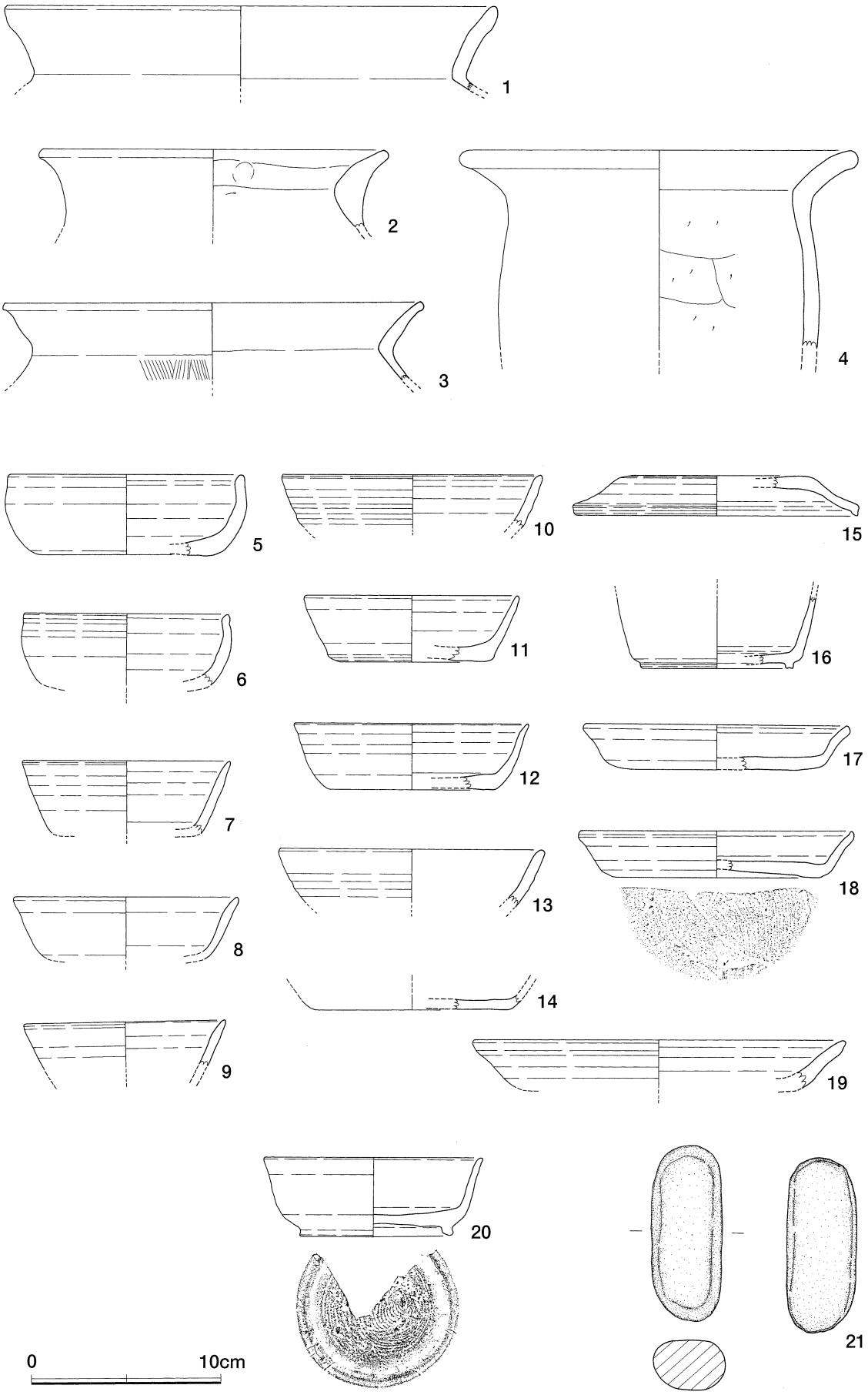
挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	備考
44－1	Ⅴ区 SI03	土師器	甕			29.6		内:横ナデ後ナデ、ヘラ削り 外:横ナデ、ナデ	暗褐色	
44－2	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			13.0		内:横ナデ後ナデ、ヘラ削り? 外:横ナデ	灰色	
44－3	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			30.2		内:横ナデ後ナデ、ヘラ削り 外:横ナデ後ナデ、指ナデ	淡茶褐色	
44－4	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			30.9		内:横ナデ後ナデ、ヘラ削り後ナデ 外:横ナデ後ナデ	淡茶褐色	
44－5	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			28.8		内:横ナデ、ヘラ削り後ナデ 外:横ナデ、ナデ	明茶褐色	
44－6	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			27.0		内:横ナデ、ヘラ削り 外:横ナデ、指ナデ	暗褐色	
45－1	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			26.6		内:横方向の櫛描き後ナデ 外:横ナデ	明褐色	
45－2	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			18.0		内:ナデ、ケズリ後ナデ	黒褐色	
45－3	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			22.2		内:ヘラ削り　外:横ナデ、ハケ目	暗褐色	
45－4	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	甕			21.0		内:横ナデ、ヘラ削り 外:横ナデ、ナデ	暗褐色	
45－5	Ⅴ区 SI03 No.1719、1725	須恵器	坏		4.2	12.2		回転ナデ	暗灰色	
45－6	Ⅴ区 SI03 I11 No.1739、833	須恵器	坏			10.8		回転ナデ	暗灰色	
45－7	Ⅴ区 SI03 No.1713	須恵器	坏			10.9		回転ナデ	淡灰色	
45－8	Ⅴ区 SI03	須恵器	坏			11.8		回転ナデ	明灰色	
45－9	Ⅴ区 SI03 No.1833	須恵器	坏			10.6		回転ナデ	黒灰褐色	
45－10	Ⅴ区 SI03 P6 No.1713	須恵器	坏			13.6		回転ナデ	明灰色	
45－11	Ⅴ区 SI03 No.1858	須恵器	坏					回転ナデ	明灰色	
45－12	Ⅴ区 SI03 No.1713	須恵器	坏			12.3	8.9	回転ナデ	明灰色	
45－13	Ⅴ区 SI03 上1黒	土師器	坏			14.0		横ナデ、回転ナデ	暗褐色	
45－14	Ⅴ区 SI03 No.1696	須恵器	坏				10.2	内:回転ナデ　外:ナデ	明灰色	
45－15	Ⅴ区 SI03 No.1754	須恵器	蓋坏		2.1	14.8		内:回転ナデ後ナデ　外:回転ナデ	明黒灰褐色	
45－16	Ⅴ区 SI03 No.1924	須恵器	高台付坏				7.8	回転ナデ	明灰色	
45－17	Ⅴ区 SI03 I10 No.1927、1810	須恵器	Ⅲ		2.3	13.7	10.4	内:不定方向のナデ、回転ナデ　外:回転ナデ、回転ナデ後不定方向のナデ	灰白色	
45－18	Ⅴ区 SI03 No.1925、1928	須恵器	Ⅲ		2.4	14.2	10.8	回転ナデ　底部:回転糸切り	灰白色	
45－19	Ⅴ区 SI03 No.1723	須恵器	盤			19.4		回転ナデ	淡白色	
45－20	Ⅴ区 SI03 上 No.1782、1714	須恵器	高台付坏		4.2	11.5	8.1	内:回転ナデ　外:回転ナデ、高台取り付け後回転ナデ、回転糸切り後ナデ	黒灰褐色	
45－21	Ⅴ区 SI03 上1黒 No.1787	石器	磨石					最大長:9.1cm、最大巾3.7cm、最大厚2.8cm、重量:166.3g		
43－1	Ⅴ区 SI03 No.1	鉄製	鎌							



第43図　Ⅴ区SI03出土遺物実測図（S＝1／3）



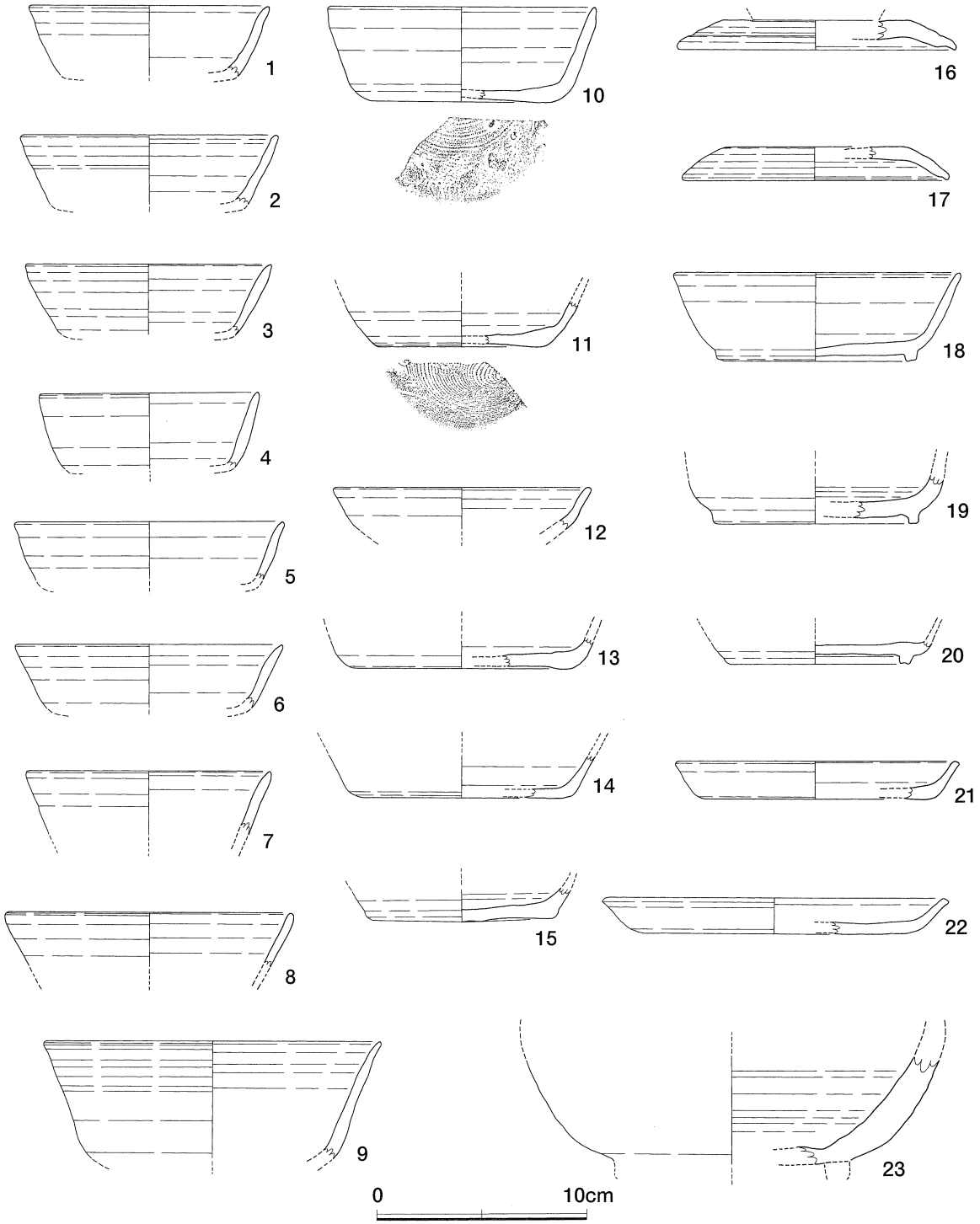
第44図　Ⅴ区SI03出土遺物実測図（1）（S=1／3）



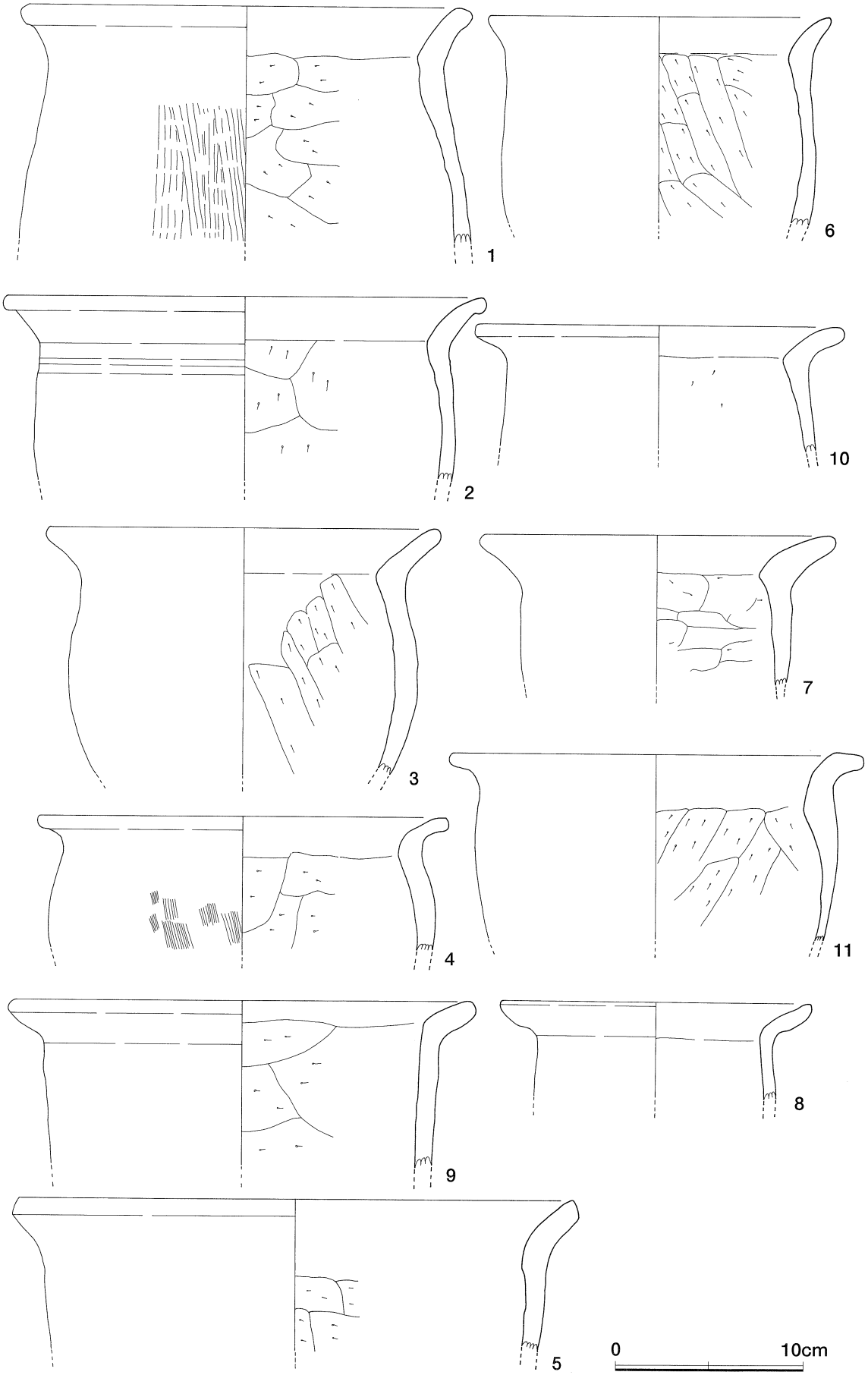
第45図　Ⅴ区SI03出土遺物実測図（2）（S=1／3）

SI03周辺（I－10、11区）出土遺物（第46～48図）

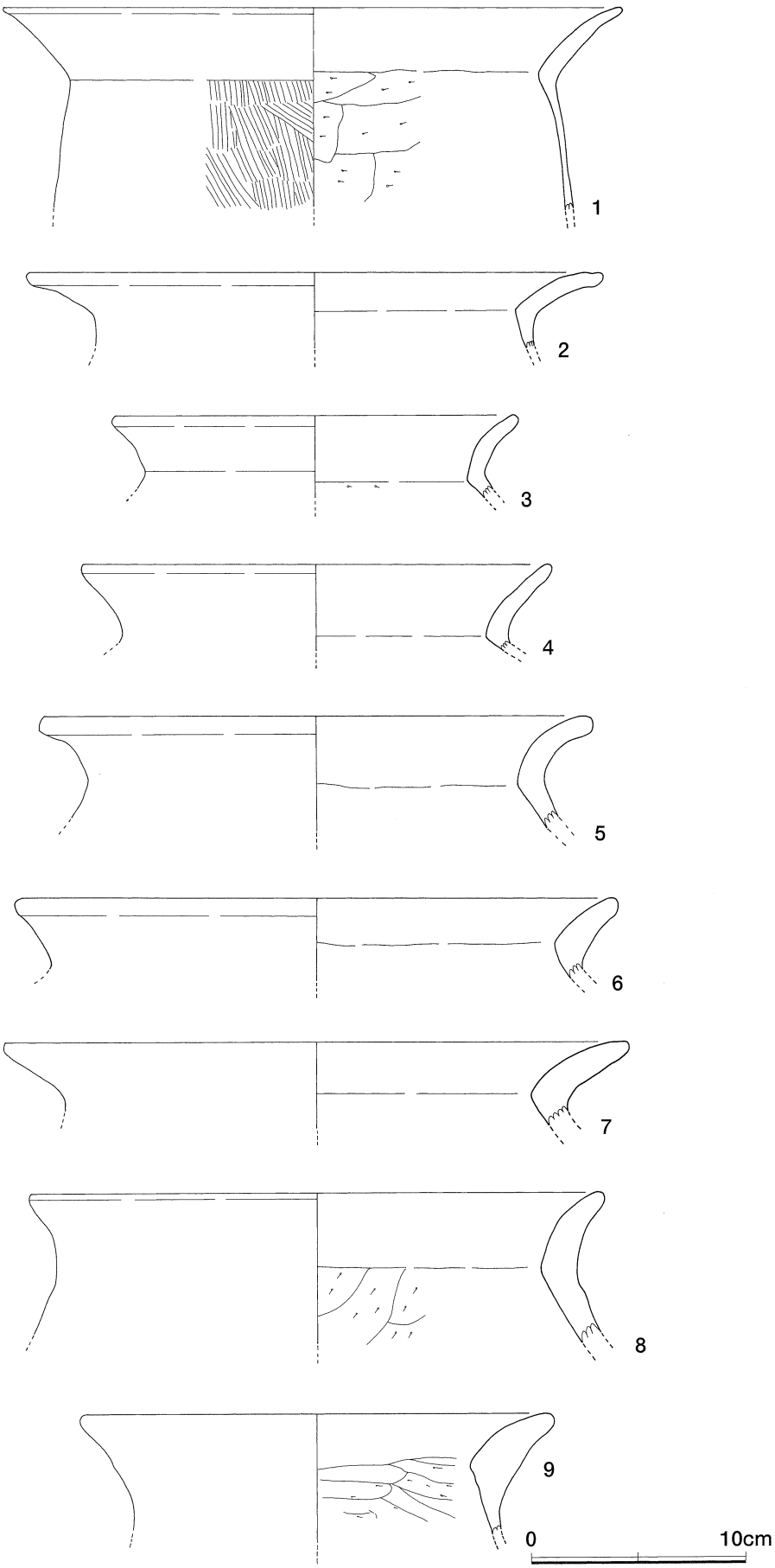
第46図は須恵器で、１～８、10～15は高台の付かない杯であり10、11外面に回転糸切り痕を残す。９、18～20は高台が付く杯である。高台は低いもので、直立して立ち上がる。16、17は蓋であり、つまみの形態は不明である。21、22は皿で高台が付かないものである。23は高台の付く壺である。47、48図は土師器・甕である。甕の口縁部は「く」の字状に屈曲し、体部は膨らみが無いものである。48図１～３は器壁の薄いものであり、口縁部が広く開くものである。



第46図　Ⅴ区SI03周辺（I－10・11）黒色土　出土遺物実測図（1）（S＝1／3）



第47図　Ⅴ区SI03周辺（I－10・11）黒色土　出土遺物実測図（2）（S＝1／3）



第48図　Ⅴ区SI03周辺（I－10・11）出土遺物実測図（3）（S＝1／3）

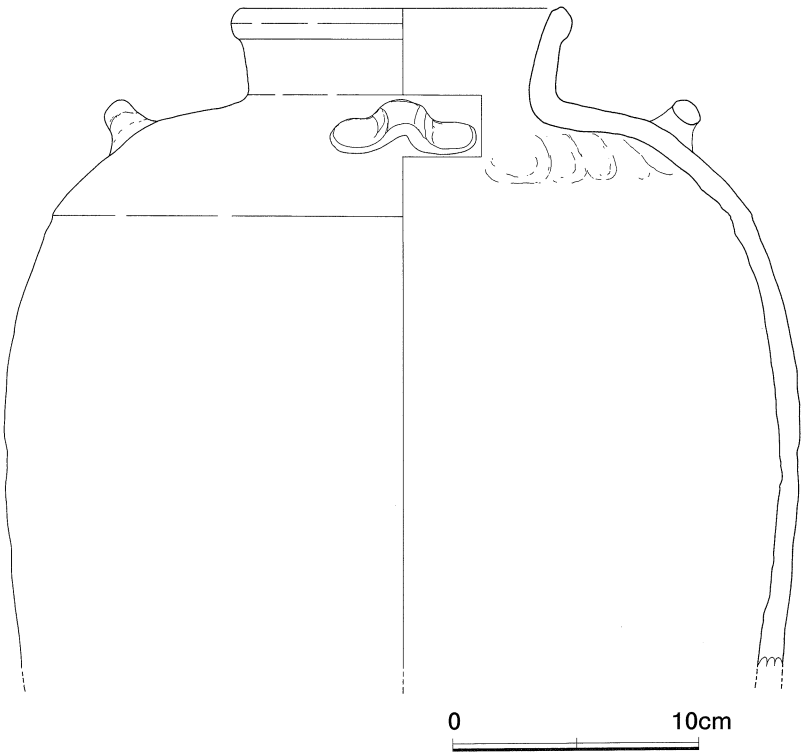
SX01（第50図）

SI02の北側に位置し、第１ハイカ層に掘り込まれている平面形が方形の遺構である。遺構内には礫が流れ込んでいる。東側には円形のピットが３基並んで位置している。これらのピットの壁が赤く変色しており火を受けたようである。49図が遺構内から出土している備前系壺であり、頸部と肩の間に３方のつまみが付く、この壺の時期は室町時代後期である。

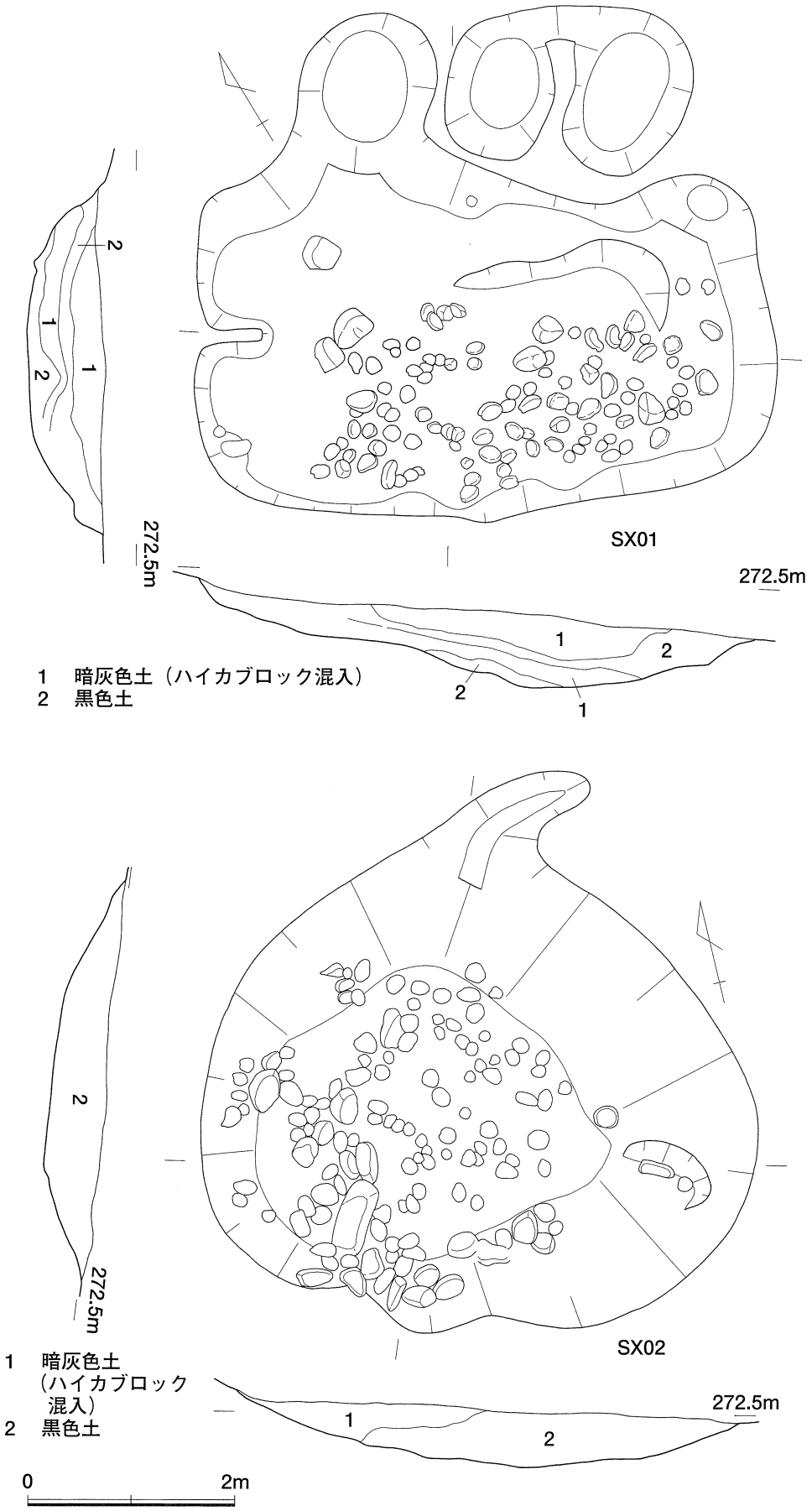
SX02、03は、平面形が不整形で覆土に礫を含む黒色土が堆積している。

Ⅴ区Ⅰ−10、11出土遺物観察表

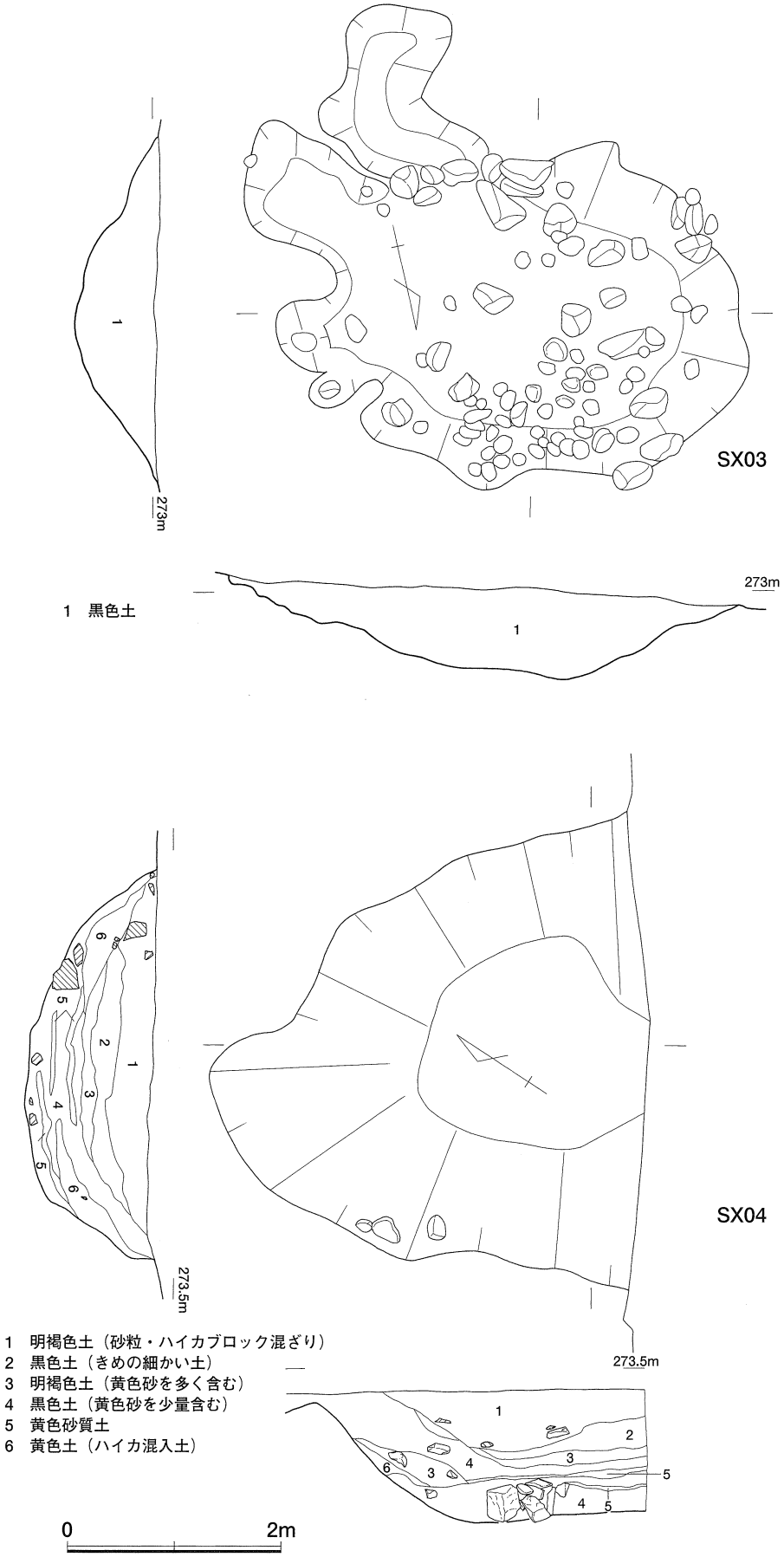
挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	時期
47−1	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			24.0		横ナデ、ハケ目、ヘラ削り	暗褐色	
47−2	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			27.8		横ナデ、ヘラ削り、ナデ、櫛状工具による沈線後ナデ	暗褐色	
47−3	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			20.7		横ナデ、ナデ、ヘラ削り	淡明茶褐色	
47−4	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			22.0		横ナデ、ヘラ削り後ヘラミガキ、ナデ後薄いハケ目	明褐色	
47−5	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			30.2		横ナデ、横方向のヘラミガキ、ヘラ削り、ナデ	褐色	
47−6	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			18.0		横ナデ、ヘラ削り、ハケ目後ナデ	淡茶褐色	
47−7	Ⅴ区 黒色土	土師器	甕			18.4		横ナデ、ヘラ削り、ナデ	淡茶色	
47−8	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			16.6		横ナデ、ナデ、ヘラ削り	暗褐色	
47−9	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			25.0		横ナデ、ヘラ削り	黒褐色	
47−10	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			19.6		横ナデ、ヘラ削り、ナデ	暗褐色	
47−11	Ⅴ区 黒色土	土師器	甕			21.7		ハケ目後横ナデ、ヘラ削り、不定方向のナデ	明茶褐色	
48−1	Ⅴ区 黒色土	土師器	甕					横ナデ、ヘラ削り、ハケ目	暗灰色	
48−2	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			27.0		横ナデ、ヘラ削り	灰褐色	
48−3	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			22.0		横ナデ、ヘラ削り	暗褐色	
48−4	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			26.0		横ナデ、ヘラ削り	暗灰色	
48−5	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			28.2		ハケ目後横ナデ、ヘラ削り、横ナデ	暗褐色	
48−6	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			29.4		横ナデ、ヘラ削り	暗褐色	
48−7	Ⅴ区 Ⅰ11	土師器	甕			27.0		横ナデ、ナデ、ヘラ削り	暗褐色	
48−8	Ⅴ区 北	土師器	甕			11.6		横ナデ、ヘラ削り	暗褐色	
48−9	Ⅴ区 Ⅰ10	土師器	甕			19.0		横ナデ、ヘラ削り	明褐色	



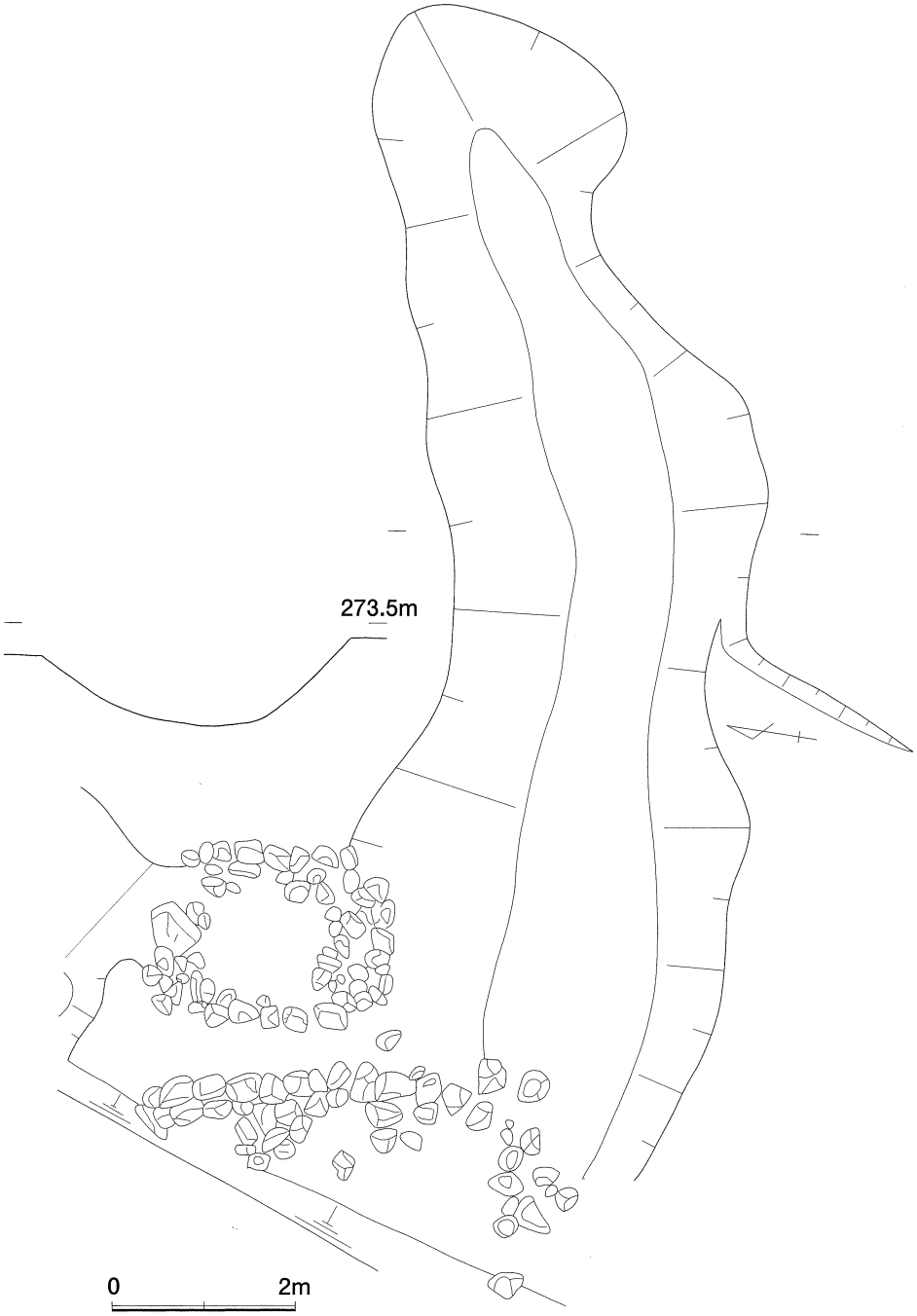
第49図　Ⅴ区SX01　出土遺物実測図（S=1／3）



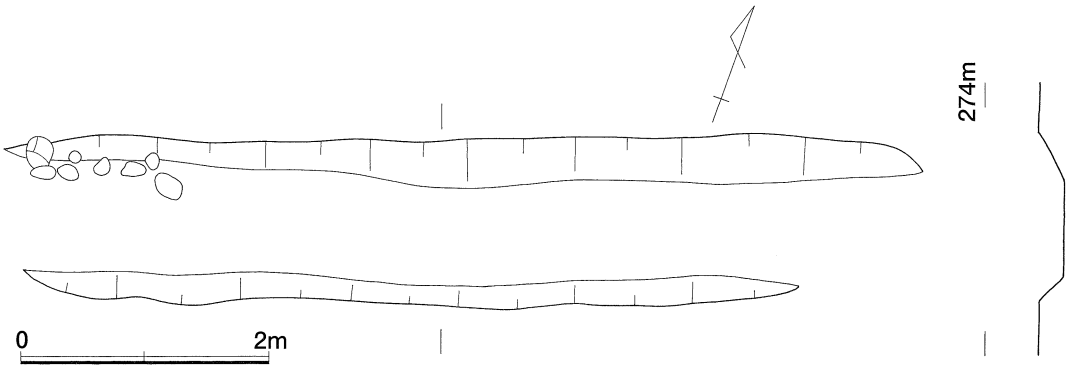
第50図　Ⅴ区SX01・02　出土遺物実測図（S＝1／60）



第51図　V区SK03・04実測図（S＝1／60）



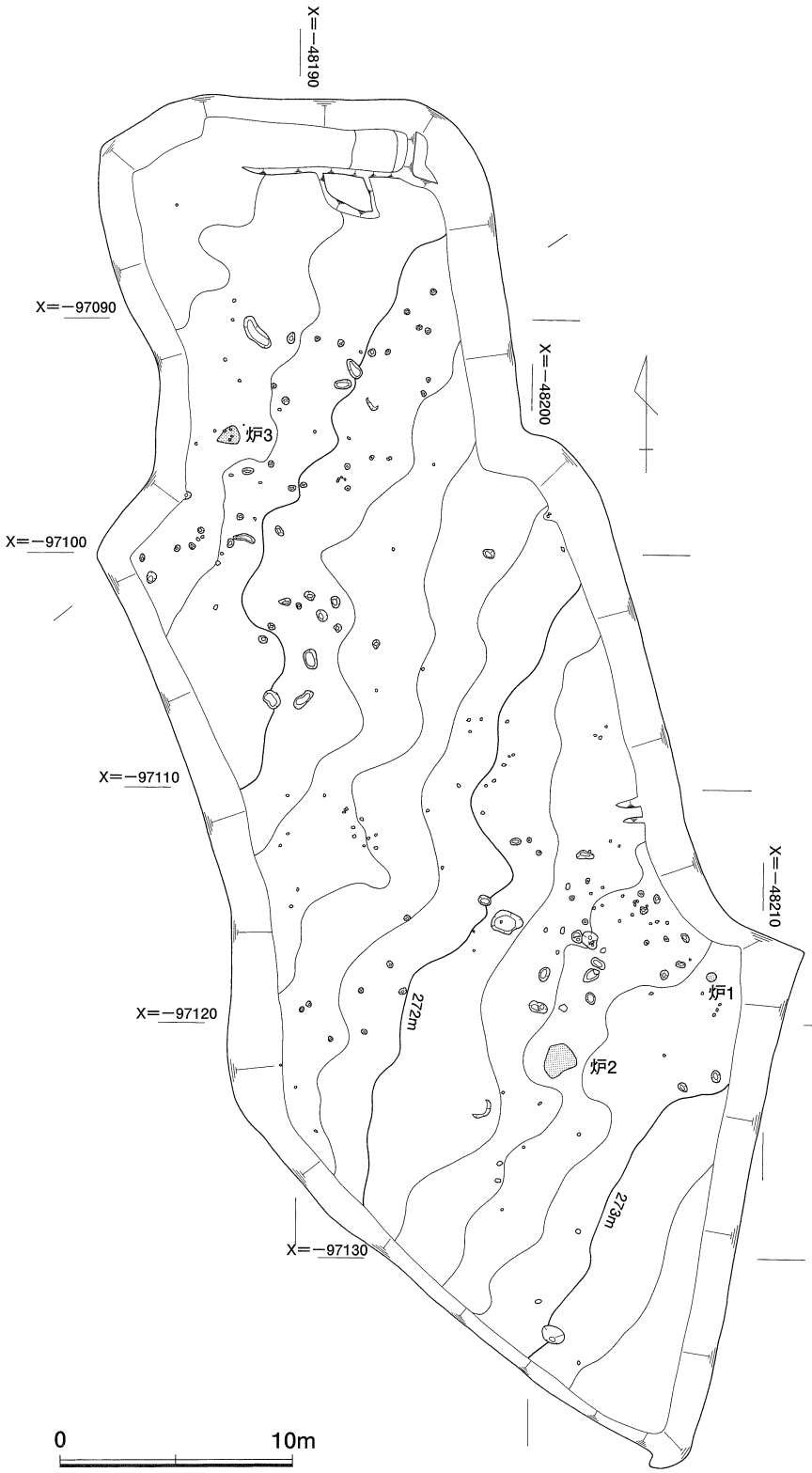
第52図　V区SD15実測図（S＝1／80）



第53図　V区SD14実測図（S＝1／60）

SX04（第51図）

調査区の南端に位置しており、南側半分を検出していない。深さ1.2mで覆土は、黒色土と褐色土が交互に堆積している。時期を判断できる遺物は出土していない。



第54図　V区第２ハイカ層遺構配置図（S=1／300）

SD−14（第53図）

SX−02の東側に位置する。幅1.4m、長さ7.4m、深さ0.2mを測る。

SD−15（第52図）

調査区の中央やや北側に第１ハイカ層に掘り込まれて位置している。規模は、長さ9.7m、幅3.3m、深さ0.7mで東側へ向け浅くなっている。この溝は時期を確認できる遺物が出土していない。

その他の遺構

土坑、溝以外にもピットを確認している。ピットは建物としてのまとまりを確認していない。柱穴内から遺物を検出しているが、古代から近現代までの遺物が含まれている。

調査区の北側は、平坦に削平を受けており、水田か畑の耕作によるものと思われる。

SD15の西側には集石遺構がある。第１黒色土に載る状態であり、新しい時代の遺構と考えられる。

第２ハイカ検出遺構（第54図）

第１ハイカ層の厚さは、1.5～2.0mあり、その下に0.2～0.3mの厚さの第２黒色土が堆積し、縄文土器を含んでいる。第１ハイカ層は堆積の途中で付近の森林の立木ものみ込んだ状態であり、炭化した木が丸太のまま出土している。第２ハイカ層は標高270.5mから273mの緩い斜面である。調査区の南側と北側の３カ所で焼土を確認している。１号焼土面は、長さ40cm、幅35cmの範囲であり、ハイカ層が黄色に変色している。

２号焼土面は、長さ1.55m、幅1.4mを測り、ハイカ層が黄色に変色している。

１号焼土面と２号焼土面は、6.5mの間隔があり、その２カ所の北西側にピットが集中している。３号焼土面は、長さ1.04m、幅0.8mを測る。この周辺の20m×10mの範囲にピットが集中して分布している。

縄文土器は全体に散在する形で分布しており、特に集中する場所は確認していない。

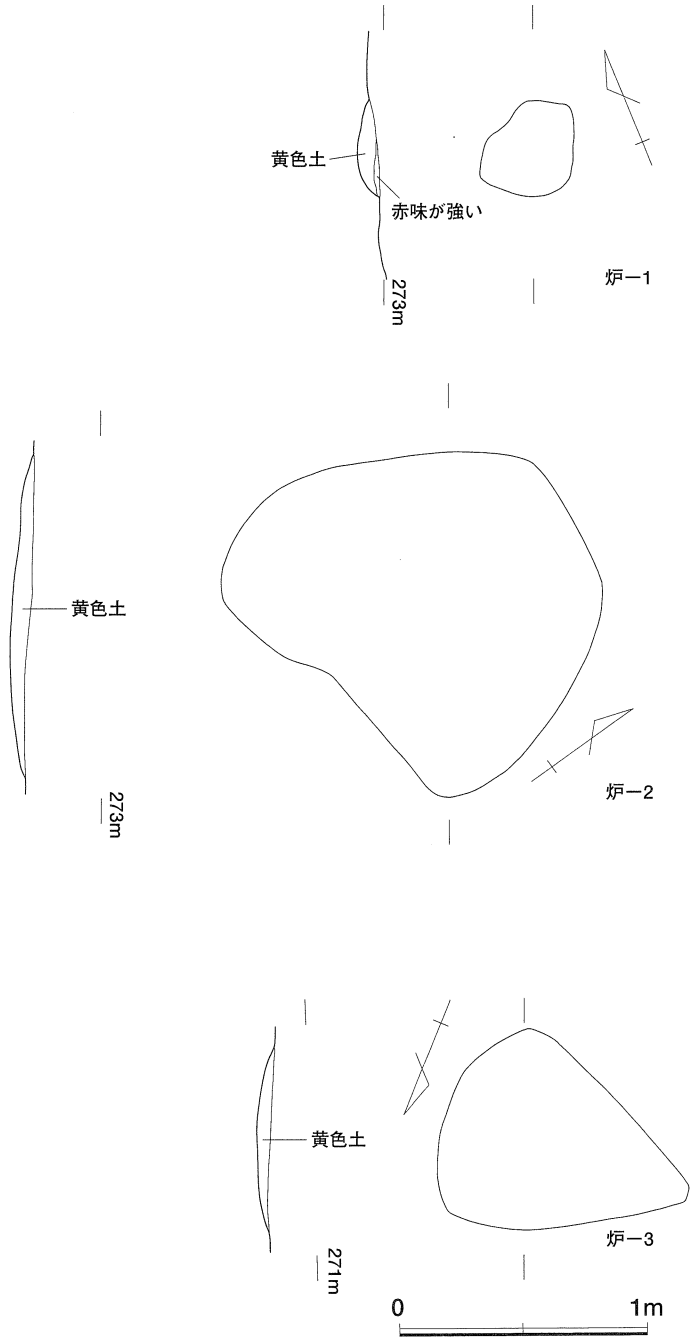
第２黒色土出土遺物（第56図）

56－１は、縁帯文土器深鉢の口縁部である。口縁端部を肥厚させ上端に刻みを入れ、外面に円形の浮文状に表現している。２は深鉢の口縁部で波状の口縁部である。４、５は、磨り消し縄文であり５は口縁端部にキザミを施している。６は粗製深鉢で内外面に２枚貝条痕を施している。７は精製の浅鉢で口縁部外面と体部に縄文が残り、頸部を磨り消している。８は無紋の浅鉢で内外面を磨いている。

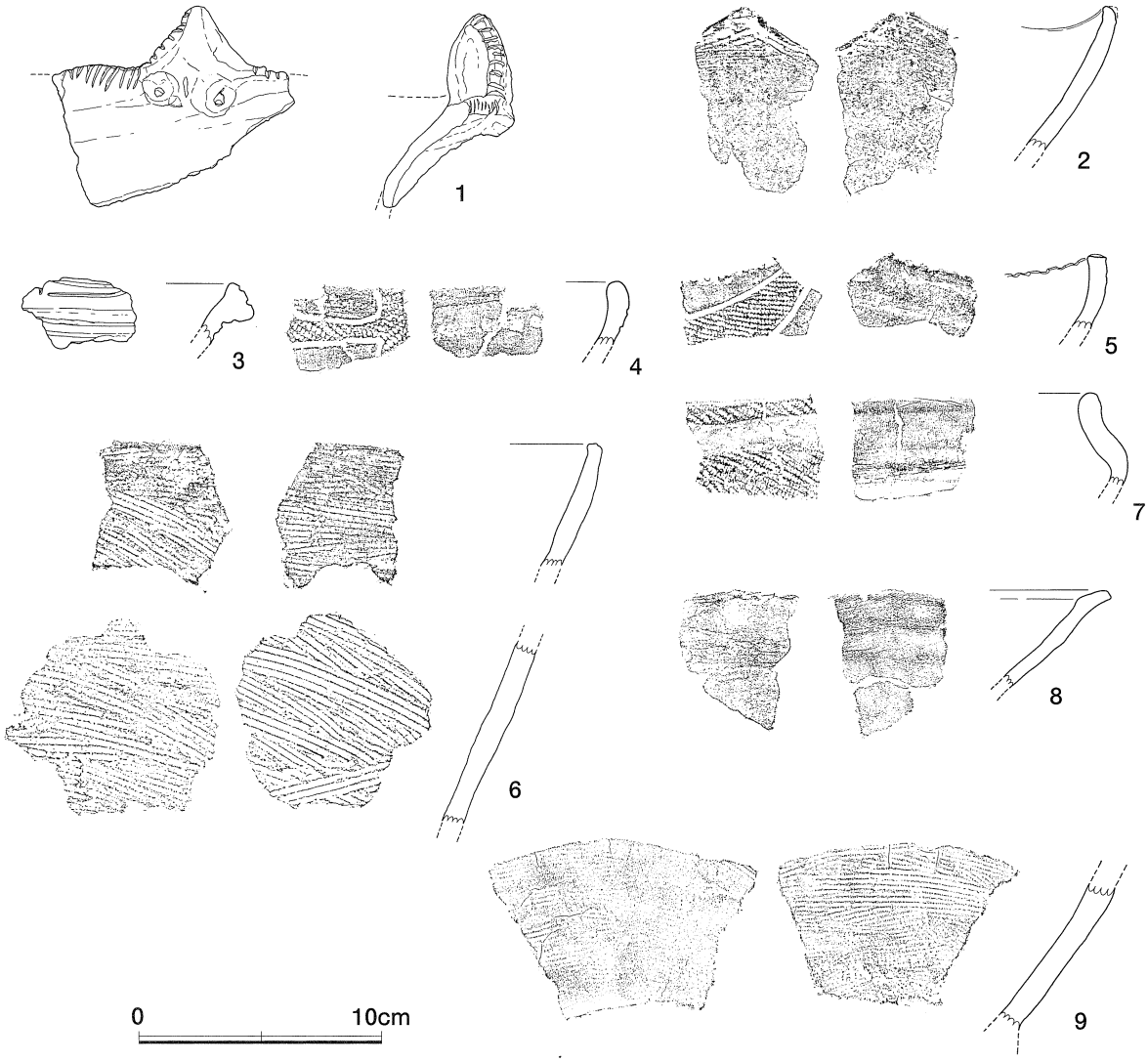
９は粗製深鉢の底部近くの破片で内外面に２枚貝による条痕が残る。

57図は石錘で自然石の両端を打ち欠いている。

４、５の土器の時期は後期前葉、福田ＫⅡ式と考えられる。



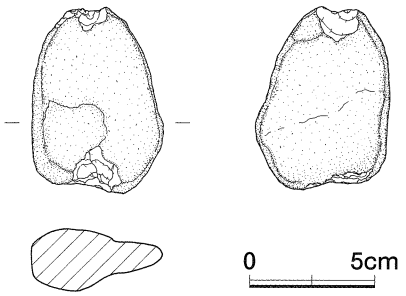
第55図　V区炉跡実測図（S＝1／30）



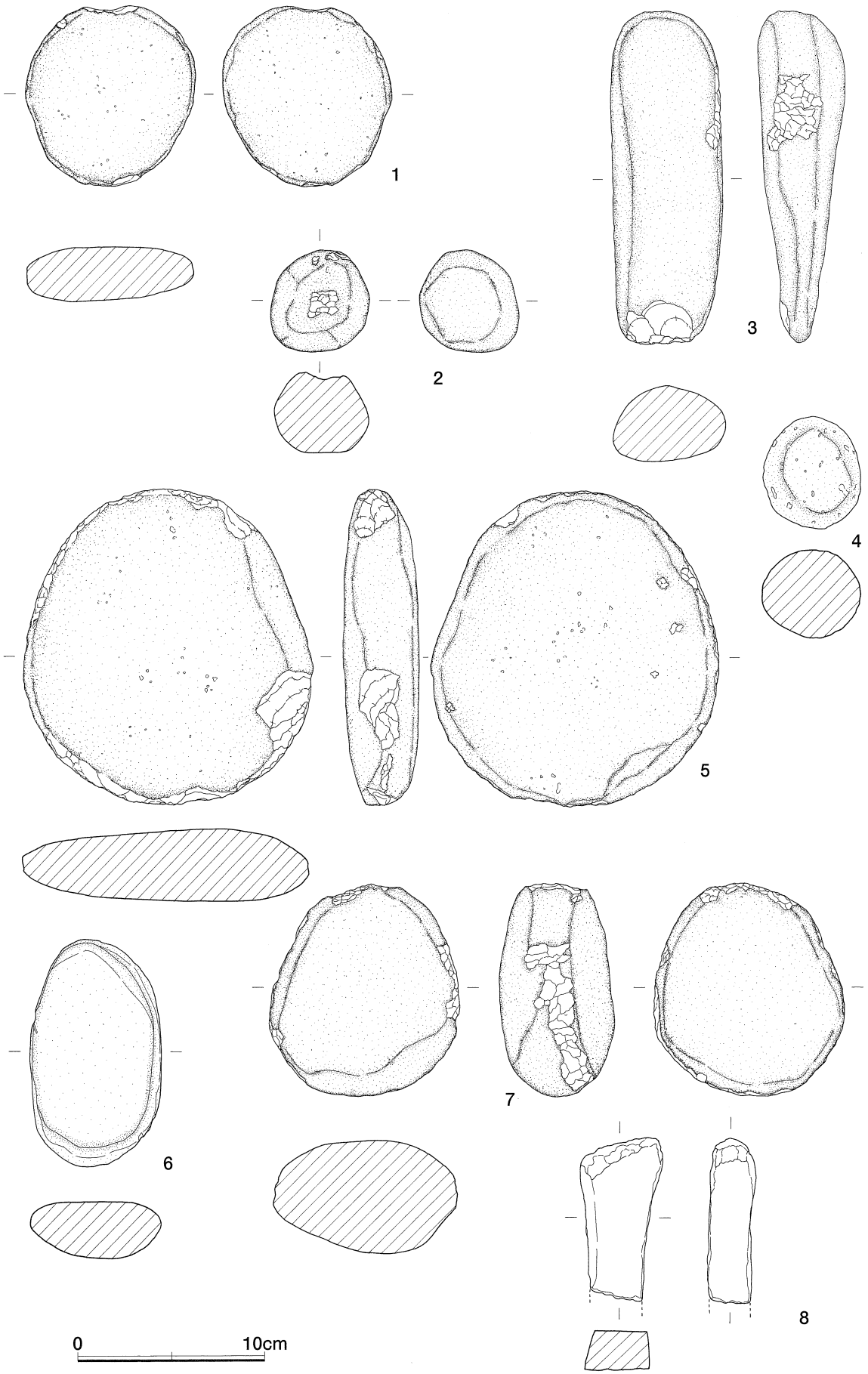
第56図　V区第２黒色土　出土遺物実測図（S=1／3）

第１黒色土出土石器（第58図）

１は大型の石錘で両端２方向を打ち欠いている。２は、敲打により片面が窪んでおり、叩き石として使用したものと思われる。３は棒状の自然石の先端部を打ち欠いて、刃部状に加工しており、石斧としての用途が考えられる。４は磨り石と思われ片面のみ使用しており、摩滅している。５は磨り石、叩き石として使用しており、周囲が敲打により欠けており、上下の面が摩滅している。６は片面が摩滅により平坦になっている。７は厚みのある石を磨り石、叩き石としており、周囲が欠けており、上下の面が使用により摩滅している。８は砥石であり途中で欠損しており1／2が残っている。４面に使用痕が残っている。



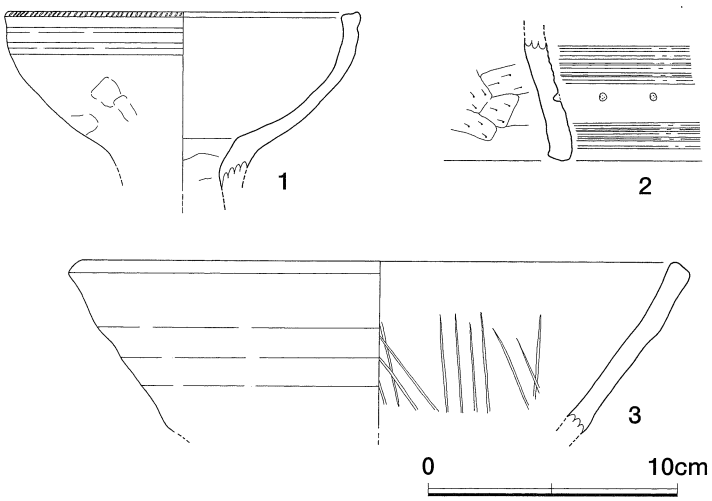
第57図　V区第２黒色土出土遺物実測図（S=1／3）



第58図　V区第１黒色土出土遺物実測図（S=1／3）

Ⅴ区遺構外出土遺物（第59図）

1、2は、弥生土器である。1は高杯の杯部であり、脚部が一部残る杯の口縁部外面に凹線が2本入り、端部にキザミが施される。内面にヘラミガキが施される。2は高杯の脚部で外面の上下二段に凹線文が入り、その間に円形の刺突が入る。内面にヘラ削りを施す。3は室町時代の擂り鉢で内面に粗い擂り目が残る。



第59図　Ⅴ区遺構外出土遺物実測図（S=1／3）

Ⅴ区第2黒色土出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	遺存状況	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	手法の特徴	色調	時期	備考
56－1	K 13	縄文		1/2以下				外:ナデ　内:ナデ	外:灰褐色 内:灰褐色	後期	
56－2	K 12	縄文		1/2以下				外:条痕・ミガキ 内:条痕・ミガキ	外:明褐色 内:明褐色	後期	波状口縁
56－3	J 11	縄文		1/2以下				外:ナデ　内:ナデ	外:灰白色 内:灰白色	後期	
56－4	J 10	縄文		1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:暗褐色 内:暗褐色	後期	
56－5	K 11	縄文		1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:赤色 内:黄白色	後期	
56－6		縄文		1/2以下				外:条痕　内:条痕	外:明褐色 内:明褐色	後期	
56－7	J 13	縄文		1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:明黄白色 内:明黄白色	後期	
56－8	J 13	縄文	浅鉢	1/2以下				外:ミガキ　内:ミガキ	外:明黄白色 内:明黄白色	後期	
56－9	K 13	縄文	深鉢	1/2以下				外:条痕・ナデ 内:条痕・ケズリ	外:赤橙色 内:赤橙色	後期	
59－1	Ⅴ区 北側	弥生	高坏			14.0		ナデ、ヘラ削り、指頭圧痕2本の沈線、刻目文施される	淡暗褐色		
59－2	Ⅴ区 北側	弥生	高坏?			23.8		ナデ、ヘラ削り擬凹線施される	淡褐色		
59－3	Ⅴ区 ピット202	?	すり鉢					回転ナデ、ナデ	灰色		

Ⅴ区出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	石材	遺存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
58－1	P 91		石錘		完形	9.7	9.2	3.2	437.1	
58－2	I 11		磨石・凹石・たたき石		完形	5.4	5.3	4.2	165.4	
58－3	P 263		不明		完形	17.8	6	4.4	670.1	片面のみ使用
58－4	I 11		磨石		完形	5.9	5.2	4.6	188.5	
58－5	J 10 No.1026		磨石・たたき石・石皿?		完形	16.8	15.6	4	1612.1	
58－6	J 11 No.1034		磨石		完形	12.1	7	3.3	411.8	
58－7	I 11 No.908		磨石・たたき石		完形	11.4	10.2	6	995.8	
58－9	灰茶褐色土層		砥石		?	8.8	4.6	2.1	129.3	

第５章　平成12年度調査

第１節　調査の経過と概要

１．調査の経過

島根県教育委員会が志津見ダム建設工事に伴って、神原Ⅱ遺跡の発掘調査を行ったのは、平成９年度から４ヶ年に渡る。平成12年度の調査はその最終年度で、位置的には平成10年度調査区のほぼ西側下方、平成11年度調査区の東西調査区に挟まれた部分におおむね該当する（第５図）。

発掘調査は、平成12年４月26日から開始、遺構としては近世以後と推測される柱穴群や土坑、溝や自然の流路跡などを検出したものの、概して遺構・遺物量ともに多くはなく、予定より早く同年10月31日に現地調査を終了した。

調査は北側の細長い調査区を北区、その南の幅の広い部分を中区、道路を挟んだ南側の調査区を南区と仮称し、おおむね北側から順に調査を行っていった。調査はまず地区内に盛られていた土砂を重機で取り除くことから始め、その際に床締めと呼ばれる水田の基盤に敷かれた粘土層までを除去した。その後は人力によって掘削し、第１黒色土層を遺物を取り上げながら除去、第１ハイカと呼ばれる三瓶山起源の火砕流堆積土上で精査を行い、遺構を検出、掘削を行った上で、実測、写真撮影を行っている。遺物の取り上げと遺構の実測は、基本的にトータルステーションを用いたデジタル測定のシステム、遺跡調査システム（ＳＩＴＥ）を用いて行った。なお、開発にかかる発掘調査範囲の基準が変更され、次年度よりダムの常時満水位より上位については調査を行わないことになる見通しのなかで、前年まで行っていた第２黒色土以下の調査は行わないこととし、土層確認トレンチでの確認のみにとどめた。

なお南側の調査区については、当初はより広い範囲での調査を予定していたが、表土掘削の段階で土砂採取により既に遺構面が攪乱を受けている部分が大きいことが判明し、現状での調査範囲にとどまったものである。

２．調査の概要

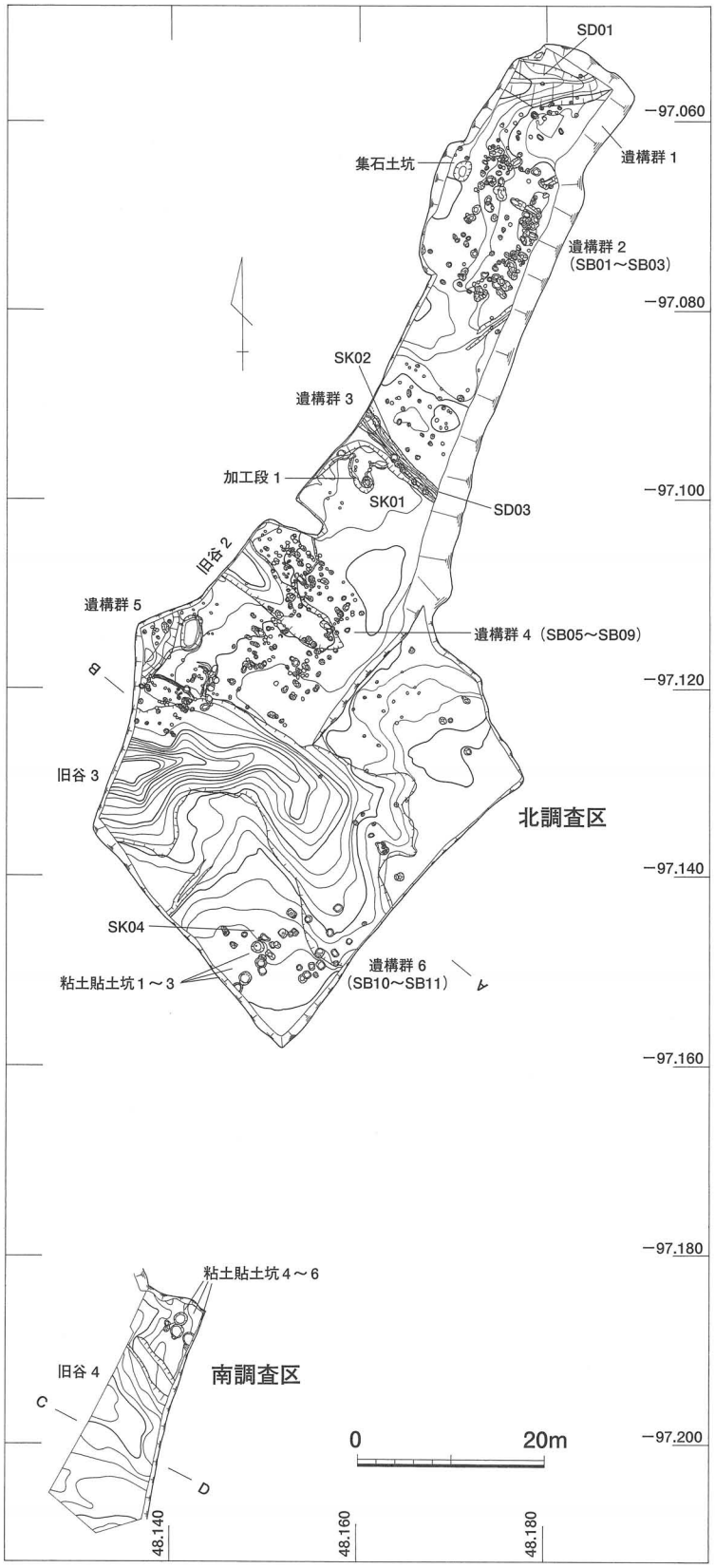
調査区は、現在の道に挟まれて北側の大きな調査区と南側の小さな調査区に分かれる。前者を北調査区、後者を南調査区と呼ぶ。

旧地形　調査前の状況は、水田面に加工され、平坦になっていた。しかし調査を行うと自然の流路と推測される地形が北調査区で３個所（旧谷１～３）、南調査区で１個所（旧谷４）検出された。これらの谷状地形は、第１ハイカ堆積後の開析で形成されたものと考えられ、内部には黒色土（第１黒色土）が堆積している。堆積土中からは多くの縄文土器、弥生土器と少量の土師器・須恵器が出土することから、おおむね古墳時代以降に谷が埋まりきったものと思われる。

旧谷地形以外は第１ハイカ上面がきれいに平坦になっており、谷の存在は逆に高まり部分の微地形が削平されている可能性を示唆する。多くの縄文土器、弥生土器が出土しているにもかかわらず、古代以前の遺構が検出されなかったことは、このあたりに原因があるかもしれない。また削平時期については古代以降という以上の限定は出来ないが、現遺構面付近では中世以降の陶磁器が多く出

土することから、それ以降である可能性が高い。

遺構群の設定　遺構は掘立柱建物を構成する柱穴や土坑などを中心に検出されたが、北調査区でおおよそ６つの群に分かれて検出されている。よって記述の便宜上それぞれを遺構群１～遺構群６と呼ぶ（第60図）。



第60図　神原Ⅱ遺跡平成12年度調査区遺構配置図（S＝1／750）

遺構群１は調査区北端の旧谷１の南側で検出された炉状遺構を中心とする遺構群である。

遺構群２は遺構群１の南で検出された掘立柱建物跡を中心とする遺構群である。

遺構群３は、SD03の南北で検出された柱穴や土坑などの遺構群である。

遺構群４は旧谷２の周辺で検出された掘立柱建物跡を中心とする遺構群である。

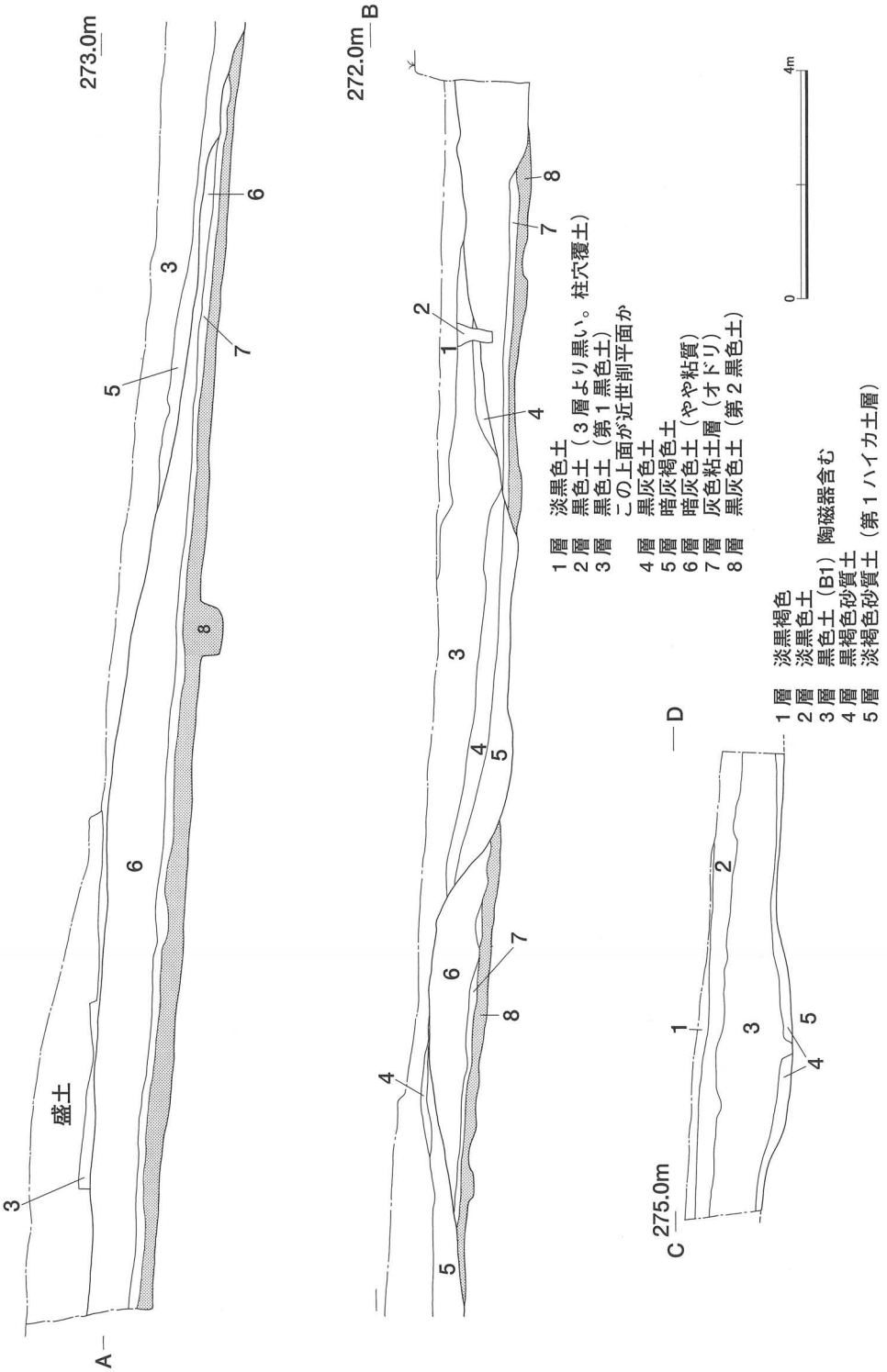
遺構群５は旧谷３の北側で検出された柱穴や土坑などで構成される遺構群で、明確な掘立柱建物を構成していない。

遺構群６は北調査区の南端付近で検出された遺構群で、掘立柱建物跡と粘土貼り土坑などで構成されている。

総体としては掘立柱建物を中心とする３つの遺構群（遺構群２、４、６）があり、それらに隣接して土坑や炉、溝、段などの遺構が認められるのが基本的なパターンといえる。遺構は旧谷の斜面にも検出されており、基本的には谷が埋まった後に形成されたものと推測されるが、黒色の堆積土中に黒色土覆土の遺構が掘り込まれているため、谷に堆積土中に収まる遺構は検出

できていないと考えられる。

基本土層（第61図）　神原Ⅱ遺跡の土層の堆積状況は、他の志津見ダム関連の遺跡と同様である。耕作土の下に黒色土（第１黒色土）が堆積、その下に三瓶山起源の火砕流関連堆積物である第１ハイカ層、その下に非常にきめの細かい灰色粘土層（オドリ）が薄く堆積し、その下に第2黒色土が堆積する、という状況である。年代的には^{14}C年代で第１ハイカが3530±100B.P.～3710±130B.P、第２ハイカが4780±100B.P.と考えられている。



第61図　神原Ⅱ遺跡平成12年度調査区　土層断面図（S＝1／120）

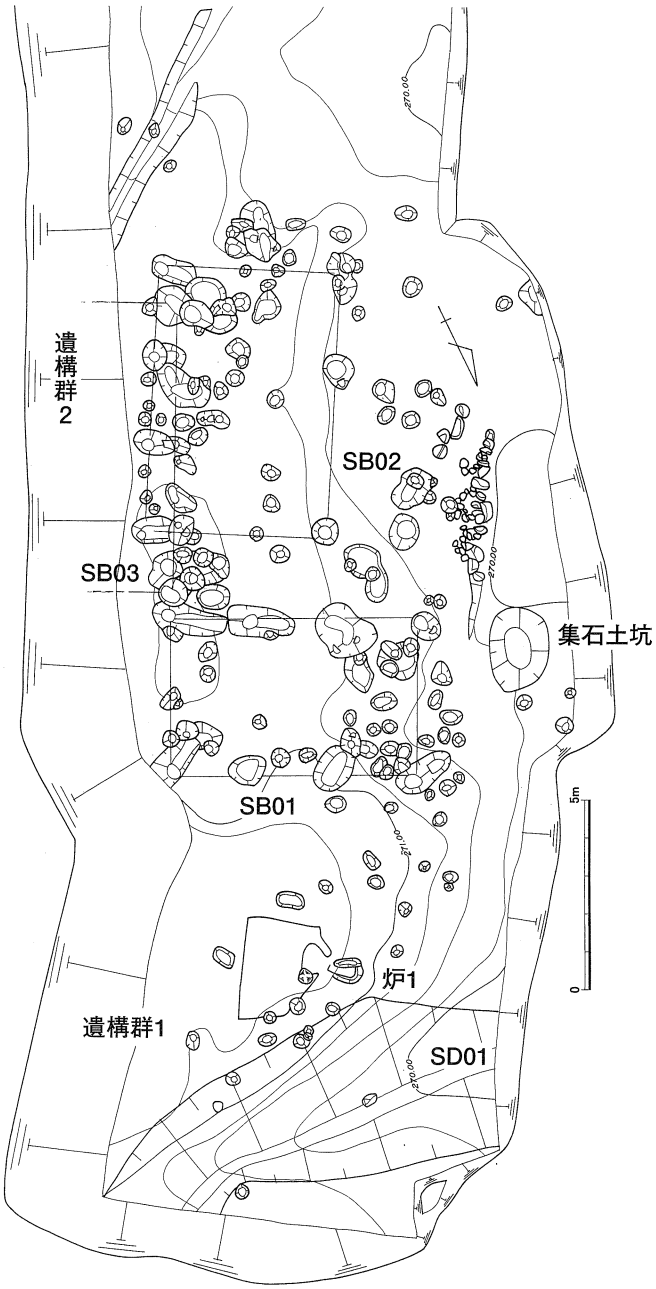
第２節　調査の結果

１．遺構群１の調査

遺構群１は調査区の北端にあたり、東から西に下る溝（SD01）と、その南で検出された炉およびその周辺以降からなる。

SD01　調査区北端で検出された溝で、東から西に下るが、調査区西端でやや南に向かって曲がっていくのが確認されている。幅は下端で0.3～0.5m、上端で2.8～4.8mで、内部には黒色土が堆積していた。埋土内からは、縄文時代晩期の土器が若干出土している。

炉１とその周辺遺構（第63図）　SD01のすぐ南側に周囲よりわずかながら高い平坦面があり、炉穴とそれに関わる可能性のある遺構が検出された。炉穴は新しい土坑で切られており、全容は不明だが現状で長さ72cm、幅24cm程度の小型で細長い長方形を呈していたものと考えられる。平坦面の下方側に位置するために上面は流れていると推測され、深さは現状で６cm程度と浅いが、上方側の面が続いていたと仮定すると深い部分で60cm程度はあった可能性がある。底面は西（下方側）に向かって傾斜しており、その下方側の壁がよく火を受けて変色している。壁は表面が灰色、内部が赤褐色を呈すことから還元状態で作業が行われたと考えられる。内部には炭混じりの黒色土が堆積していたが、埋土の洗浄作業を行っても鍛造剥片等は検出できなかった。



第62図　遺構群１・２実測図（S＝1／200）

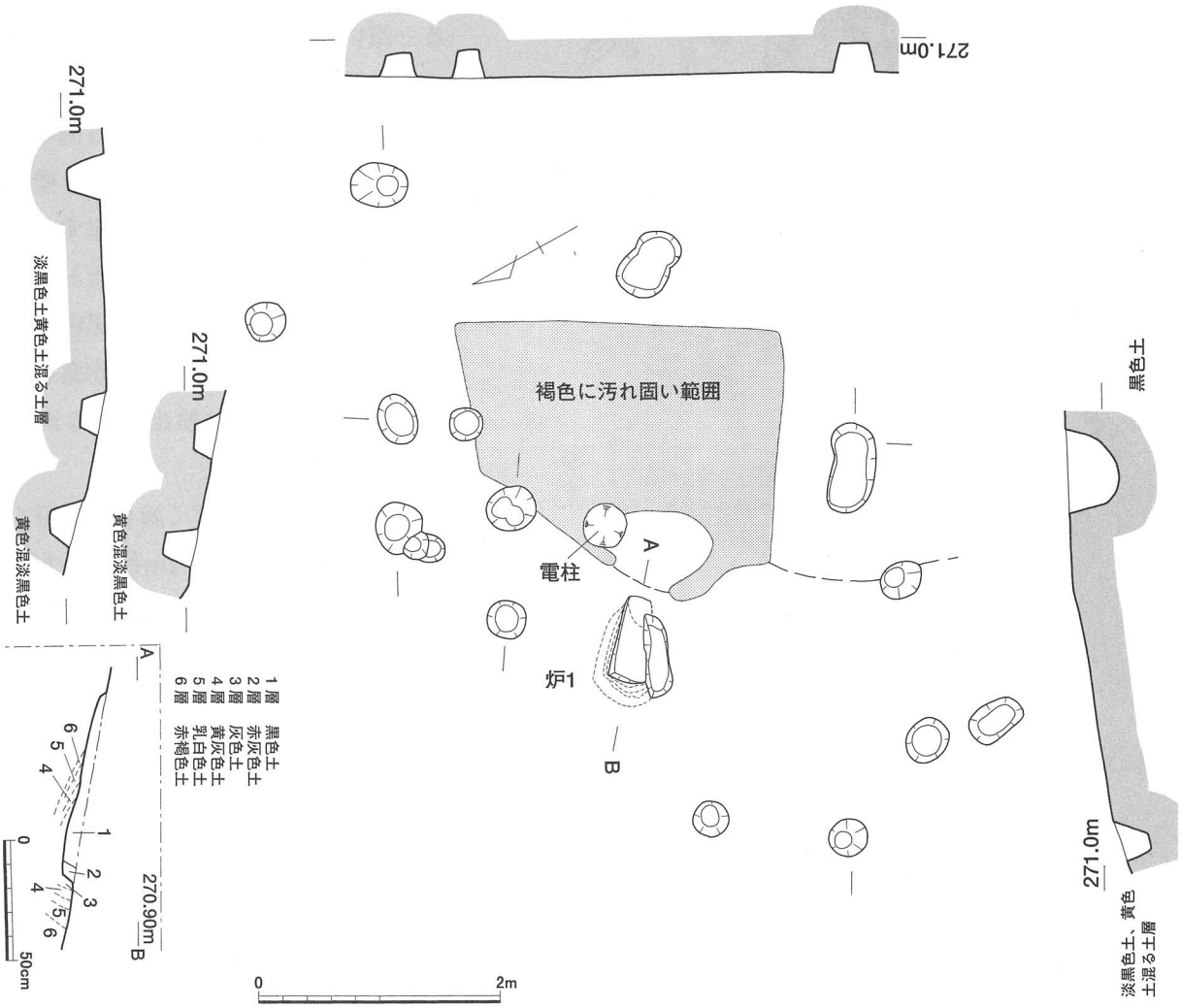
炉の南東側には、堅く締まって黒く変色した面が2.7m×2.2m程の長方形に広がっているのが検出された。北西側（炉側）は流出しているので本来はもう少し北西側に向かって広がっていたものと推測され、踏みしめられて形成された何らかの作業スペースと考えられる。炉の南東側に接する部分は60×90cm程度の楕円形に変色していない範囲が認められ、炉に関わる作業空間として何らかの施設があった可能性がある。周囲には16個のピットが検

出されたが、建物を構成するような規則的な並びは認められない。

これらの遺構の時期は遺構に関わって遺物が出土していないため、不明である。

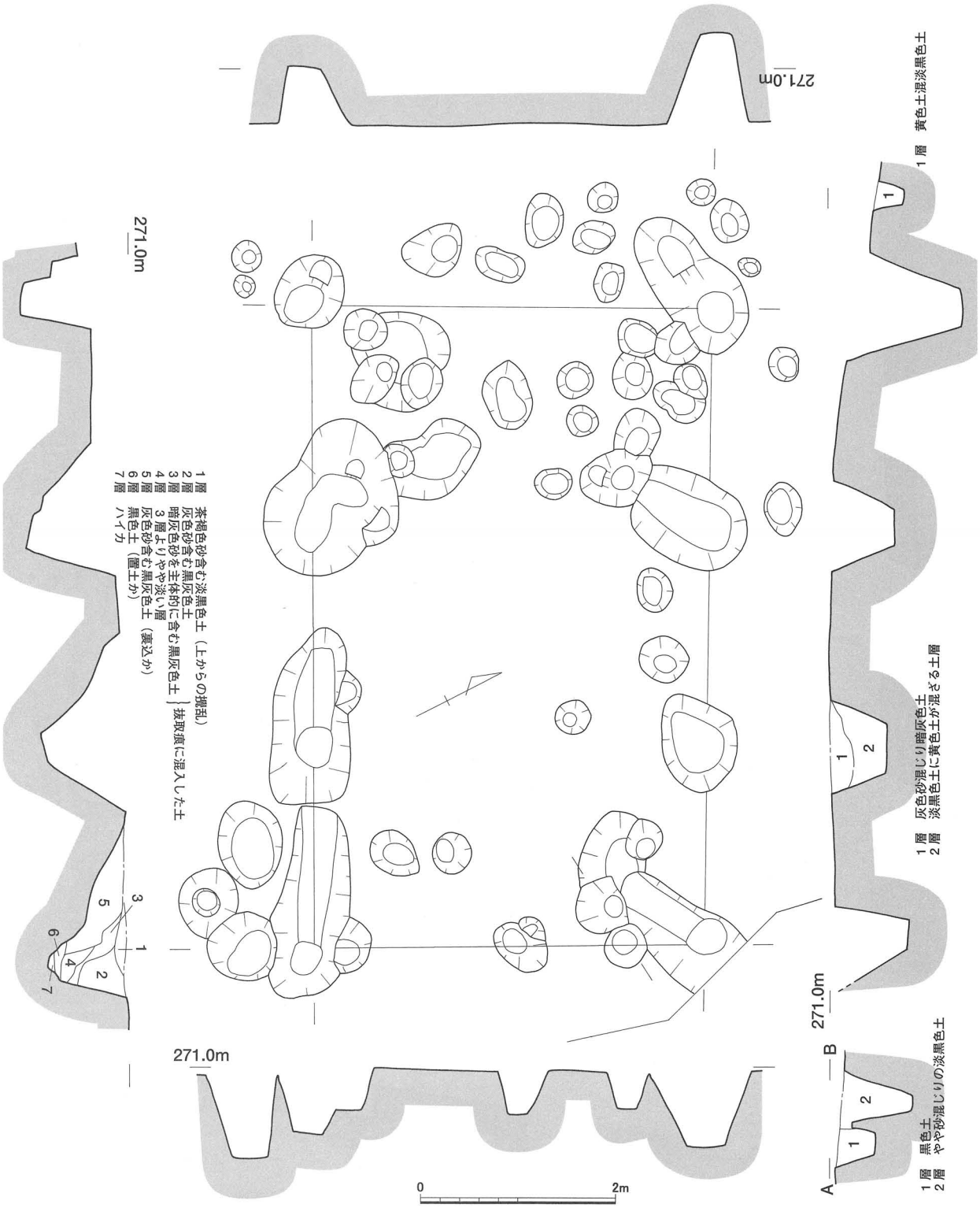
2．遺構群２の調査

遺構群１の南側に隣接した平坦面で、多くの柱穴をはじめとした遺構が集中して検出され、遺構群２と呼んでいる。柱穴は大形でスロープ状の掘り込みをしばしば付随するグループと、小型のグループに大別され、主に大形柱穴で構成される建物３棟を復元している。長軸がおおよそ東西方向の１棟（SB01）とおよそ南北方向の１棟（SB02）はほぼ全容を復元できるが、もう１棟は調査区の反対側に続く可能性が高く、桁方向らしい１列しか検出できていない。またまだ多くの柱穴があり、更に別の建物があった可能性が高いが、はっきりと復元することは出来ない。また小型の柱穴は独立した柱穴以外に大形の柱穴に伴う副柱的性格も考慮する必要があるかもしれない。またSB01の西側に礫と炭が充填した土坑（集石土坑）が検出されている。

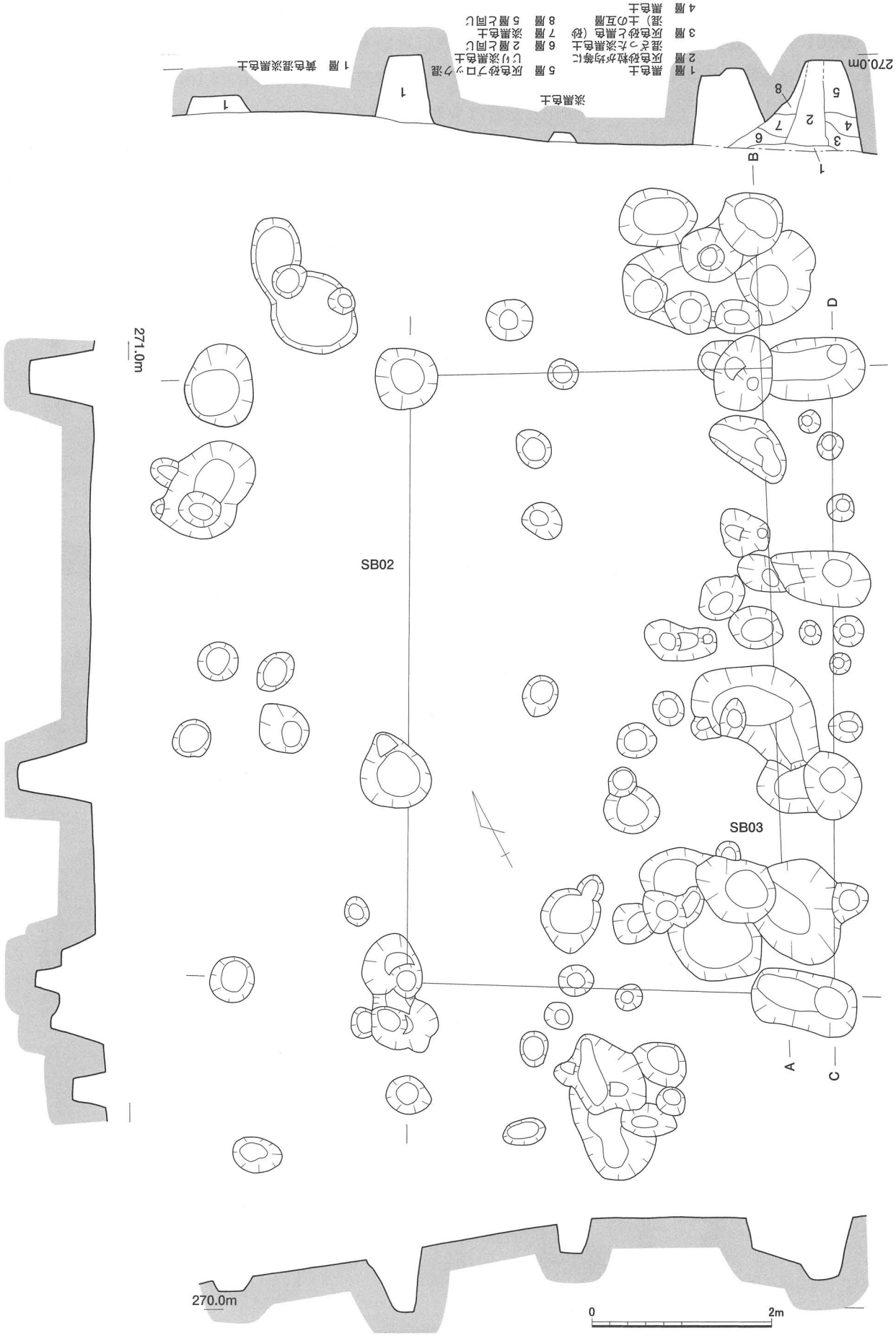


第63図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）炉１と周辺の遺構実測図（S＝1／60）

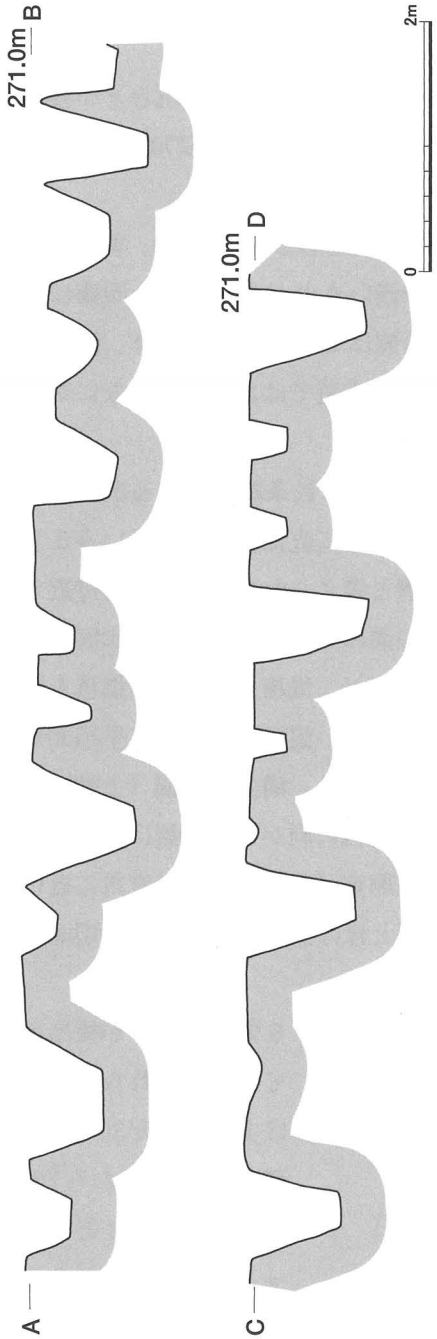
SB01（第64図）　遺構群１の北側、長軸が東西に近い方向（等高線に直交する方向）に検出された掘立柱建物跡である。建物規模は３間×１間で、柱穴の中心部で6.5m×4.1mを測る。柱穴の径は下端で30～40cm、上端で80～110cmとかなり大形で、深さも検出面から60～120cmと深い。多くの柱穴がスロープ状の掘り込みを付属させており、かなり大形の柱を建てたことが推測される。直接建物跡に関わる遺物は出土していない。



第64図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB01実測図（S＝1／60）



第65図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB02・03実測図（S=1／60）



第66図　SB02・03断面図（S＝1／60）

SB02（第65図）　SB01の南側に隣接して、長軸が南北に近い方向（等高線に平行する方向）で検出された建物跡である。西側の桁行に１穴検出できなかった柱穴があるが、SB01同様３間×１間の規模と考えられ、柱の中心で6.9×4.8mを測る。柱穴の径は下端で30～50cm、上端で70～80cm、深さは検出面から70～100cmとしっかりしている。東側の柱穴は、全て西側に上るスロープを付属させている。柱穴から直接遺物は出土していない。SB01とは約2.1mの間隔をおいて、ほぼ直交した配置となっており、両者が同時に併存した可能性もある。

SB03（第65図）　SB02の東側柱列に平行して、比較的大形の柱穴４穴が並んで検出されており、SB03とした。西側に対応する柱列が検出されていないので、調査区外の東側に建物が延びていた可能性が高いと考えられる。現状で認識できる規模は桁行３間で、柱穴の中心で7.8mを測る。柱穴の規模は、SB01、02とほぼ同様で比較的大形であり、深さは検出面から60～90cmである。また同様に、スロープ状の掘り込みが付随する柱穴もある。柱穴内の覆土から、中国産の染付が出土しており（写真１－24）、16世紀～17世紀のものと考えられる(注1)ことから、中世末～近世の遺構の可能性があるが、覆土出土であり確証はない。

なお、このSB03の柱列やSB02の東側柱列付近には多くのピットが検出されており、一定の並びを構成しそうなピット列もあるが、あえて建物としての復元を行っていない。これはSB03のように西側に対応する柱列が認められないためで、東側調査区外側に向かって延びる建物が更に存在した可能性が高い。東側に比べて西側で検出されたピットの密度が著しく低いのは、この想定を傍証すると思われる。

遺構群２建物群の時期　SB01～03をはじめとする遺構群２で検出された柱穴群、建物の時期について知るための直接的な資料は、前述したSB03の染付だけである。ただ遺構検出面の直上にのる黒色土からはかなりの数の陶磁器片が出土した（写真１－４～35）。これらの時期は13世紀から19世紀と幅があるが、17世紀前後の遺物が最も多い。建物群の時期としてもっとも蓋然性が高いのは近世、ということになろう。

集石土坑（第67図）　SB01の西側側から礫が集積した土坑が検出された。土坑の規模は、上端で2.25m×1.6m、下端で1.1m×0.7mの楕円形を呈し、深さは検出面から60cm前後を測る。土坑の内部には拳大から人頭大の礫がつまり、その間に木の形を残す木炭が多く認められた。周辺の調査で

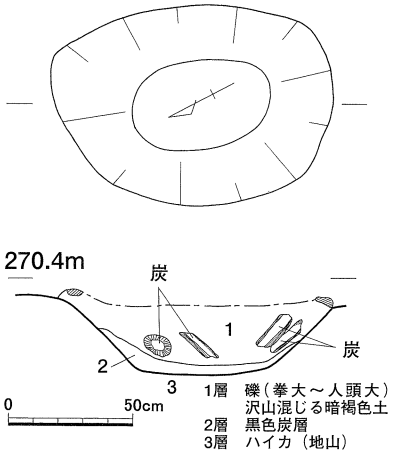
検出されている類似例から見て、麻蒸し用に用いられたものの可能性が高い。

3．遺構群３の調査

遺構群２の南西側、10m程度の谷状地形の遺構空白地をおいて、柱穴群、溝、土坑などが検出されており、遺構群３と呼んでいる（第68図）。南東方向から北西方向に延びる溝（SD03）があって、その北東側には柱穴群が、南西側には段状に加工された面や土坑などが検出された。

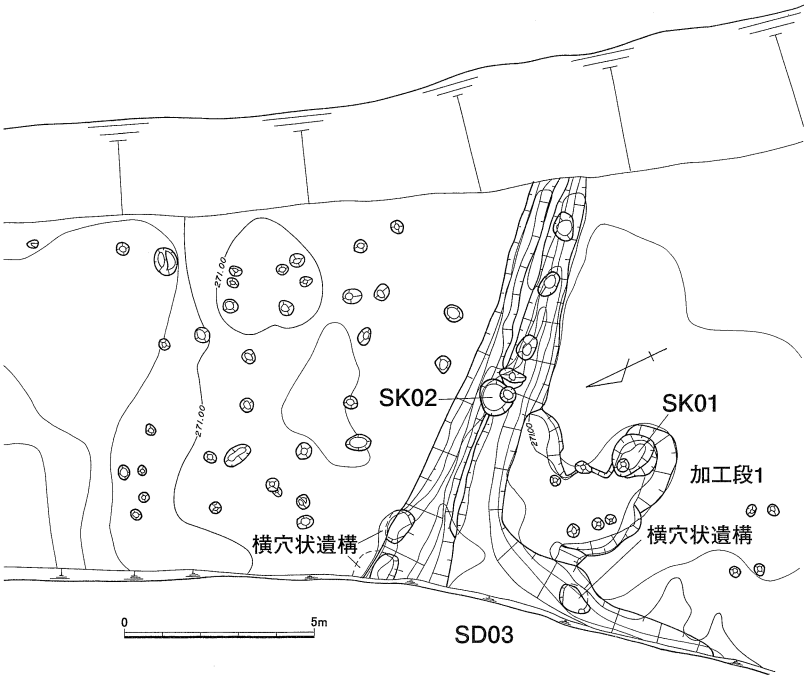
柱穴群（第68図）　柱穴群は、第２遺構群との間にある浅い谷状地形とSD03の間、約８mの間でアトランダムに検出されている。柱穴は径30cm前後の小型で浅いものが多く、また明確に建物を構成するような並びは認められない。ただSD03を挟んで南西側はピットは稀であり、溝を区切りに区域として機能が異なっていた可能性が高く、しっかりとした構造ではないまでもなにがしかの建物が存在したものと推測している。

SD03（第69図）　南東方向から北西方向に延びる溝で、調査区内に数条認められる旧谷状地形に比べて法面が急であるとともに直線状に延びていることから、人工的に掘削された溝と考えられる。溝は底面付近でほぼ同じ幅で平行する２本の溝に分かれており、ほぼ同じ場所で掘り直された可能性もあるが、堆積土は一様の黒色土であった。また検出面の肩よりも低い箇所で両溝間に平坦面があり、同時に併存した可能性もある。溝全体の幅（上端）は調査区南東端で1.4mを測り、北西に向かって次第に幅を広げている。また南東側の法面は調査区北東端付近で直角に近い角度で折れており、溝の底面とほぼ同一のレベルで平坦面を形作っている。

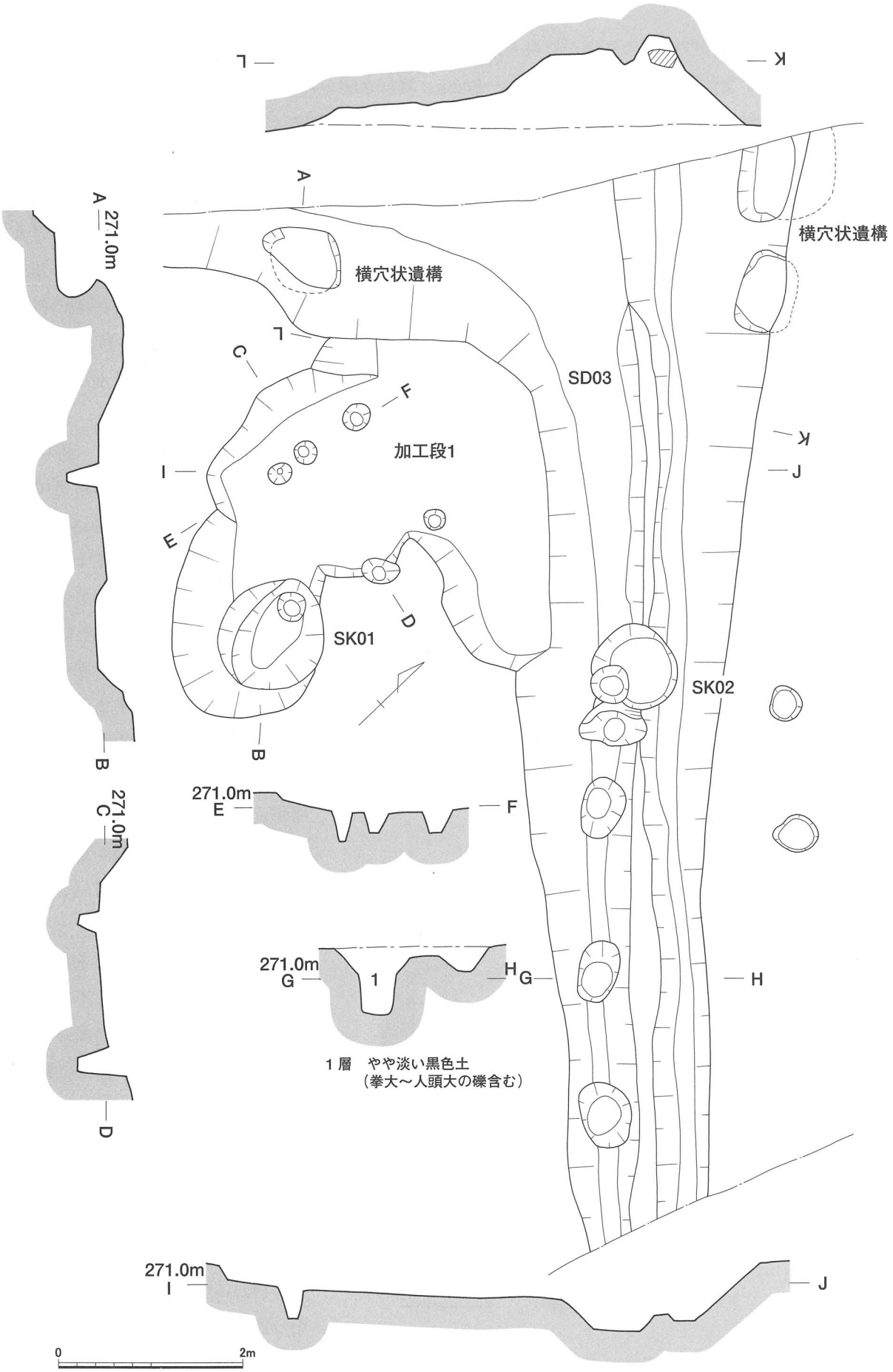


第67図　集石土坑実測図（S=1／30）

南西側の溝の底面に沿うように、５穴のピットが検出されている。これらのピットは上端で径が30～60cm、深さが検出面から70cm前後としっかりとしたピットである。溝との堆積土の関係がつかめていないので因果関係は不明だが、片側の溝底に沿って並んでおり、関連のある遺構である可能性も捨てきれない。また平行する２つの溝にまたがって礫が敷かれた土坑（SK02、後述）が検出されているが、これも関連性は不明である。一方北東調査区



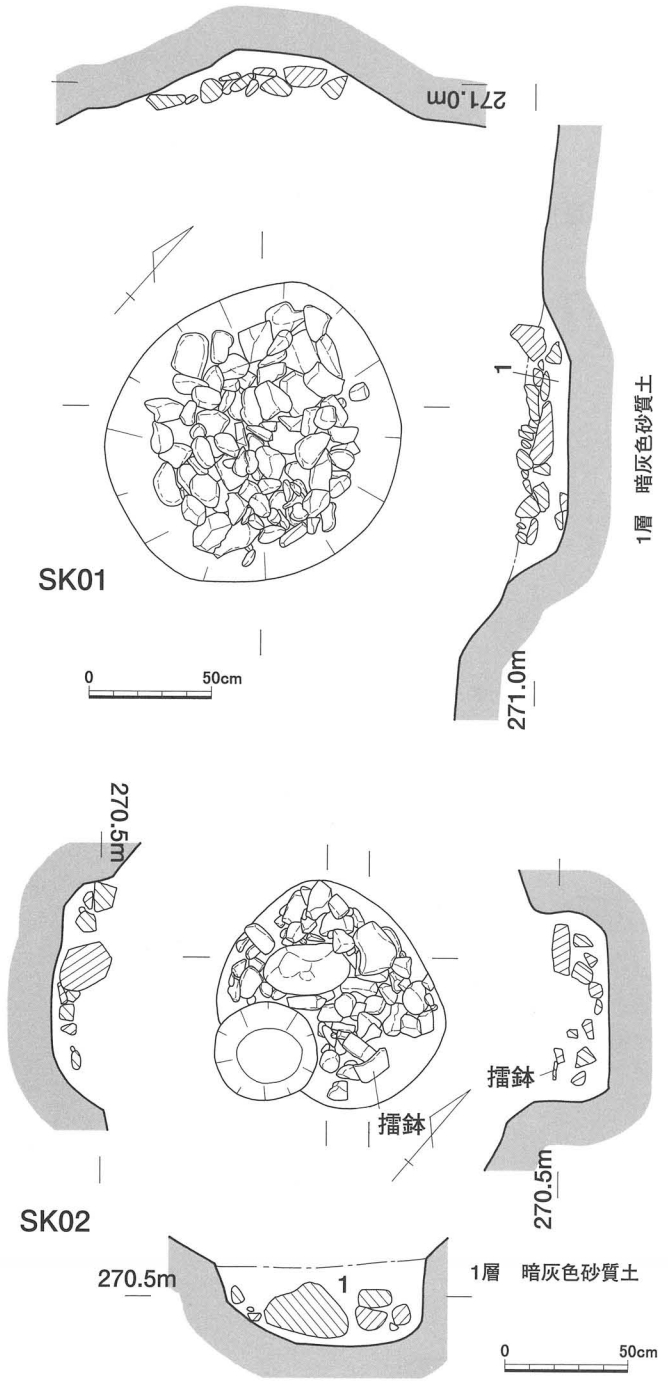
第68図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）遺構群３実測図（S=1／200）



第69図　神原Ⅱ遺跡SD03・SK01・SK02加工段１　横穴状遺構実測図（S＝1／60）

端付近の北東法面及び南西の法面が折れた北西向きの法面に、横穴状の掘り込みが３カ所検出されている。およそ全体像がわかる２穴は幅70～80cm、奥行き60～70cm、高さは現状で40～50cm前後である。調査区の北端の１穴は調査区外に延びるため全形は不明だが、奥行きが１m以上あり、他の２穴よりはかなり大形である。

溝の性格は不明だが、南西側が大きく折れ曲がる点、片側の溝底にピットが並ぶ点、法面に横穴状の遺構が掘り込まれている点などから、溝本来の水を流す用途ではなかった可能性が高いと考えている。時期は堆積土内から15～16世紀と考えられる中国製の青磁が出土しており（写真１－36）、その時期を上限とするが、厳密な時期判定は出来ない。



第70図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SK01・SK02実測図
（S＝1／30）

加工段１（第69図）　SD03が南西側に折れ曲がる地点付近で検出された、不定形に削り込んで平坦面を形成した遺構である。SD03と同時期で、現況がほぼ遺構の全容なのか、SD03と時期差があって遺構の一部だけが検出されているのかは不明である。現況では幅3.8m以上の平坦面があって、南側に1.7m前後の幅の狭い平坦面が突出して作り出されている状況である。この幅が狭い部分の壁際にピットが５穴検出されている。周囲にはほとんどピットがないだけに平坦面に関わる遺構の可能性があるが、性格は不明である。また幅の狭い平坦面部分の端にはSK01が付属するように検出された。

SK01（第70図）　加工段１の南端に小規模な平坦面が続き、そこから検出された土坑である。上端で115×125cmのほぼ円形を呈し、斜面は緩やかで深さは検出面から20cm前後と浅い。内部には10cm未満から20cm程度の礫が敷き並べられたように詰まってい

た。周辺でよく検出される「麻蒸し」の集石土坑とは全く異なり、炭等は認められず、また礫の入り方も上面がある程度そろえられたような状況でアトランダムに投げ入れたような状態ではない。ただ、性格や時期を示すような遺物や遺構の状況は認められなかった。礫をはずした後に、底面からピットが検出されている。

SK02（第70図）　SD03の底面、平行する２条の溝にまたがって検出された土坑である。上端で75×90cmの楕円形を呈し、斜面は急で深さは検出面から30cm前後を測る。SK01と同様に、内部には礫が詰まっていたが、異なるのは長さ35cmほどの大きな礫が混じっているのと、深さが深いのと比例して礫が厚く詰まっている点である。炭等を含まないのはSK01と同様である。

礫の上面に接して、肥前系かと推測される擂鉢片が出土しており（写真１－37）、17世紀前後のものと考えられる(注1)。礫が意図的に詰め込まれたものだとすれば、この遺構の時期はこの擂鉢の時期に近い可能性が高い。

遺構群３の時期　遺構群３の中で時期を示す可能性がある遺物は、前述したSK02出土の17世紀前後の擂鉢がある。SK01も同様な構造なので、同時期の可能性もある。その他の遺構については不明だが、SK01、02と関連があるとすれば近い時期の所産ということになる。ただこれらの遺構群直上の黒色土からは18世紀末～19世紀頃の肥前系磁器も出土しており、時期の確定は難しいといわざるを得ない。

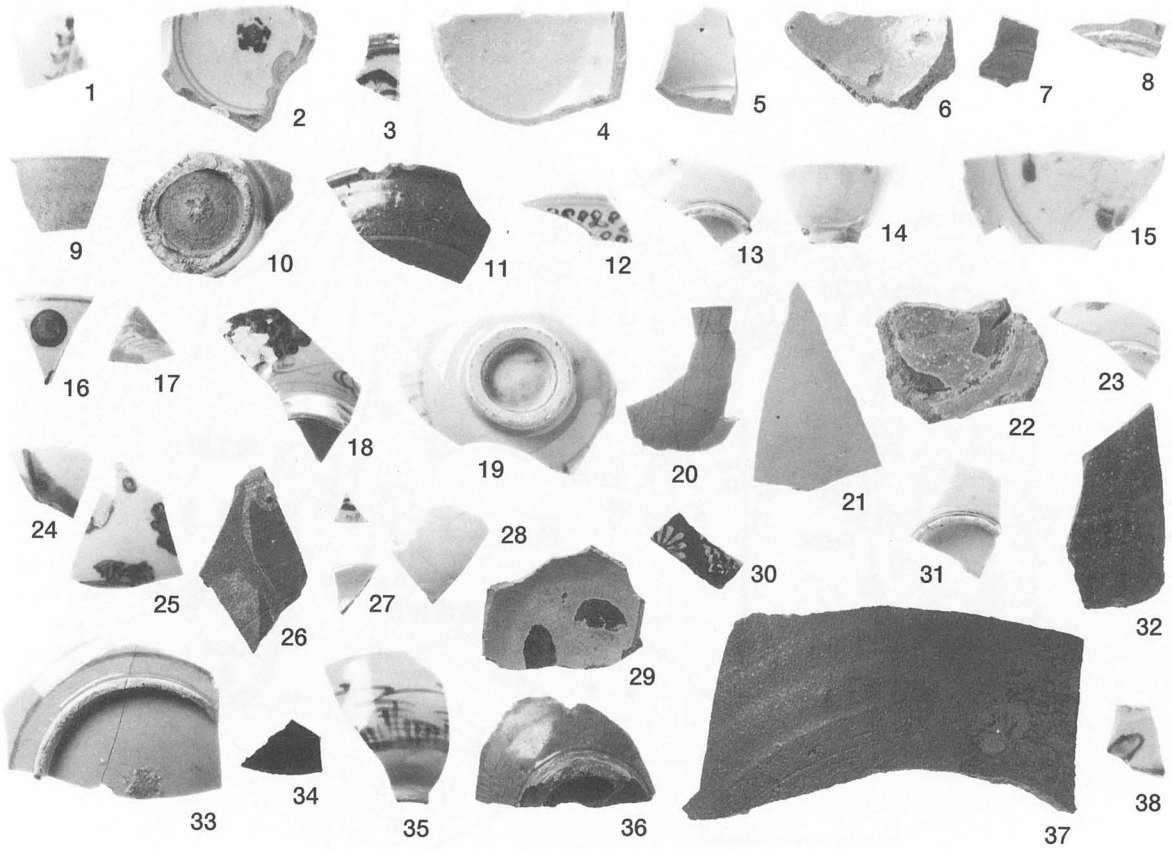


写真1　遺構群１～遺構群３周辺出土の陶磁器

１～３…遺構群１周辺　　４～35…遺構群２周辺　　36～38…遺構群３周辺

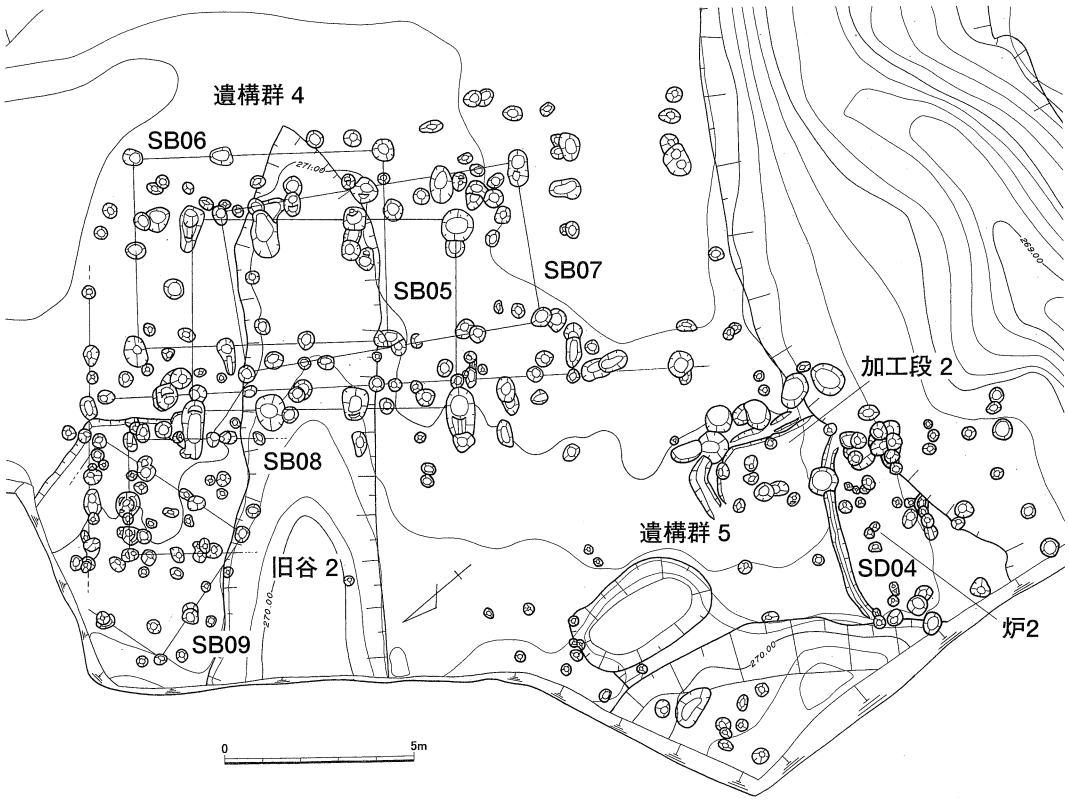
4．遺構群４の調査（第71図）

旧谷２の現況での谷頭をまたぐような形で検出された遺構群で、多くのピットが検出された。これらのピットは基本的に掘立柱建物を構成するものと考えられ、SB05～SB09の５棟の建物を復元している。旧谷２が深まっていく部分の建物跡は、柱穴列がとぎれており、谷が埋まった後に形成された建物群の可能性が高い。

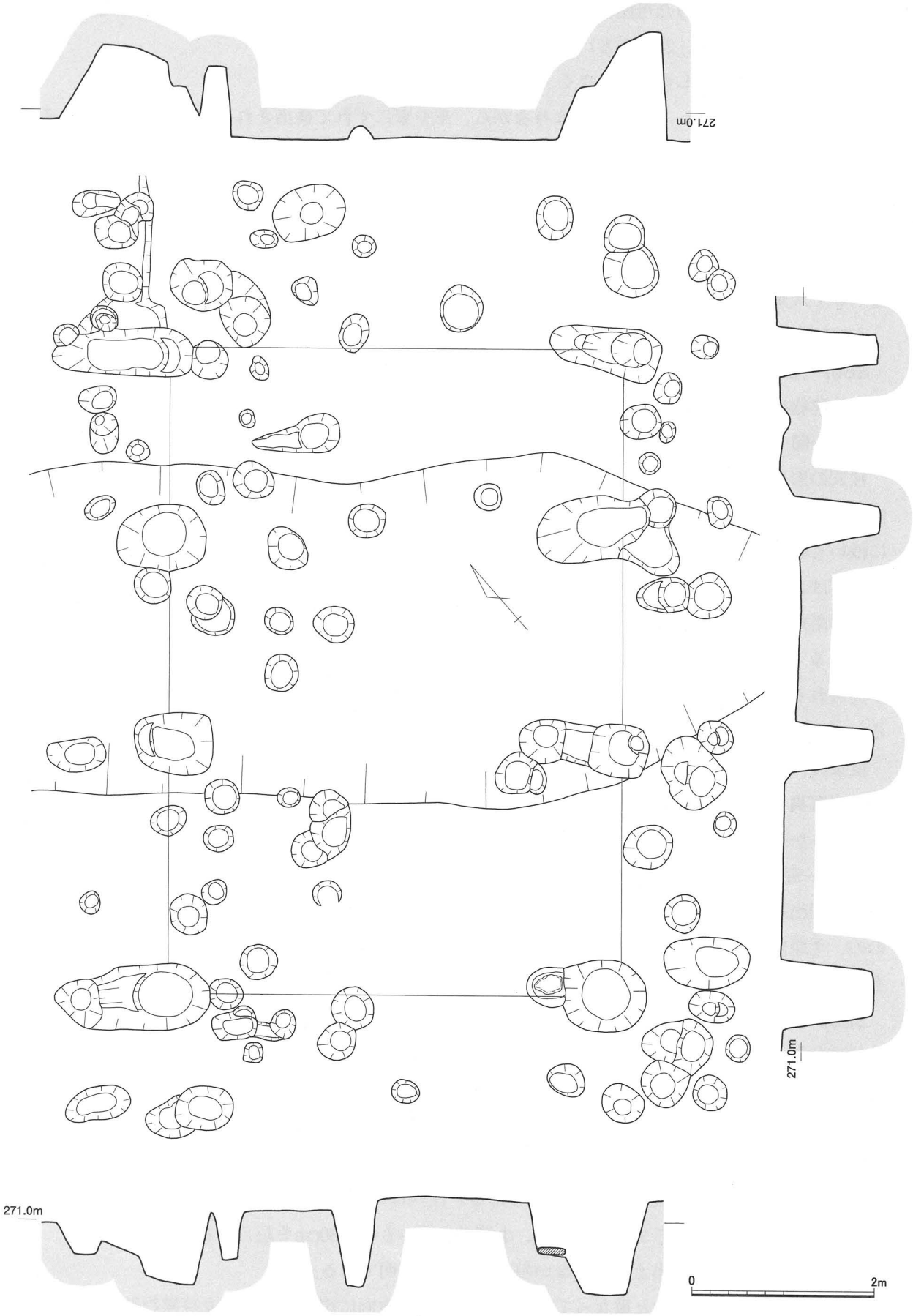
ピットの分布や規模を大局的に眺めると、おおよそ中央付近を境に南東側はピットの規模が大きめでピットの密度が低め、北西側がピットの規模が小さめで密度は高め、という傾向を見て取れる。よって復元できる建物も南東側は柱穴が大きく柱間も広い建物（SB05～SB07）、北西側は柱穴が小さく柱間の狭い建物（SB08、SB09）となっている。つまり、建物は建て替え等で複雑に重なってはいるものの、規模の異なる２種の建物がセットとして存在した可能性がある。また直線状に復元できる柱列もあり、柵等があった可能性もある。

SB05（第72図）　比較的大形の柱穴で構成される掘立柱建物跡である。１間×３間と考えられ、梁行は柱穴中心で5.1mの長い１間、桁行は7.2m、柱間の長さは揃っていないが両桁で柱の位置は一致しており、柱間が北東側から2.1m、2.4m、2.7mとなる。柱穴の規模は検出面で50～80cm前後、平面形が方形のものも見られる。深さは検出面から１～1.2m程度と非常に深く、一部スロープを付設する柱穴もある。

南東側の柱列の約１m外側には、各柱穴に対応する位置に小型の柱穴列が認められる。庇なり縁なりが付設されていた可能性がある。また反対側の北西側柱列の外側にも、対応する全ての柱穴ではないもののやはり１m前後外側に小型柱穴が認められるものもあり、付設された何らかの構造、



第71図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）遺構群４・５配置図（S＝1／200）



第72図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB05実測図（S=1／60）

施設が桁側の両側にあった可能性もある。仮に両側の小型柱穴も含めて梁間を測ると7.2m前後となり、ほぼ正方形（４間、24尺四方）の建物となる。

直接柱穴内から出土した遺物はなく、時期は不明である。

SB06（第73・74図）　SB05と重なりながら、やや東にずれて検出された掘立柱建物跡である。建物の長軸方向はSB05とほぼ同様である。南東側の桁方向の１穴が未検出だが、１間×３間と考えられ、梁行方向は柱穴中心間で5.1mの長い１間でSB05と同規模である。桁行の規模は6.9mで、柱間は全て検出できた北西側で2.4m、2.1m、2.4mである。柱穴は円形が基本で、径は検出面で50cm前後のものが多く、SB03に比べて小型である。深さは検出面から40～70cm、スロープが付く柱穴が１穴見られる。

直接柱穴内から出土した遺物はなく、時期は不明である。

SB07（第73・74図）　SB05、SB06と重なって、南西側にややずれて検出された掘立柱建物跡である。建物の長軸方向はSB05、SB06と若干ずれている。１間×４間規模と考えられ、梁行方向は柱穴中心間で4.2m前後、桁行は8.1m前後、柱間は柱穴の中心でおよそ２m前後の距離で揃っている。

柱穴の形は円形が基本で、大きさはややばらつきがあり検出面の径は40～60cmを測る。深さも浅いものは検出面から40cm、深いものは90cmとばらついているが、柱を支えられないような極端に浅いものはないうえ、浅い柱穴は隅角には認められない。またSB05、SB06に見られたようなスロープはこの建物跡の柱穴には認められない。

なお南東側桁方向の柱穴のうち、南側の３穴の約1.3m外側には、対応する位置に小型の柱穴が認められる（第72図点線）。また反対側の北西側でも同様に南側３穴の約1.1m外側に同様の小型柱列が見られる。桁方向の全域ではないが、SB05と同様に張り出し構造が一部分にあった可能性がある。

直接柱穴内から出土した遺物はないが、接するピット内より中国産と考えられる染付が出土している（写真２－40）。16世紀末～17世紀初頭のものと考えられるが、この建物跡の時期を示しているかどうかは不明である。

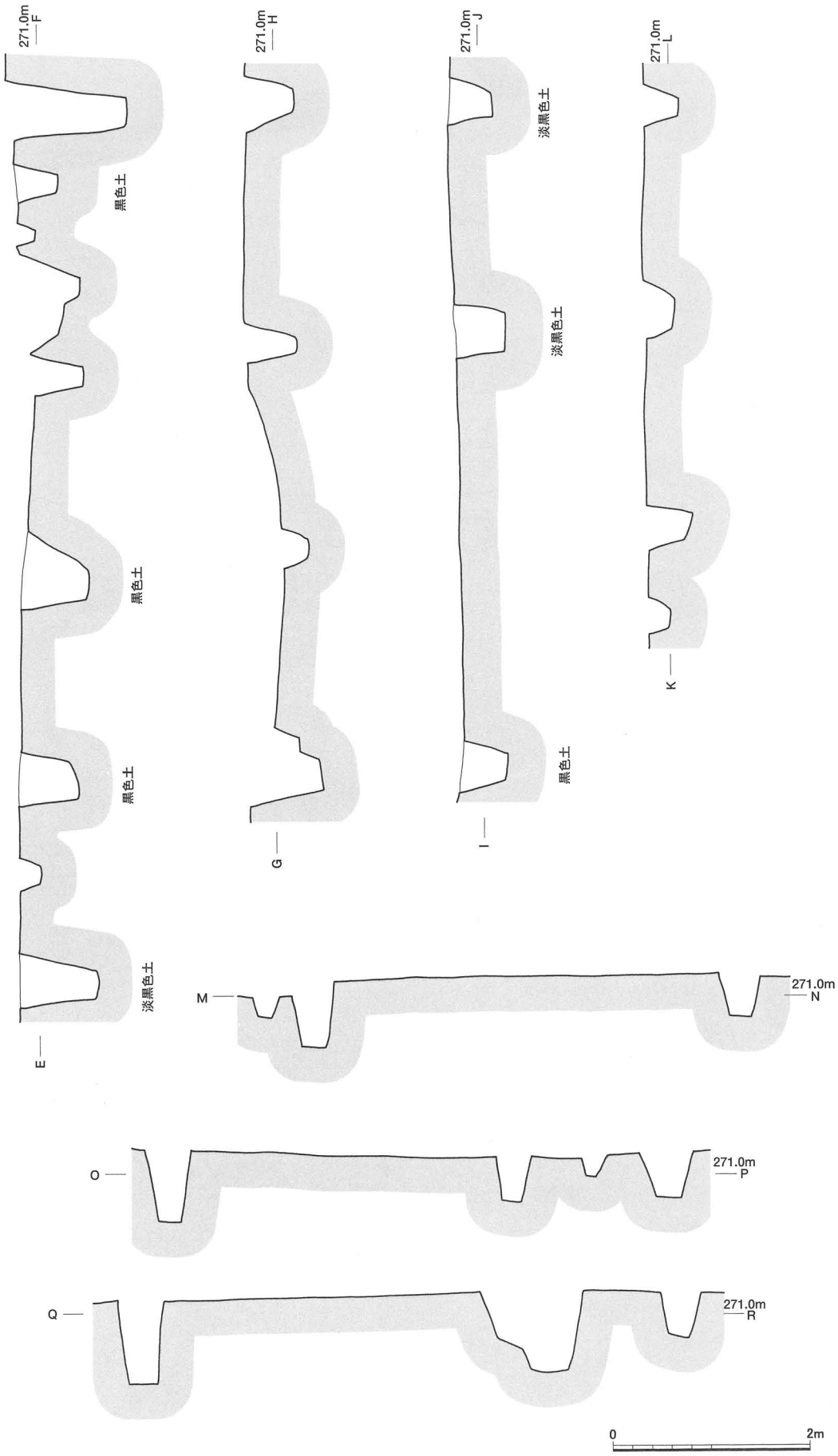
SB05～SB07は、いずれも重なっており、同時併存はありあえない。それぞれの建物の時期差は明確な搬出遺物がないだけに不明といわざるを得ない。ただ柱穴の規模や形には若干差異はあるものの、主屋部分の面積は大差がない。また次に述べる北西側に接した建物群との有機的関係を考え合わせると、さほど時期をおかない建て替えを考えた方が合理的かもしれない。

SB08（第75図）　SB05～07の北西側に小型の柱穴が密集する箇所があり、その中で復元した掘立柱建物跡である。長軸方向はSB05、SB06とほぼ同方向で、建物の南半分は、旧谷に入り込んで検出できていないが、本来は谷堆積土の黒色土中に柱穴があったものと推測される。SB08として復元した周辺には、同方向に並ぶ形で多くの小型柱穴が検出されており、おおむね復元した状況で建替えが何度か行われたと考えるのが自然であろう。建物の梁行方向の幅は３m前後と考えられ、柱間は厳密な柱穴同定が困難なため不明である。柱穴は検出面での径が30cm前後のものが一般的で深さは柱穴によってまちまちであるが、小型でも深いものは80cmを超えるものもある。

直接柱穴内から遺物は出土していないので、時期は不明である。

SB09（第75図）　SB08と重なって、長軸がほぼ東西方向に復元できる掘立柱建物跡である。総体的に見ると柱間などにばらつきがあるが、桁行の南側の柱列３間分が1.5m間隔で規則正しく並ん

第73図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB06・SB07実測図（S=1／6）



第74図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB06・SB07断面図

でいるとともに、検出面の直径も35～40cm前後でよく揃っており、また深さも60～80cmとしっかりしている。それに比べて梁方向と、対応する北側の桁方向の柱穴や柱間の在り方は不安定で、図の通りの復元が可能かどうかは不確定といえる。ただ、反対側に対応する柱列を見いだすことが出来ないためこのような復元を行っている。現在の想定で、３間以上×１もしくは２間の規模となり、梁行方向の長さは3.9m前後となる。

SB06、SB07とSB08の間、及びSB06とSB08の北東辺からやや離れた部分にそれらの建物の軸と平行にピットが直線状に並んで検出されている。建物と建物の間を区切り、建物群の北東側を区画する塀や柵などがあった可能性もある。

５．遺構群５の調査（第76図）

遺構群４の西側に、若干の遺構の空白部分を隔てて検出された遺構群である。この遺構群では明確な掘立柱建物跡は検出されず、炉や土坑群、溝などで区画された平坦面などで構成されており、遺構群４と対照をなしている。遺構群５の南側は大きな旧谷３と重なっているため、本来存在した遺構が検出できていない可能性も十分にある。

加工段２（第76図）　地山の高い側をわずかではあるが削り込んで、平坦面を区画した遺構である。南側は旧谷３に入り込んで未検出だが、北側は曲線を描いてほぼ直角に折れている。削り込んだ壁の内側には幅20～40cmほどの土手を削り残すことにより、結果的に壁際には溝を形作っている。溝の内側には柱穴状のピットがいくつか検出されているが、明確に掘立柱建物を復元できるような並びは認識できない。

加工段２の壁の外側に沿うように円形の土坑が６基並んで検出されている。その一部は加工段２の壁を切っており、時期的には差があるものと考えられる。これらの土坑は幅が60～90cm、一部は奥側の壁がオーバーハングしており、本来は一部が横穴状になっていたものが、上部が削られて単純な土坑状になっている可能性がある。土坑が加工段２よりも新しく、また土坑の上部が削られているとするならば、加工段２の東側は本来は現状よりも高まっていて壁も今より高いものであったことになる。

加工段２や土坑群の性格を知る手がかりになるような遺物、遺構の状況は見られない。また直接遺構に関わる遺物も出土しておらず、時期も不明である。

SD04（第76図）　加工段２の南西側で検出された幅が25～30cm、深さが検出面から10cm前後の小規模な溝である。東西に近い方向でわずかに湾曲しながら延びており、東側は旧谷３にぶつかって、西側は落ち込みにぶつかって検出できなくなっている。現状での検出された長さは約５mで、内側の何らかの施設に伴うものの可能性が高い。内側には柱穴状のピットや炉状の遺構が検出されており、このことについては次に述べる。

炉２と周辺施設（第76・77図）　SD04から約２m内側（南側）で、壁面がよく焼けた小規模な落ち込みが検出され、炉２と呼んでいる。後のピットに切られて全形は不明だが、残存部分で検出面の幅が22cm、深さが10cmとかなり小型である。現状で残存している長さは25cmほどだが、後に切ったピットの壁面に被熱して赤化した部分が残存していて、少なくとも60cm以上はあったことが分かり、細長い炉であったことが分かる。ただ被熱した赤化面は次第にすぼまっており、幅はさ

第75図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB08・SB09実測図（S=1／60）

らに狭くなっていたものと推測されたる。壁面は還元して灰色に固化しており、空気を遮断する上部構造があったことを示唆している。実際、炉を切ったピットの覆土からは炉壁片が出土しており、炉を破壊した際の残滓が再堆積した可能性が高い。還元面の外側は赤色に変色している。

炉の周囲には大小のピットが多く検出されている。ピットは20～30cm前後の小型のものと、40～50cm前後の中型のものに大別され、炉の東側には中型のピットが集中している部分も見受けられる。これらのピットのいずれかは炉に関連する可能性が高いが、明確な建物は組めない。しかしピット群の構成を大局的に眺めると、炉の周囲をほぼ方形に囲むような配列があるように見える。

第76図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）遺構群５（加工段2　炉2　SD04）実測図（S＝1／60）

SD04とともに炉を取り巻く遺構が構成されたと考えることも出来よう。

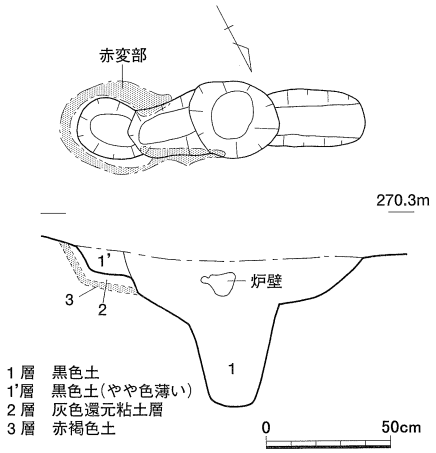
第４遺構群と第５遺構群の関係と時期（第71図）　前述したように一定の間隔をおいて検出された２つの遺構群は、その性格を全く異にしている。遺構群４は多くのピットにより構成され、少なくとも５棟の掘立柱建物が復元できる。それらはまた規模の違う２つの群に分けられ、大小２棟からなる建物が同時併存していた可能性がある。一方遺構群５は、炉や区画する段や溝、横穴状の土坑などで構成され、明確な掘立柱建物は認められない。作業空間や貯蔵などの機能が推測されるような遺構構成である。重なることなく、なおかつ遠からずの位置に配置された２つの遺構群は、全く機能を異にしており何らかの有機的関係を持っている可能性もある。つまり一つの生活単位に於ける居住域と作業・貯蔵的機能域という理解も可能であろう。ただそう考える明確な証拠はなく、あくまでも状況から見た解釈である。

これらの遺構群の時期を直接示すような遺物は出土していない。ただ、検出面直上の黒色土からはかなりの数の陶磁器類（写真２－39～54）が出土している。それらは中国もしくは肥前系の陶磁器が中心で、16世紀末～18世紀頃のものが多い。あくまでも状況証拠ではあるが、およそ近世頃の遺構である可能性が強い。

６．遺構群６の調査（第78図）

遺構群４、５と旧谷３を隔てた南側から検出された遺構群である。方形を基調とする柱穴によって構成された掘立柱建物が２棟（SB10、SB11））と土坑が１（SK04）、壁に粘土を貼り付けた土坑が３基検出されている。

SB10（第79図）　少なくとも１穴分の柱穴が検出できていないが、３間×１間規模の掘立柱建物であったと推測される。想定通りの規模であったとすると、桁行の長さが7.5m前後、梁行の長さが4.4mとなる。桁行の柱間は2.5mで揃っているようにも見えるが、残存する柱痕もしくは柱抜き取り穴の位置を見ると、中央の柱間は2.1～2.2mとなる。よって両側の柱間は2.6～2.7m前後となり、中央の柱間がやや短い柱配置となる。柱穴の平面形は正方形もしくは長方形を基調としており、検出面での規模は80cm前後を基本として60～110cmまでの幅を持つ。検出面からの深さは15～80cmと大きな差があり、北にいくに従って浅くなっている。これは検出面が北に向かって傾斜を持っているためで、柱穴の底面のレベルを比較すると逆に北にいくほど深くなっている。当時の生活面は水平に近かったものと思われるが、おそらくは基盤の傾斜を意識して北ほど深く掘り込んだものと推測される。また柱穴の一部は旧谷３の斜面に入り込んで検出されているが、旧谷３内の柱穴は明らかに浅いもので、調査で検出できなかったものの実際の掘り込み面は旧谷が埋まった黒色土面にあったことは間違いないと考えられる。



第77図　炉２実測図（S＝1／30）

柱痕もしくは柱抜き取り痕と考えられる痕跡が桁行の中央２穴（両側で４穴）で検出されている。そのうち２穴には内部に石が入り込んでおり、抜き取り穴の可能性が高いと判断している。なおこの抜き取り痕が柱の大きさを反映しているとすれば、柱の径は20～30cmとなる。

またこの抜き取り穴の周囲には裏込めと考えられる土砂が堆積していたが、いずれも黒色土と灰白色の砂質土が混合した土砂で、柱穴を掘削した際の表層の黒色土と基盤となっている第１ハイカを埋め戻したものと考えられる。ただ黒色土が基調の層と灰白色砂質土が基調の層とが互層状に重なっている状況も見られるので、意図的に埋め戻す土質を違えて裏込めを形成している可能性もある。

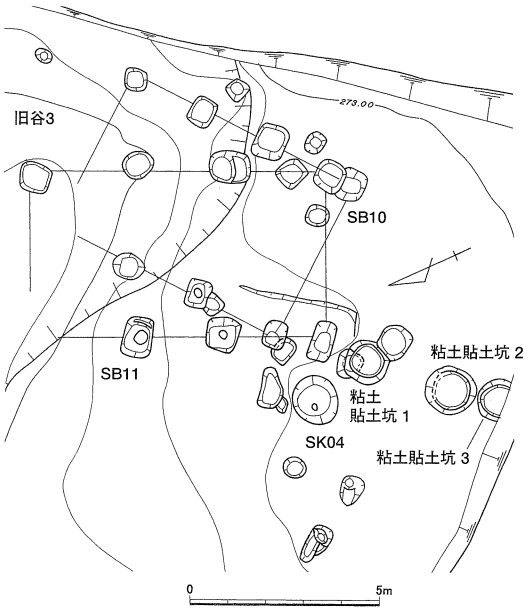
桁行東側の柱列の北側から２番目の柱穴から、陶器の皿が出土している（写真２－55）。在地産と考えられ、およそ18世紀頃のものと考えられる。この建物の時期については、この遺物の時期を上限とするものと考えている。

SB11（第80図）　SB10とほぼ重なって、方向を約25°振った掘立柱建物跡である。基本的にSB10とよく似た構造の建物で、少なくとも１穴分の柱穴が検出できていないが、３間×１間規模の掘立柱建物であったと推測される。想定通りの規模であったとすると、桁行の長さが6.3m前後、梁行の長さが4.5mとなる。桁行の柱間はおよそ2.1mを基本としているようだが、桁行北側の中央の柱痕もしくは柱抜き取り痕間は1.9mとやや短い。柱穴の平面形は正方形もしくは長方形を基調としており、検出面での規模は80cm前後を基本として55～95cmまでの幅を持つ。柱穴の深さは検出面から40～75cmとばらつきがあるが、北東側ほど検出面のレベルが下がっており、現状で浅い柱穴も実態の表土からはもっと深かったものと推測される。旧谷３との関係は、SB10と同様で、調査時には検出できなかったものの基本的に旧谷３が埋まった黒色土の面から掘り込まれた可能性が高い。

柱痕もしくは柱抜き取り痕は、20～30cm前後の直径で、柱穴の底まで至るものと、柱穴の底から間層を挟んで距離が有るものの双方がある。また柱痕もしくは抜き取り穴の周囲には裏込めと考えられる土砂が堆積していたが、SB10同様な状況でいずれも黒色土と灰白色の砂質土が混合した土砂で、柱穴を掘削した際の表層の黒色土と基盤となっている第１ハイカを埋め戻したものと考えられる。ただ黒色土が基調の層と灰白色砂質土が基調の層とが互層状に重なっている状況も見られるので、意図的に埋め戻す土質を違えて裏込めを形成している可能性もある。

柱穴内から直接的に時期の判る遺物は出土していないが、柱穴のあり方などはSB10とよく似ており、大きな時期をおかずに建替えられた建物と考えるのが自然であろう。両者の前後関係は、SB10を構成する柱穴がSB11を構成する柱穴を切っており（第80図左下の２個の柱穴の関係）、SB11が古いことは明らかである。

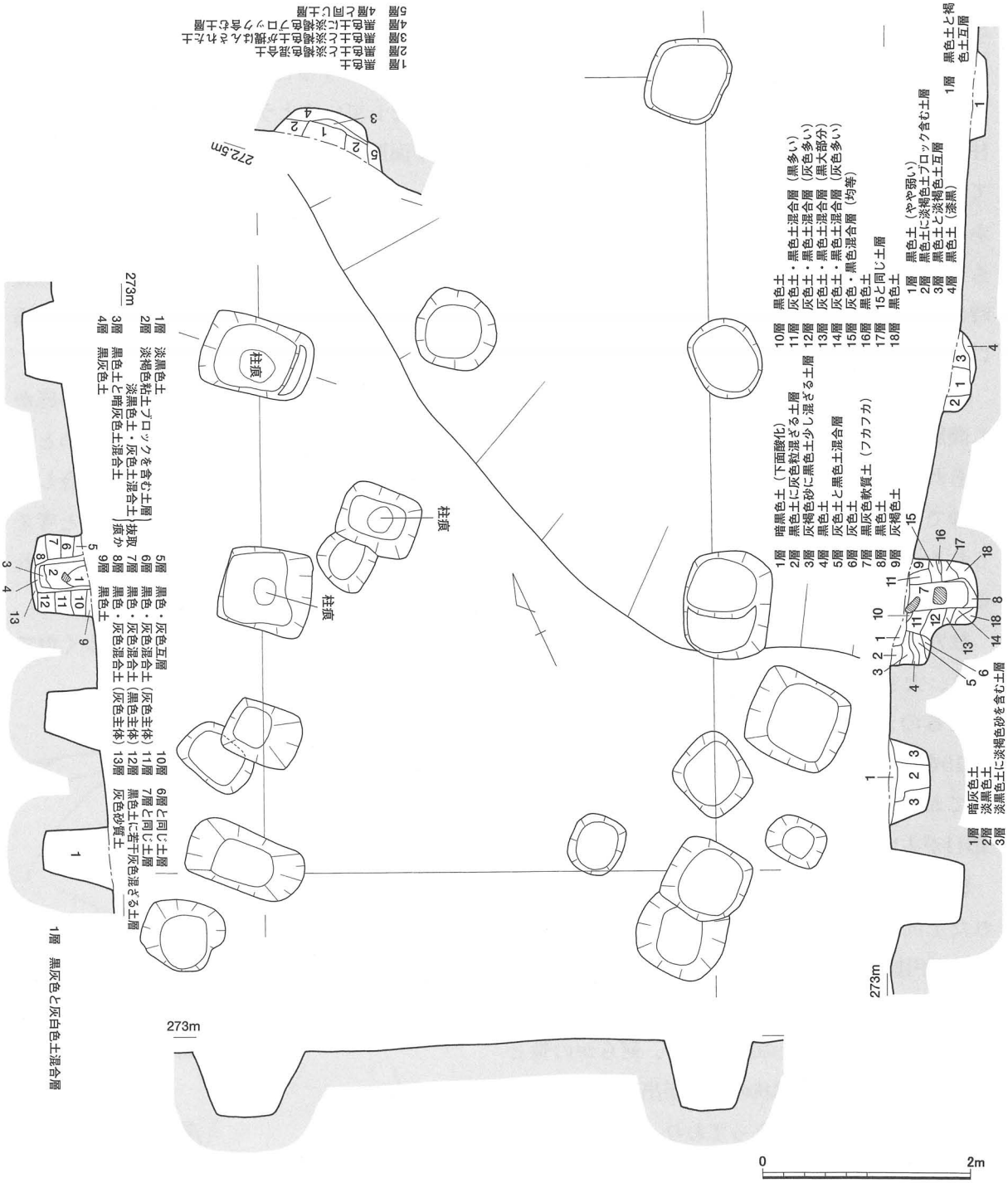
SK04（第81図）　SB10の西側に接して検出された土坑である。規模は検出面で1.2×1.3m程度のほぼ円形を呈し、壁は急角度で掘り込まれ、底面で直径0.9m前後である。深さは検出面から0.85mを測る。堆積土の底近くで、何らかの骨と考えられる断面が海綿状の物質が出土した。劣化が著しくスポンジ状になっており、とりあげた段階でほとんど形状を失ってしまったため、同定はできていない。ただ現地で確認したところ、四肢



第78図　神原Ⅱ遺跡遺構群６配置図

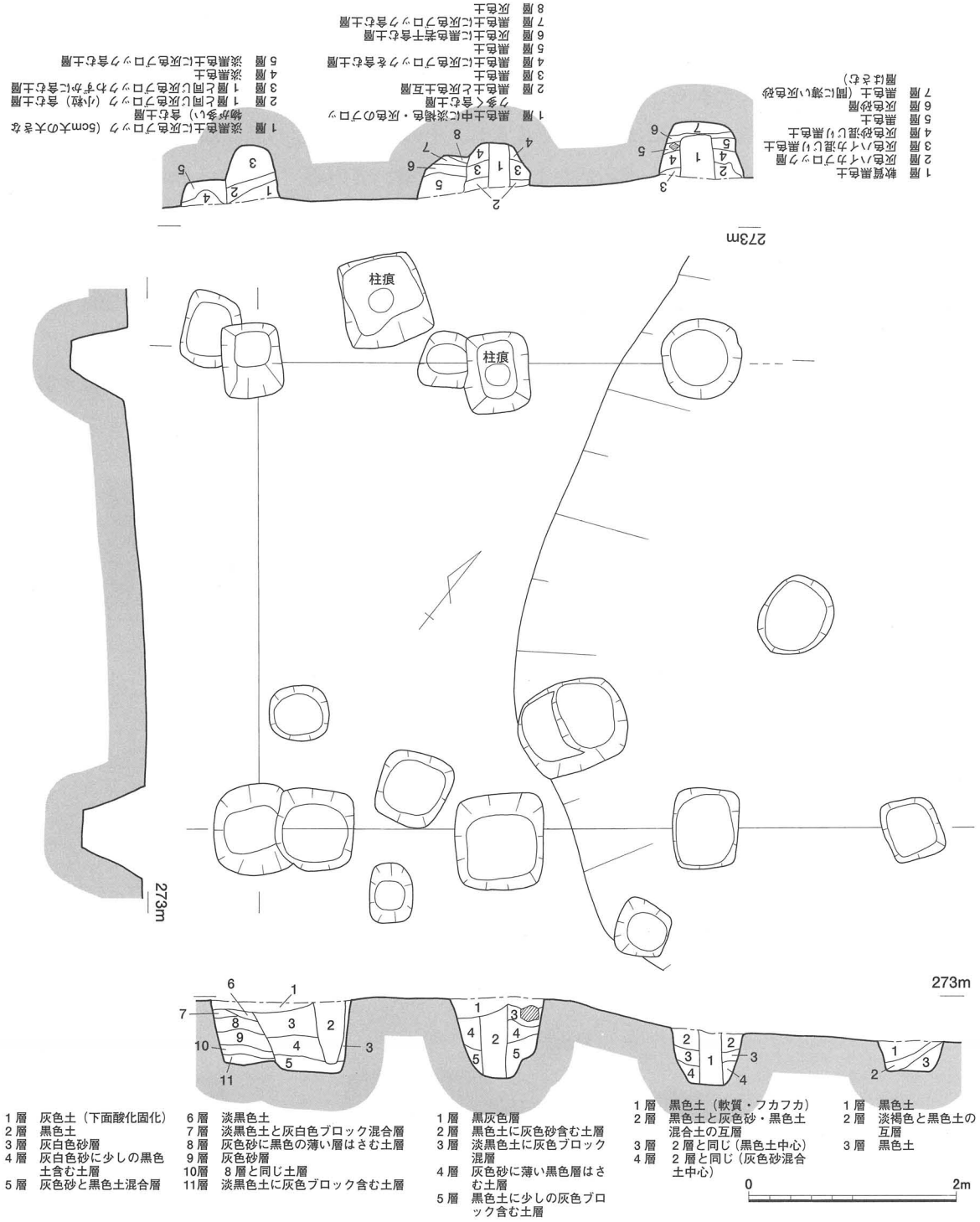
骨らしい棒状の形態の骨と頭骨らしき曲面を持つ薄い板状の骨が認められた。頭骨の様子は人骨らしい印象を受けたが、あくまでも専門家的知識を持たない者の印象に過ぎない。堆積土の状況を見ると、明らかに壁の内側に縦方向の土の違いが観察でき、有機質による何らかの仕切りがあったことをうかがわせる。骨が出土したこととあわせて、桶状の棺が埋設されていた可能性が高いものと考えられる。土坑内から骨以外の遺物は出土していないため、時期は不明である。

粘土貼土坑１（第81図）　SB10、SK04の南側に接して検出された土坑で、壁面に粘土を貼り付けた特徴的な土坑であり、粘土貼土坑と呼ぶ。検出面で直径1.2m前後のほぼ円形を呈し、壁は若干



第79図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB10実測図（S＝1／60）

の傾斜を持って掘り込まれ、底面では0.8m前後の直径となる。深さは検出面から50cm前後を測る。壁面には橙色系の粘土が貼り付けられているが、上部ほど厚く（15cm前後）、下部に行くほど薄く張られているため、粘土による壁面はほぼ垂直に落ちている。底面はほぼ水平に加工され、その上にはやはり粘土が敷かれている。土坑の機能については、全ての壁に丁寧に粘土が貼り付けられていることから、水を溜めるような機能が推測されるが、堆積状況としてはラミナ状の堆積は見られず、水が溜まったままで埋まったような状況ではない。



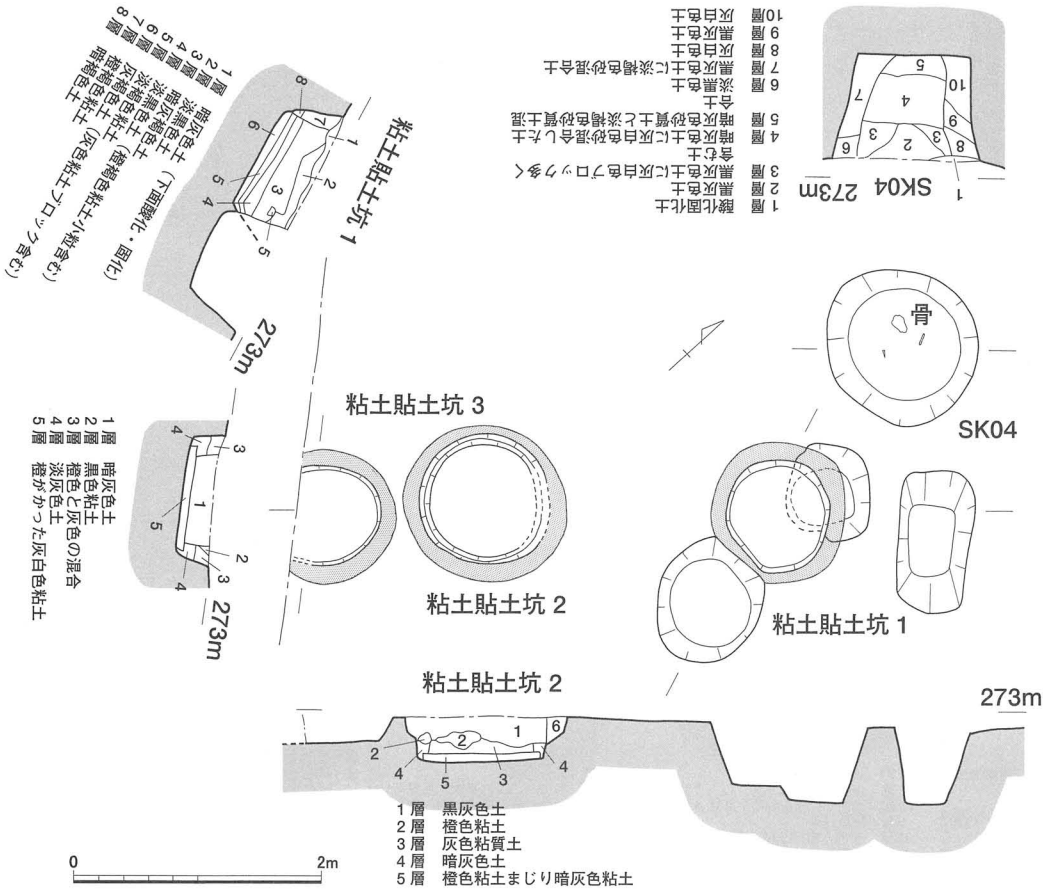
第80図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SB11実測図（S＝1／60）

堆積土中から陶器片が２点出土している（写真２－56、57）。56は在地産と考えられる陶器碗、57は肥前系と考えられる陶器碗で、いずれも19世紀台のものと考えられる。堆積土中で、遺構の上限を示す遺物ではあるが、時期的に揃っており遺構の時期に近いものと推測される。

粘土貼土坑２（第81図）　粘土貼土坑１から約1.1m南西側で検出された土坑である。壁面や底面に粘土が貼られるのは粘土貼土坑１と同様だが、底面付近の構造に若干の違いが見られる。底面から約15センチ上方に、斜めに傾いているものの幅10～15cmほどの平坦面がつくられ、その平坦面から上方の壁に平坦面の幅で橙色系の粘土が貼り付けられている。また底面には厚さ５cm強の粘土が敷かれているが、壁面との間に５cm内外の空隙が認められる。つまり粘土面を機能上の底面と仮定すると、壁際に細い溝がめぐる状況である。またその「溝」部分から縦方向に別種の土の立ち上がりも見られることから、板等が壁に立てられていた可能性がある。使用状態でのあり方を敢えて復元すると、土坑の周壁には板がめぐらされ、その背後の壁との間には粘土が詰められて目張りされている状態、底面は板を埋め込むように粘土を敷いている、というような状況であろう。規模は検出面で直径約1.3m前後、底面で0.95m前後の円形、深さは検出面から35cmである。堆積土の底面近くには粘質土が堆積しており、ある程度は水が溜まっていた状況も推察される。

時期を推測できるような遺物は出土していないが、位置関係から見て粘土貼土坑１と近い時期ではないかを推測される。

粘土貼土坑３（第81図）　粘土貼土坑２の南西側にほぼ接して検出された土坑で、約1／3は調



第81図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）SK01粘土貼土坑１～３実測図（S＝1／60）

査区外に延びており、全容は明らかではない。検出面の直径が約1.1m、底面の直径が0.8m前後の円形で、深さは検出面から約30cmである。底面での粘土のあり方は粘土貼土坑２と同様で、厚さ７cm前後の粘土面は壁際で途切れ、壁際に細い溝がめぐるような状況となっている。時期等を判断できるような遺物は出土していない。

出土陶磁器と遺構群４、５、６の時期　遺構群４、５、６の時期についてはそれぞれの個別遺構の中で出土した遺物からある程度推測できるものもあったが、総体としては不明瞭である。ただ遺構検出面の上に堆積していた層から陶磁器類が出土しており、その時期的傾向を読み取ることで大雑把な時期の範囲を見て取ることもあながち無意味ではないだろう。写真２－39～60はこれらの遺構群の周辺から出土した陶磁器であるが、39～48は遺構群４及びその周囲から出土したもの、49～54が遺構５及びその周辺から出土したもの、55～60が遺構群６とその周囲から出土したものである。それらの遺物は、遺構群４、５の周辺から出土しているものは16～18世紀が中心、遺構群６周辺出土遺物は18～19世紀が中心という大略的な傾向が見て取れる。こうした傾向から判断すると遺構群４、５は近世、遺構群６は近世後半～近代という年代幅の中で考えられるかもしれない。

７．南調査区の調査

当該年度調査の主体となる北調査区から約25m南側に設定したのが南調査区である。およそ20m×６m程度の小さな調査区（第５図、第60図）で、調査区の南側には自然地形と推察される谷地形があり、谷に堆積していた黒色土から縄文土器、弥生土器などが出土している。また谷の北側

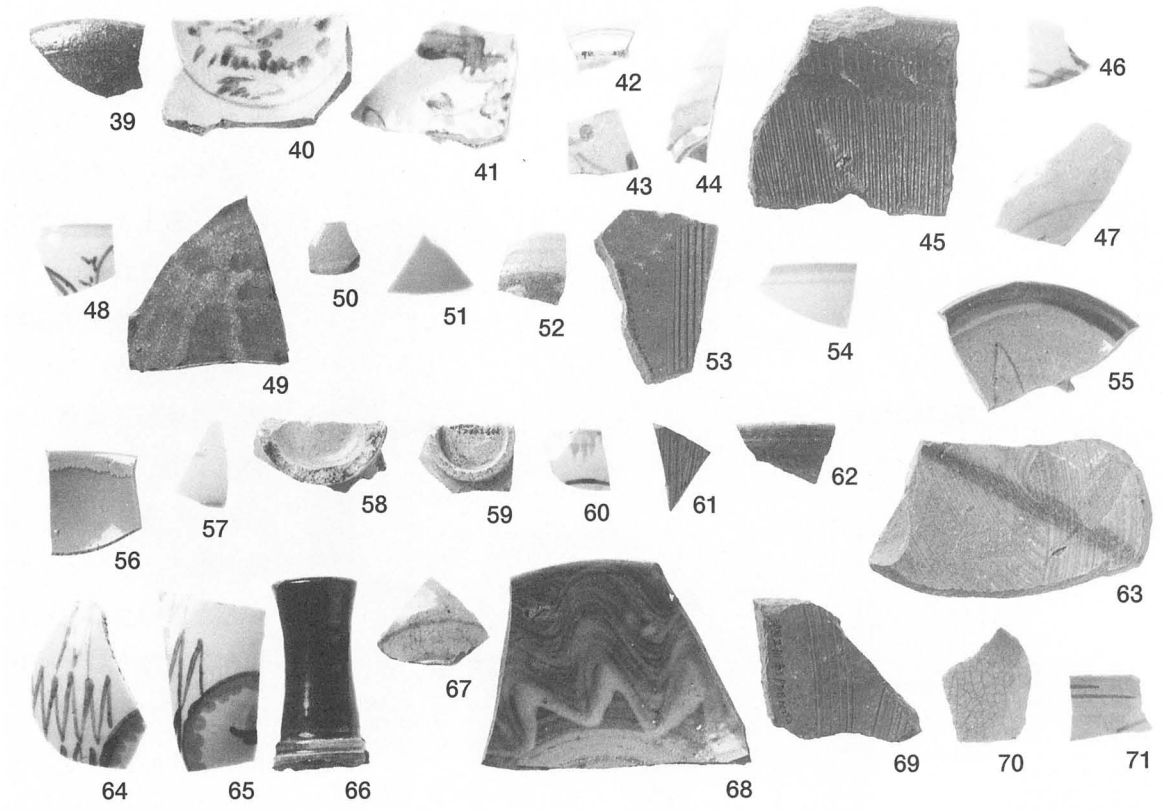


写真２　遺構群４～遺構群６周辺・南調査区出土陶磁器
39～54、58～60…遺構群４・５　　55～57…遺構群６　　61～71…南調査区

の基盤が高い部分から土坑などが検出された。

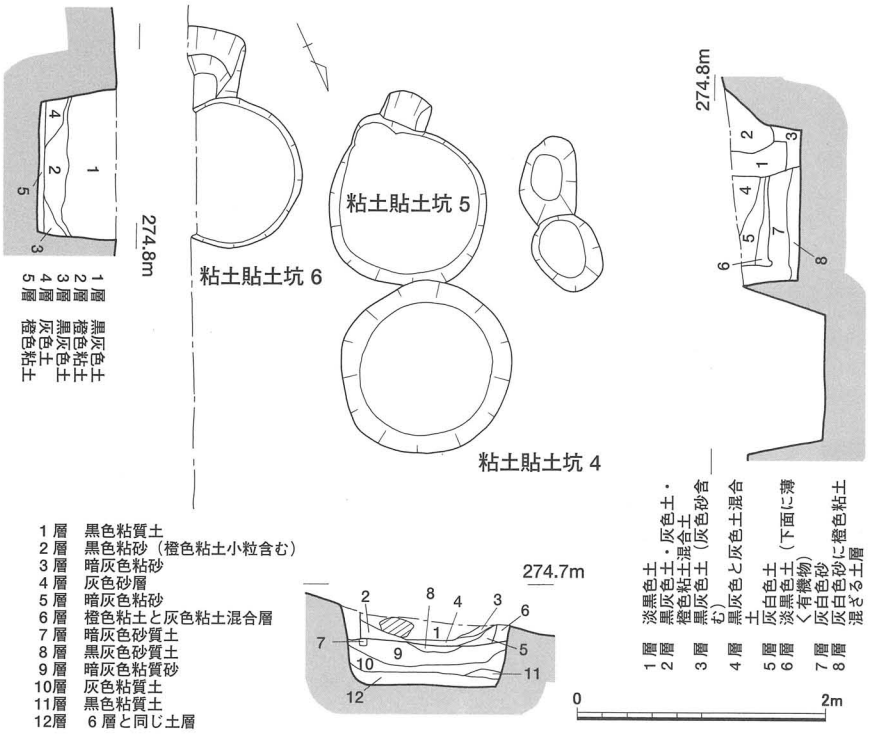
粘土貼土坑４（第82図）　壁面もしくは底面に粘土を貼った「粘土貼土坑」が３基、接するように検出されている。粘土貼土坑４は直径が検出面で1.4m前後、底面で1.1m前後、深さが検出面から70cmの円形の土坑である。底面には比較的厚く粘土が貼られている。また底面から35cmほど上方にも床面らしき面が認められ、そのレベルから上方には壁面にも粘土が貼られている。ある時期から深さを浅くして利用したものと推測される。機能的には、上面の底想定面より上層には黒色の粘土が堆積していることから、廃棄後も溜まり水が滞水していた可能性があり、遺構群６で検出された粘土貼土坑と同様に、水を溜める機能が想定されよう。

堆積土中から在地系陶器の擂鉢、肥前系陶器の皿が出土している（写真２－61～63）。時期的には17～18世紀頃と考えられ、遺構の時期にもこれらの時期と遠くないものと推測される。

粘土貼土坑５（第82図）　粘土貼土坑４の南側に、かすかに切り合う形で検出された土坑である。規模は検出面で1.25m程度、底面で1.1m前後の円形を呈す。深さは検出面から60cm前後で、底面には粘土が敷かれている。底面粘土層の上には、掘り込み基盤である「ハイカ」層と同質の灰白色砂が一括して埋められたように堆積し、それを掘り込んで一回り小さい同様の土坑が認められる。粘土貼土坑４と同じように、ある時期から深さを浅くして利用したものと推測される。時期を推測できる遺物等は出土していない。

粘土貼土坑６（第82図）　粘土貼土坑５の東側に接して検出された土坑である。半分近くが調査区外にあり、全形は不明だが、直径1.2m前後の円形を呈す。深さは検出面から65cm前後、底面には厚さ５cm前後の橙色粘土が敷かれている。時期を推測させる遺物等は出土していない。

これらの粘土貼土坑の時期については、厳密には不明である。ただ壁に明瞭な粘土が見られないなど、遺構群６の粘土貼土坑群とは異なる共通の特徴があり、近い時期に形成された可能性が高いと考えている。粘土貼土坑４からの出土遺物から、およそ近世後期頃と推測される。



第82図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）粘土貼土坑４～６実測図（S＝1／60）

８．包含層出土の遺物

今回の調査においては、谷地形に堆積した黒色土中（第１黒色土に対応）を中心に、遺物が出土している。中心となるのは縄文時代晩期の土器と弥生時代中期後半の土器で、それに弥生時代後期の土器、古墳時代後期～奈良時代の須恵器・土師器が若干含まれる状況

である。一方、調査対象地の基準の変更により、基本的に第２黒色土以下の調査は行っていないが、堆積状況確認のためのトレンチ調査を行った際に第２黒色土から若干の土器が出土している。

(1) 第２黒色土出土の遺物（第83図）

１は深鉢片で、外面は撚糸文状の縄文、内面はナデである。板屋Ⅲ遺跡の分類（角田編1998）でいう、第２黒色土Ⅳ類、里木Ⅱ式併行の可能性がある(注2)。２は外面に太い沈線で区画された磨消縄文の見られるもので、板屋Ⅲ遺跡第２黒色土Ⅴ類に対応するものである。３、４は粗製深鉢の口縁部、５は底部である。

(2) 旧谷地形堆積土出土の遺物（第84図～第89図）

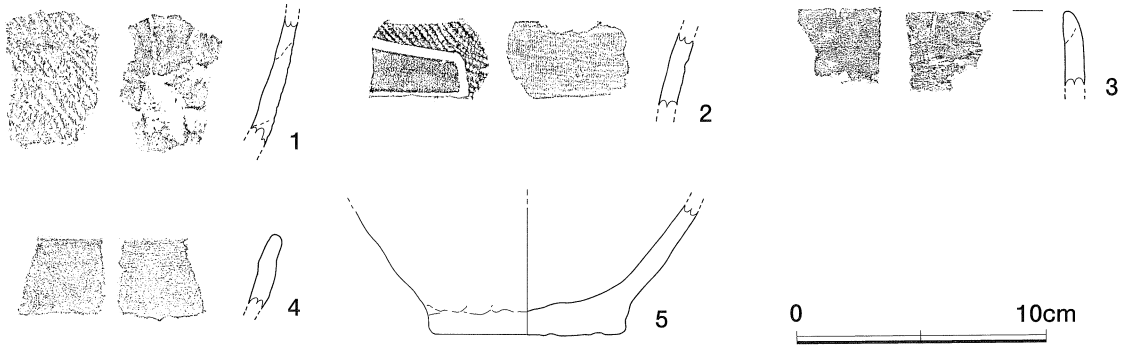
①縄文土器　第84図１は口縁端部にキザミ、頸部外面に鋸歯状及びまっすぐ下りる沈線を施した深鉢である。第84図６も同様に口縁端部にキザミが入り、頸部に沈線文を施すが、沈線は細く横方向に波打つように施される。第84図17も１と同様に鋸歯状と垂直に下りる沈線が施されたもので、その下段には水平方向に沈線が見られる。沈線は細く２本ないし３本が１単位となる。

第84図３は頸部外面に円形の刺突をアトランダムながらおおよそ縦方向に施した深鉢である。22、25も同様の破片と考えられる。18は器壁のくびれた部分の外面に突起状のふくらみを付着したもので、突起部分に小形円形の刺突を施したものである。

第84図11～16は口縁の内面に刺突文が見られる深鉢片である。また第84図19、20、22、23は胴部に斜め方向からの押引状の刺突文が見られるものである。以上の破片は、板屋Ⅲ遺跡の分類第１黒色土Ⅵ類に対応すると考えられ、谷尻式に併行すると考えられる。

第84図２、４～９は口縁端部にキザミが見られる深鉢片である。口縁端部は外につまみ出すような癖を持つものも見られる。板屋Ⅲ遺跡の分類第１黒色土Ⅴ類に対応すると考えられ、篠原式中段階～谷尻式に併行すると考えられる。

第85図１～５は粗製深鉢の口縁部及び胴部の破片である。器壁は厚く、調整は条痕やナデが多い。７、８は底部片である。７は広い平底をもち、８は内面に２枚貝による条痕が見られる。９は胴部外面にキザミのある突帯を貼り付けたもので、胴部と口縁部にキザミのある突帯を持つタイプと考えられる。板屋Ⅲ遺跡の分類第１黒色土Ⅷ類に対応すると考えられ、沢田式に併行すると考えられる。10は口縁部の直下にキザミのある突帯を施したもので、口縁端部にはキザミは見られない。沢田式以降に併行するものと考えられる。

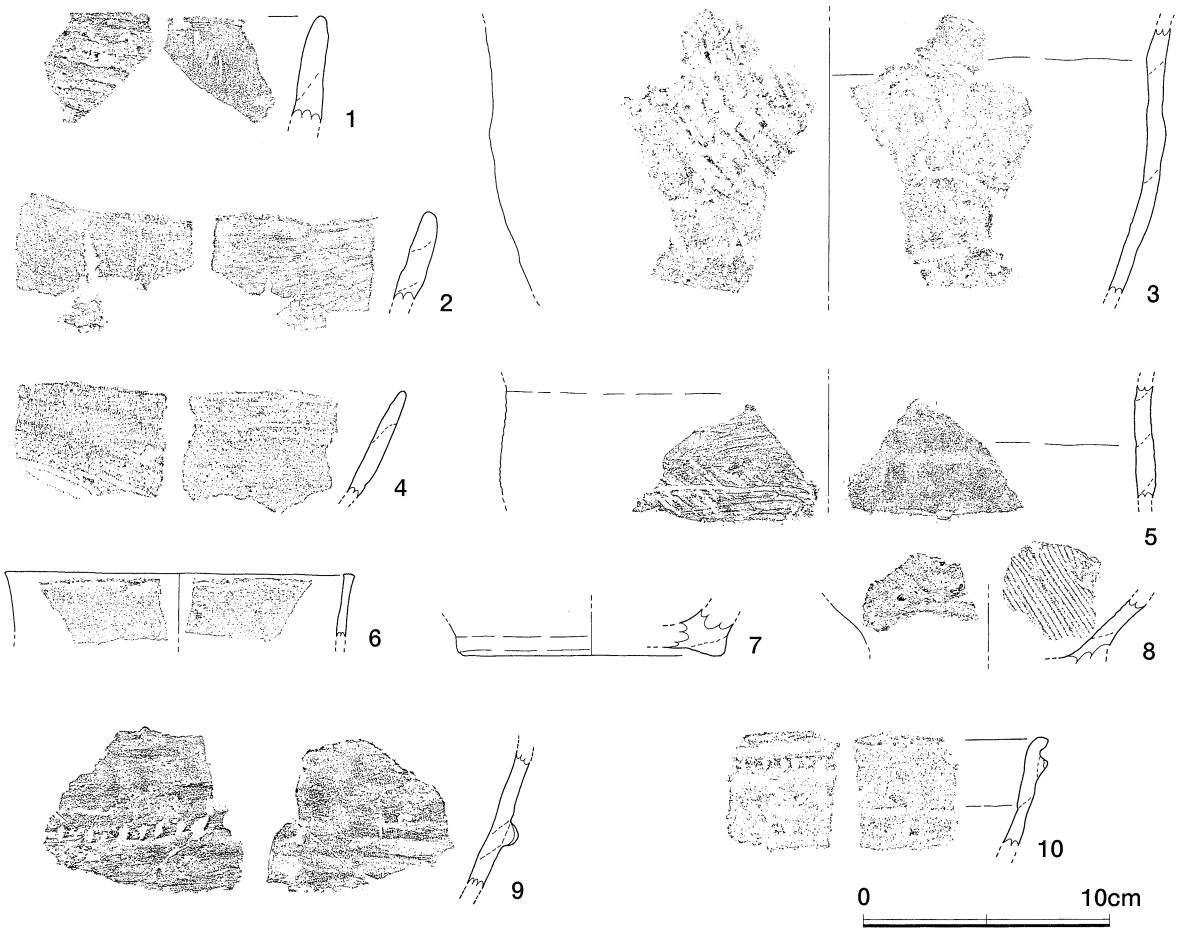


第83図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）第２黒色土出土縄文土器実測図（S＝1／3）

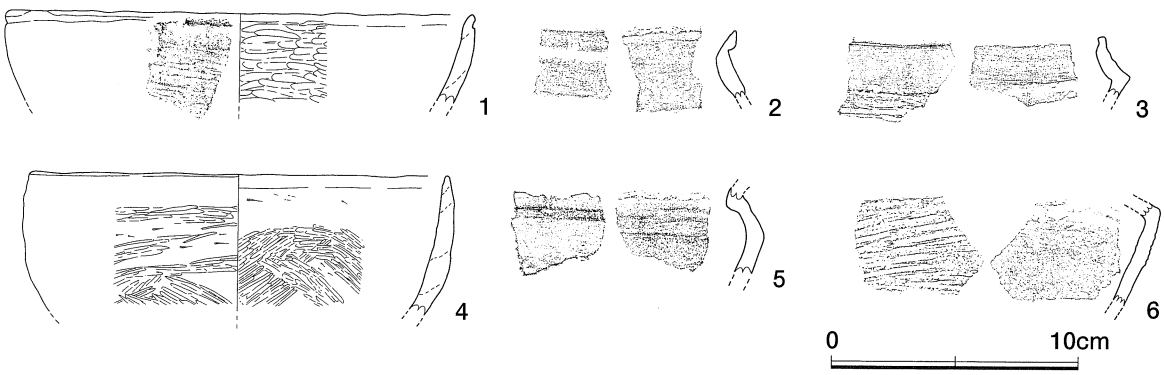
第84図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土縄文土器実測図（1）（S=1／3）

第86図は精製土器である。１と４は碗状の浅鉢と考えられ、１は口縁の外面に浅い凹線上のくぼみが見られる。２は口縁外面に段がつくもので、胴部が屈曲するタイプと考えられる。３、６も胴部が屈曲するタイプで、突帯文期に併行するものであろう。

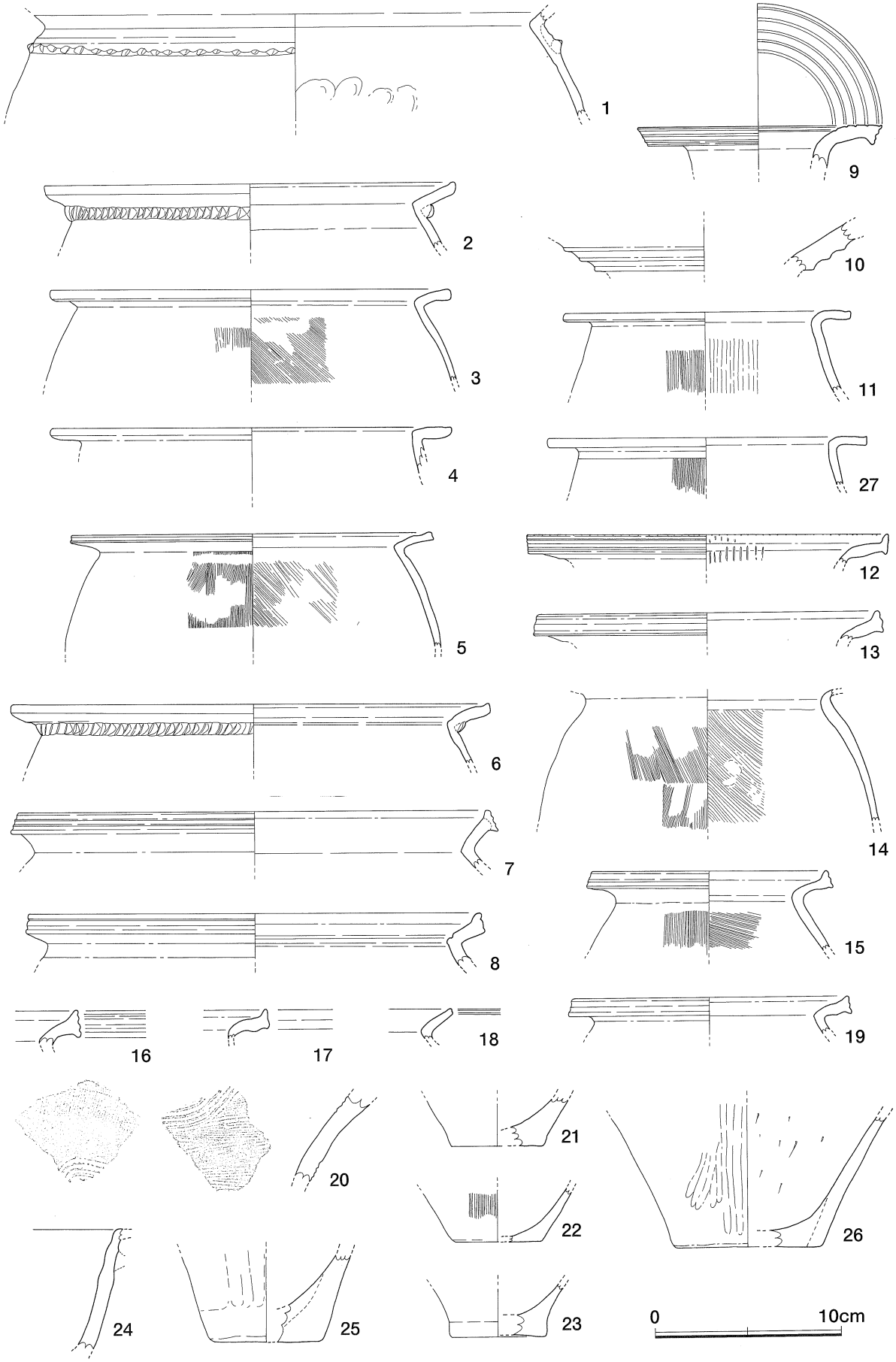
第87図は、弥生時代中期と考えられる土器である。１～８、11～19は甕である。１は屈曲する頸部のやや下方に斜めから押さえるようなキザミの入った突帯を貼り付けるもので、やや大形の個体である。２と６は屈曲する頸部に斜め方向から押引状の刺突を入れた突帯を貼り付けているもので、口縁は単純な形態だが、端部内面をなでてわずかに窪ませ、口縁端がかすかに



第85図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土縄文土器実測図（2）（S=1／3）



第86図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土縄文土器実測図（3）（S=1／3）



第87図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土弥生土器実測図（1）（S=1／3）

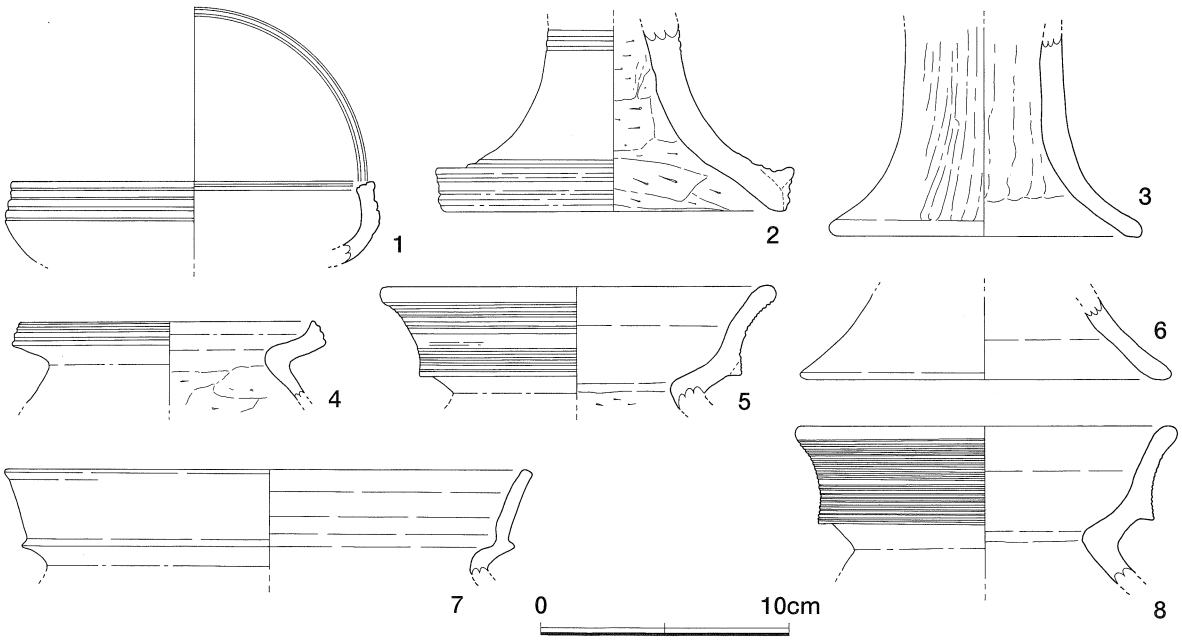
上方に突出するようなくせをつけている。5は同様の形態で突帯がつかないタイプである。4、5、11、27は頸部が折れ曲がって、単純な口縁を持つタイプで、5、11、27は口縁が水平に近い角度で広がっている。7、8、12、13、15～17、19は口縁端部が上下、もしくは上方に拡張し、その外面に2条ないし3条の凹線を施しているタイプである。

9、10は壷である。9は水平に近い角度で開く口縁の内面に5条の沈線をめぐらせており、口縁端部は外傾して外面に3条の凹線を入れている。10は頸部の破片で、外面に凹線を施している。20は壷の頸部から口縁部にかけての破片と考えられ、内外面に櫛状工具で施文されている。小片で文様の全容は不明だが、外面には流水文、内面には波状文が施されていたものと推測される。24は鉢であろうか。頸部の下方に帯状に剥落痕があることから、突帯が貼り付けられていたものと考えられる。また胴部には櫛状工具による刺突もみられる。21～23、25、26は甕または壷の底部である。上記したような中期頃のものと考えて問題はないであろう。

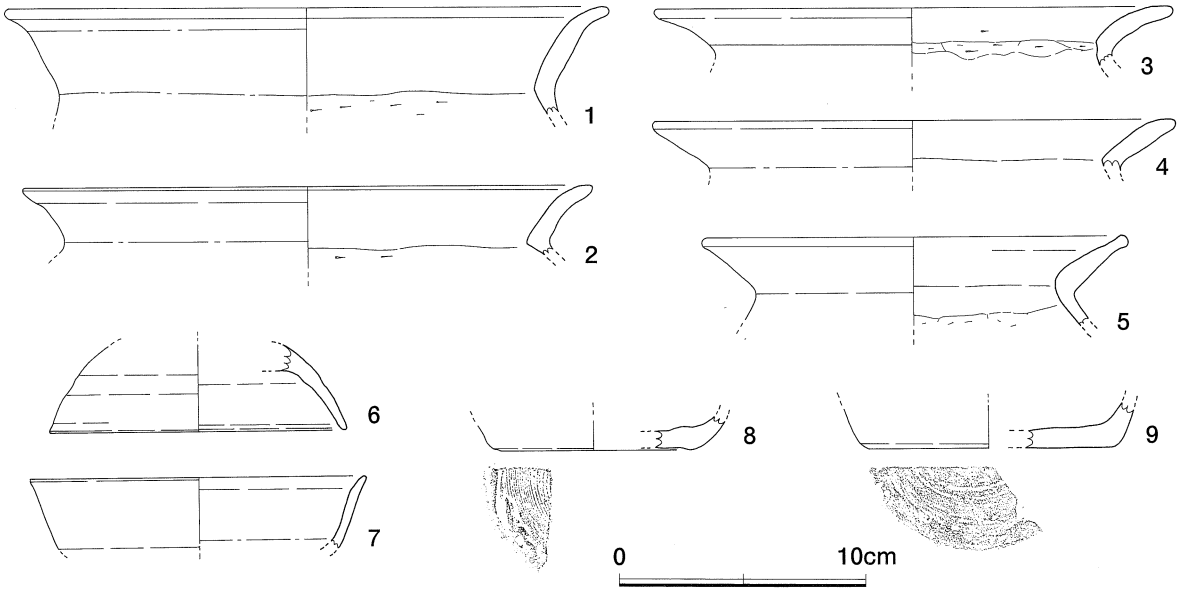
第88図1～3、6は弥生土器高坏と考えられる。1は碗状の坏部で、口縁下方外面に4条の凹線、口縁端部の上面に2条の凹線を施している。2は脚部で器壁は分厚く内面にはヘラケズリを施している。3、4は脚端部が単純に丸く収められた脚部である。

4、5、7、8は弥生時代後期～古墳時代初頭の甕である。4は口縁をわずかに拡張し、外面に3条の凹線を入れた甕で、内面は頸部までヘラケズリを施しており、後期前半のものと考えられる。5、8は口縁が外湾しながら上方に拡張し、外面には擬凹線を施している。後期中葉～後葉にかけてのものと考えられる。7は口縁が外に開いてほぼまっすぐ立ち上がっており、古墳時代初頭のものであろう。

第89図は土師器、須恵器である。1～5は土師器甕である。いずれも胴部から折れ曲がって、単純な口縁に続くもので、古墳時代後期～奈良時代のものと考えられる。6は須恵器の蓋であろうか。分厚い天井部から傾斜を持って体部が下り、薄く納める口縁部にいたる。古墳時代後期～飛鳥時代頃の壷等の蓋かと思われるが、坏の可能性も残る。7～9は須恵器坏身である。



第88図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土弥生土器実測図（2）（S=1／3）



第89図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土土師器・須恵器実測図（S＝1／3）

7は薄く仕上げた体部から口縁部にいたる破片、8、9は回転糸切り痕が残る底部片であり、奈良時代を前後する時期のものと考えられる。

注

(1) 陶磁器の種類や時期については、佐賀県陶磁文化館、家田淳一氏のご教示を受けた。

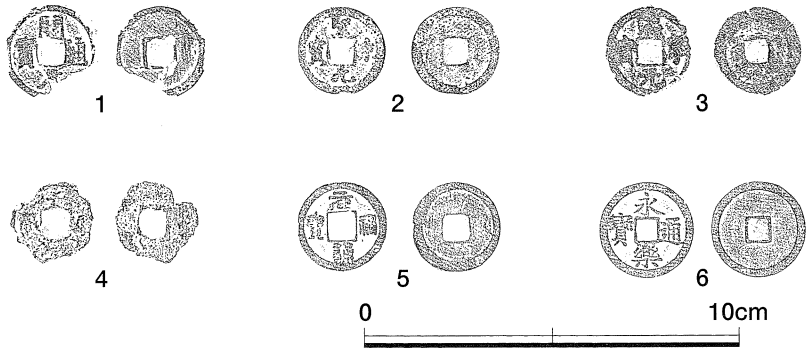
(2) 縄文土器の型式、時期については、島根県埋蔵文化財調査センター、角田徳幸氏からご教示いただいた。

参考文献

角田徳幸編1998『板屋Ⅲ遺跡―志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５』島根県教育委員会

鳥谷芳雄他編2000『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡―志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書８』

田原淳史他編2002『神原Ⅱ遺跡―志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13』



第90図　神原Ⅱ遺跡（平成12年度）出土古銭（S＝1／2）

第6章　ま　と　め

神原Ⅱ遺跡の調査報告書は、平成９（1997）年以来、今回が３冊目である。今回は平成11、12年度の調査についての報告である。

平成11年度調査では、神戸川沿いに走る、主要地方道出雲三次線の付近から新設される道路の間の斜面を調査、平成12年度は11年度の調査区に挟まれた部分を中心に調査を行った。

○平成11年調査

１．縄文時代の遺構・遺物

縄文時代で確認された遺構・遺物としては、第２ハイカ層において焼土面３カ所がある。これらの焼土面の周囲ではピットも確認しているが、住居としてのまとまりは確認していない。この遺構面の上層には第２黒色土が堆積しており、この中から後期前葉の福田ＫⅡ式相当の土器が僅かに出土している。

第２ハイカ層上面の遺構面に含まれる炭化物からＣ14による年代測定を行ったところ、BP3590±40、3740±50、3810±50の暦年補正年代が算出されている。また、プラントオパール分析によるとクリ林にササ類が生える状態が想定されている。花粉分析からもクリ林の分布が推定される。

第１黒色土中からは、晩期の土器溜まりが確認され約3,000点の土器が集中して出土している。土器の時期は、晩期中葉の篠原式中段階、谷尻式から晩期後葉突帯文土器までである。土層堆積状況からは上下関係を明らかにはできなかった。谷地形の先端部からの出土でありこの時期の遺構面が調査区域外にあったものと思われる。

２．弥生時代、古墳時代

この時期の遺構は確認されず、僅かに土器の破片が出土するのみであった。

３．奈良時代

奈良時代の遺構としては、Ⅴ区から竪穴住居跡３棟を検出している。いずれも隅丸方形のプランである。SI－03は、主柱穴の位置が竪穴の壁に係り、各辺の中央部に位置し、柱が内側に傾斜するという特異な構造である。床面からは、須恵器、土師器、鉄鎌などの通常の生活に関する遺物のみ出土しており、特異な住居の性格を考える材料は見られない。また、SI－01からは、帯金具の絞具が出土している。この遺物からは相応の身分階級の存在が想定され、「出雲国風土記」記載の志都美径（しづみのこみち）が神戸川沿いに通っており、その位置が注目される。いずれの竪穴住居跡からも造り付け竈を検出せず、焼土層のみ確認している。移動式竈、土製支脚等の遺物も確認していないことから、基本的には造り付け竈を持つものと推定される。

４．中近世

中世の明瞭な遺構は確認していないが、遺物として石鍋、擂り鉢、備前系壺など室町時代の遺物が出土している。

近世の遺物として江戸時代中期（18世紀）の肥前系陶磁器が出土している。これらの遺物は粘土張りの土坑などから出土しており、１、Ⅱ、Ⅲ区の遺構はこの時代のものであり、建物等も伴っていたと思われる。

○平成12年度調査

1．縄文時代の遺物

自然流路の跡と推定される谷状地形に堆積した黒色土から、晩期中葉の篠原式中段階～谷尻式から晩期後葉の突帯文期までの土器が出土している。これは平成11年度の調査と全く同様の傾向であり、遺構は検出されていないものの、この地区の周辺で当該期に生活が営まれていたことをうかがわせる。12年度においては、特に谷尻式併行期の土器が最も多いのが、特徴である。第2黒色土以下については、事業による影響がないことが想定され12年度からは基本的に調査を行っていない（一部トレンチのみ）ため、詳細は不明である。

2．弥生時代の遺物

弥生時代の遺物も、縄文土器と同様に谷状地形に堆積した黒色土から出土した。弥生時代中期から後期の土器が出土しているが、中心となるのは中期中葉～後葉の土器である。遺構は全く検出されなかったが、ある時期に削平を含めて整地が行われた可能性が高いため、当該調査区周辺もしくは上方で生活が営まれた可能性が高い。また平成10年度の神原Ⅱ遺跡の調査や板屋Ⅲ遺跡で出土した流水文を施文した土器片が出土している。

3．古代（古墳時代～平安時代）

古墳時代以降平安時代に至る古代の遺構は検出されず、また出土した遺物も非常に少なかった。隣接する11年度調査区では奈良時代の住居跡3棟が検出されているが、12年度の状況を見る限り、当該期におけるこの地区の利用は大規模なものではなかったものと推測される。

4．中世、近世

中世末から近世の陶磁器類が相当量出土しており、この地区で活発な活動があったことがうかがえる。遺構としては、掘立柱建物跡のほか、何らかの生産活動の痕跡として集石土坑（麻蒸しか）、粘土貼土坑（水溜めか）、炉状遺構などが検出された。掘立柱建物跡と土坑などの遺構は、隣接して検出される形が見られ（遺構群1と2、遺構群4と5）、居住区と作業空間が隣接して別区域に設けられている可能性がうかがえた。掘立柱建物跡については、大形の柱穴に斜道状のスロープを附設したものが見られ、板屋Ⅲ遺跡や平成10年以前の神原Ⅰ遺跡、神原Ⅱ遺跡などで検出されている建物との共通性がうかがえる。これらの遺構の時期については、直接的な証拠に乏しく限定が難しいが、遺構内から出土している少量の陶磁器や遺構面の上層から出土する陶磁器などから、近世が中心と推測される。

第7章　自然科学分析

島根県、志津見ダム関連遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．神原Ⅱ遺跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種　類	前処理・調整	測　定　法
No.1	Ⅴ区K14グリッド 1号焼土付近	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.2	Ⅴ区K14グリッド 1号焼土付近	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.3	Ⅴ区K14グリッド 北壁地点	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 （年BP）	δ^{13}C （‰）	補正^{14}C年代 （年BP）	暦　年　代（西　暦）	測定No. Beta－
No.1	3800±50	－24.4	3810±50	交点：cal　BC2265,　2260,　2220 1σ：cal　BC2310～2190,　BC2165～2150 2σ：cal　BC2445～2125,　BC2075～2055	138211
No.2	3590±40	－25.0	3590±40	交点：cal　BC1935 1σ：cal　BC1975～1895 2σ：cal　BC2030～1875	138212
No.3	3740±50	－25.1	3740±50	交点：cal　BC2140 1σ：cal　BC2205～2115, BC2095～2040 2σ：cal　BC2295～2010	138213

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU－Th年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40（3））により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、較正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、較正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

Ⅱ．神原Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

2．試　料

分析試料は、Ⅲ区F７グリッドから採取された第１黒色土層上部（試料１）と下部（試料２）、およびⅤ区K14グリッドから採取された第２黒色土層最上部（試料４）の計３点である。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科ータケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

5．考　察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) Ⅲ区F７グリッド

第１黒色土層下部（試料２）では、クマザサ属型が多量に検出され、ミヤコザサ節型も比較的多く検出された。第１黒色土層上部（試料１）では、各分類群とも減少しており、ウシクサ族Aが出現している。おもな分類群の推定生産量によると、クマザサ属型が卓越していることが分かる。

以上のことから、第１黒色土層の堆積当時は、クマザサ属（チシマザサ節やチマキザサ節）などのササ類を主体としたイネ科植生であったと推定される。これらのササ類は現在でも日本海側の寒冷地などに広く分布しており、積雪に対する適応性が高いとされている（室井，1960）。

クマザサ属は氷点下５℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。また、これらのササ類は、燃料や建築材、敷物などとして盛んに利用されていたと考えられる。

2) Ⅴ区K14グリッド

第２黒色土層最上部（試料４）では、クマザサ属型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型も少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、クマザサ属型が優勢であ

ることが分かる。

以上のことから、当時の遺跡周辺は、クマザサ属（チシマザサ節やチマキザサ節）などのササ類を主体としてススキ属なども見られるイネ科植生であったと推定される。

6．まとめ

植物珪酸体分析の結果、第２黒色土層最上部および第１黒色土層の試料からは、イネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

当時の遺跡周辺は、クマザサ属などのササ類を主体としたイネ科植生であったと推定される。花粉分析（第Ⅲ章）の結果では、第２黒色土層でクリが優占していることから、クリ林の林床植生などとしてササ類が生育していたことが想定される。

参考文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体.富士竹類植物園報告，第31号，p.70－83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）考古学と植物学，同成社，p.189－213.

高槻成紀（1992）北に生きるシカたち―シカ、ササそして雪をめぐる生態学―，どうぶつ社

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―　考古学と自然科学，9，p.15－29.

室井　綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布.富士竹類植物園報告，5，p.103－121.

表１　島根県、神原Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個／ｇ）

分類群	学　名	地点・試料	Ⅲ区Ｆ７		Ⅴ区Ｋ14
			1	2	4
イネ科	Gramineae (Grasses)				
ススキ属型	*Miscanthus* type				12
ウシクサ属Ａ	Andropogoneae A type		14		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		131	329	158
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		42	133	140
未分類等	Others		28	51	37
その他のイネ科	Others				
棒状珪酸体	Rod–shaped		21	70	91
茎部起源	Stem origin		14		
未分類等	Others		235	424	420
植物珪酸体総数	Total		484	1007	859

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／㎡・cm）

ススキ属型	*Miscanthus* type				0.15
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		0.99	2.47	1.19
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		0.12	0.40	0.42

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*				
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*				
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		89	86	74
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		11	14	26

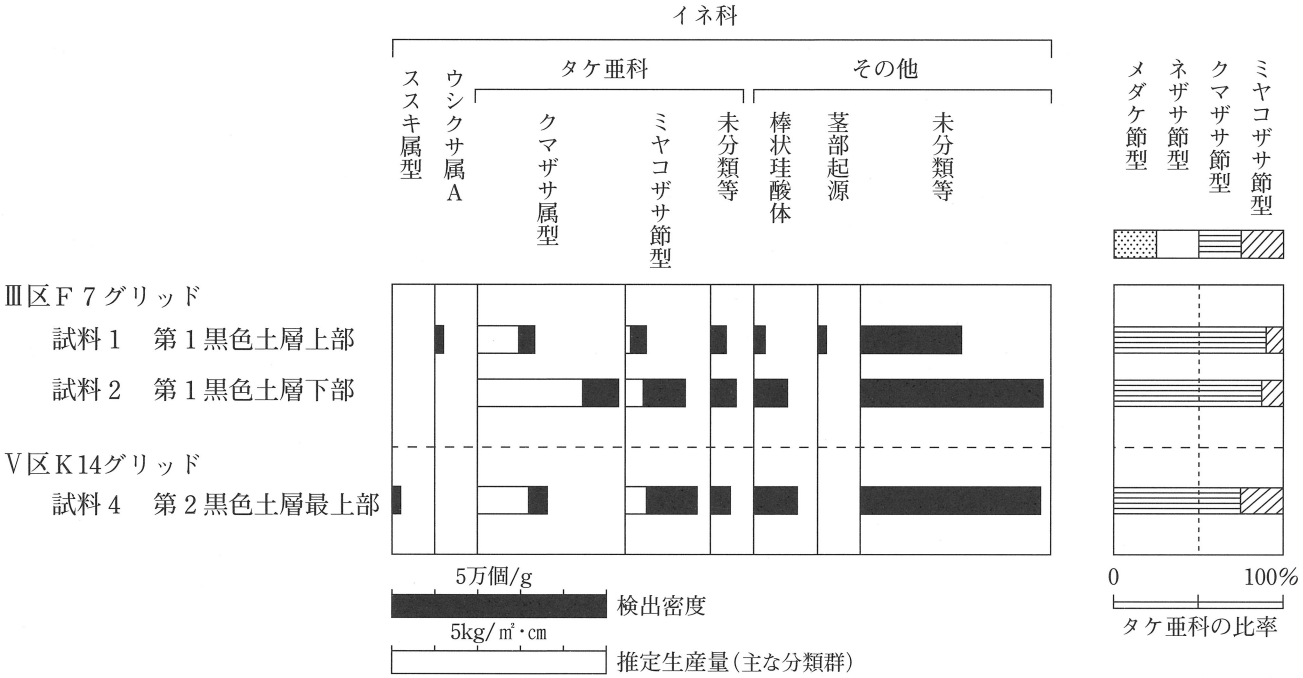
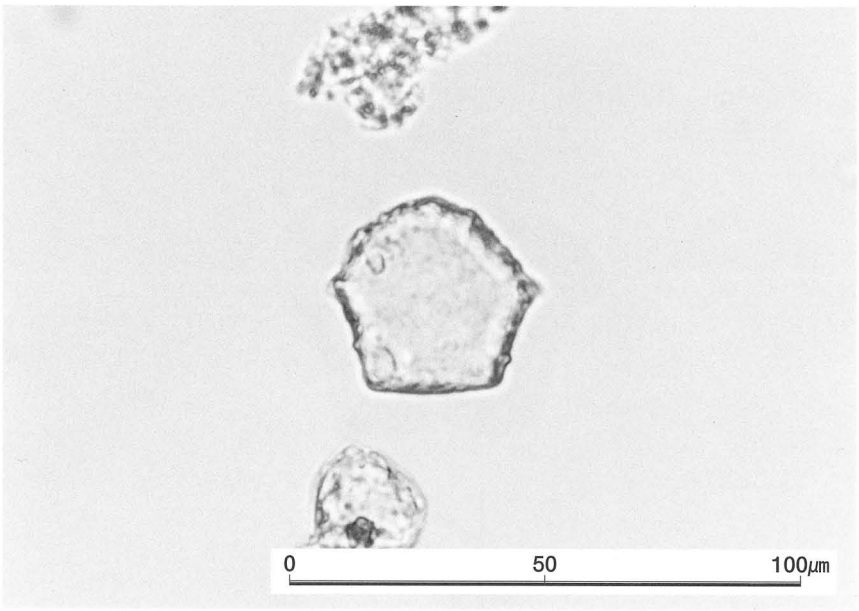


図１　島根県、神原Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析結果

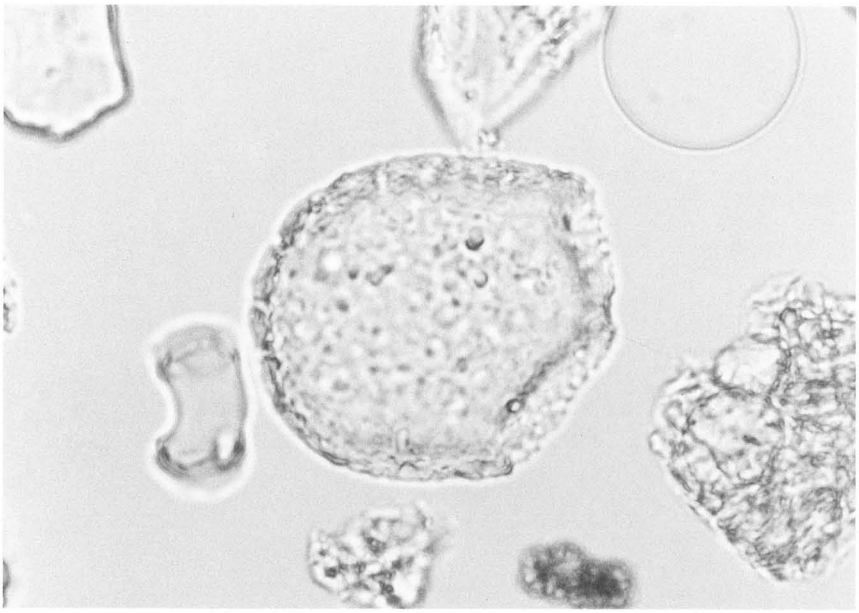
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

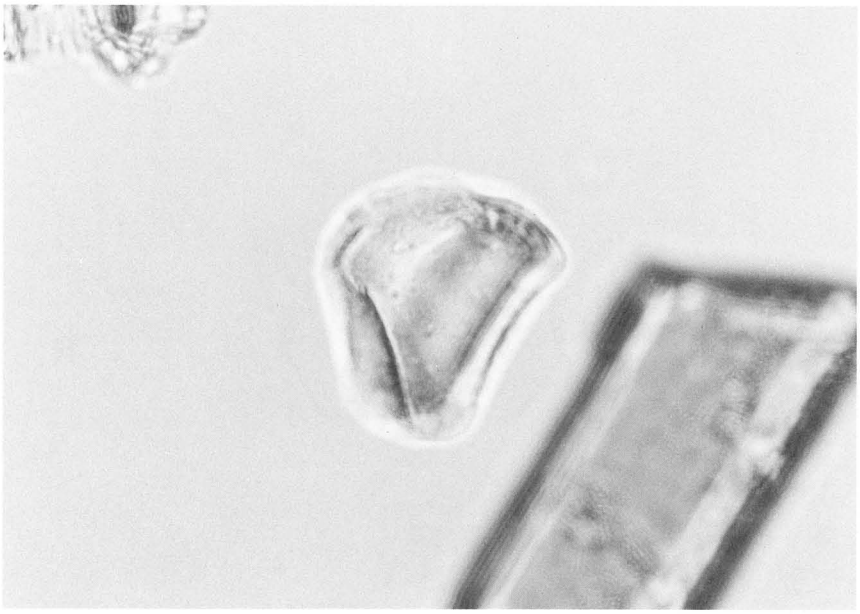
No.	分　類　群	遺　跡	地　点	試料名
1	モロコシ属型	貝　谷	北　壁	6
2	ヨシ属	貝　谷	SI04	3
3	ススキ属型	神原Ⅱ		4
4	ススキ属型	貝　谷	SI03	3
5	クマザサ属型	神原Ⅱ		4
6	クマザサ属型	貝　谷	北　壁	6
7	クマザサ属型	神原Ⅱ		2
8	ミヤコザサ節型	貝　谷	SI03	1
9	表皮毛起源	貝　谷	北　壁	6
10	棒状珪酸体	貝　谷	SI03	1
11	イネ科の茎部起源	神原Ⅱ		1
12	シダ類？	貝　谷	SI04	3



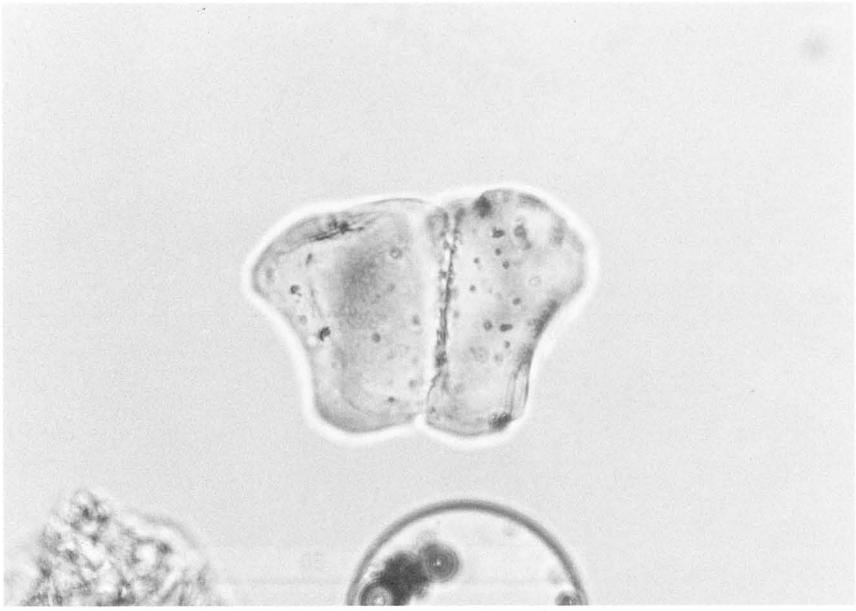
1



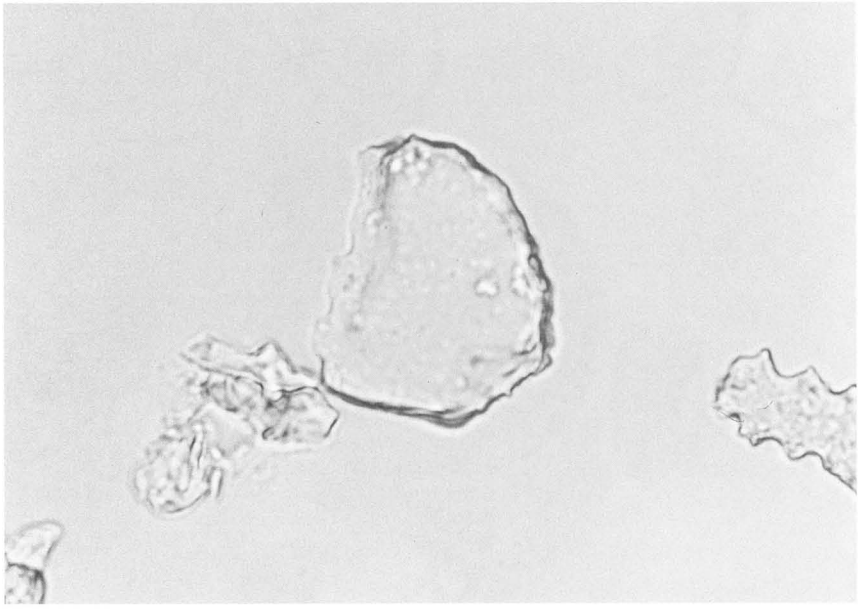
2



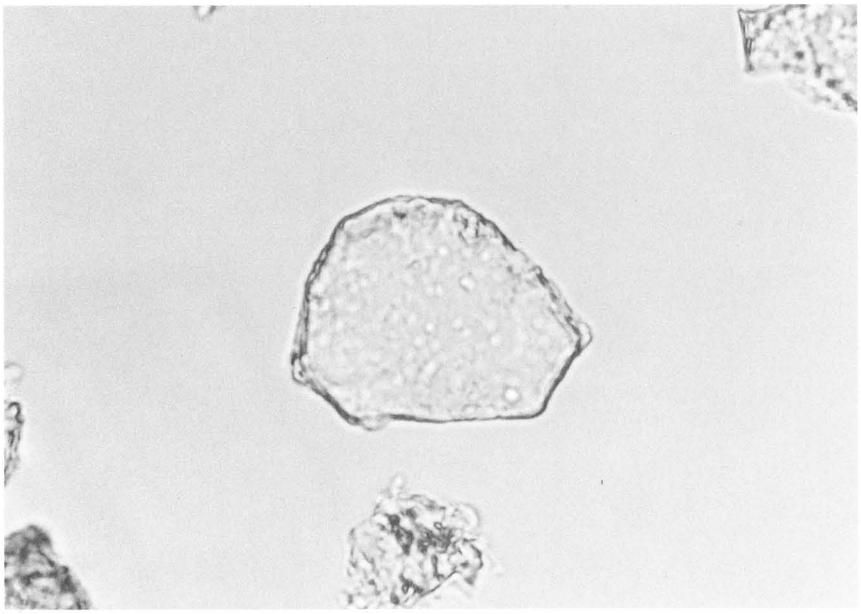
3



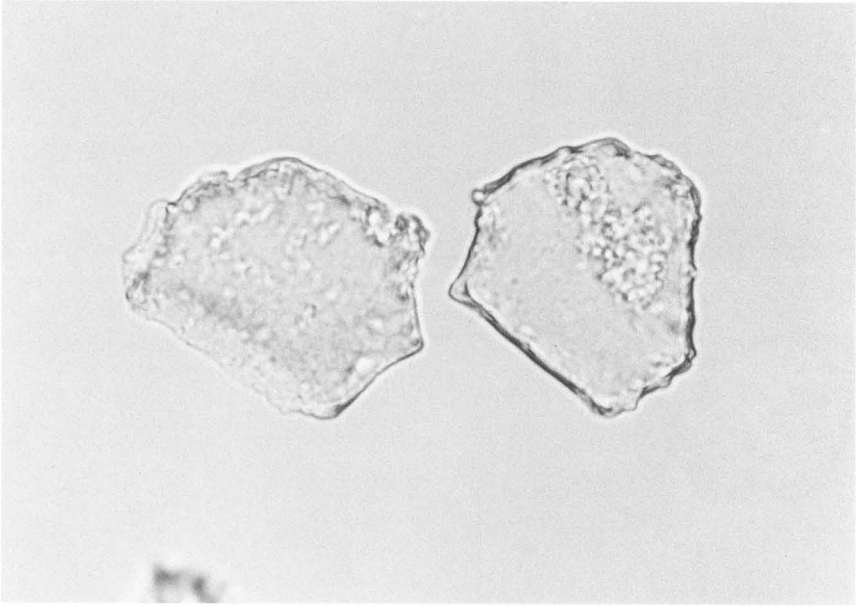
4



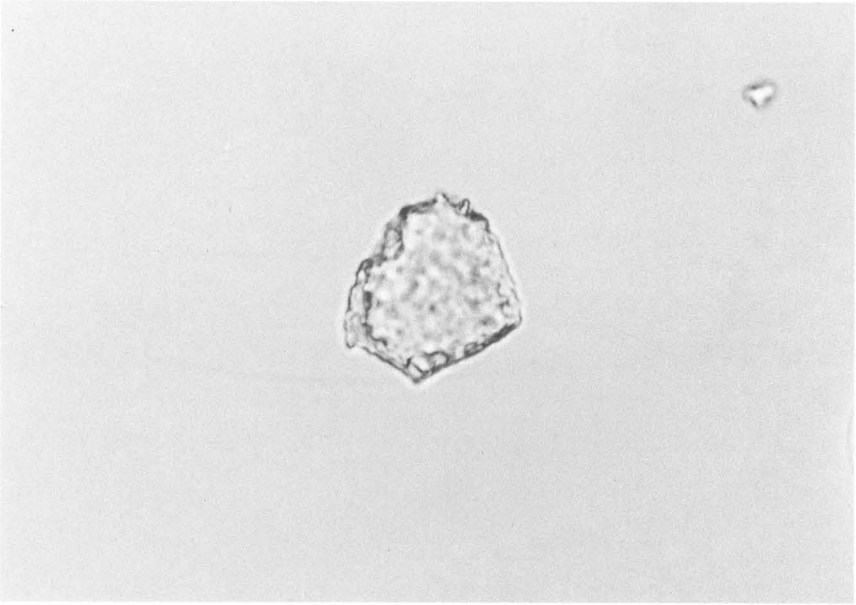
5



6

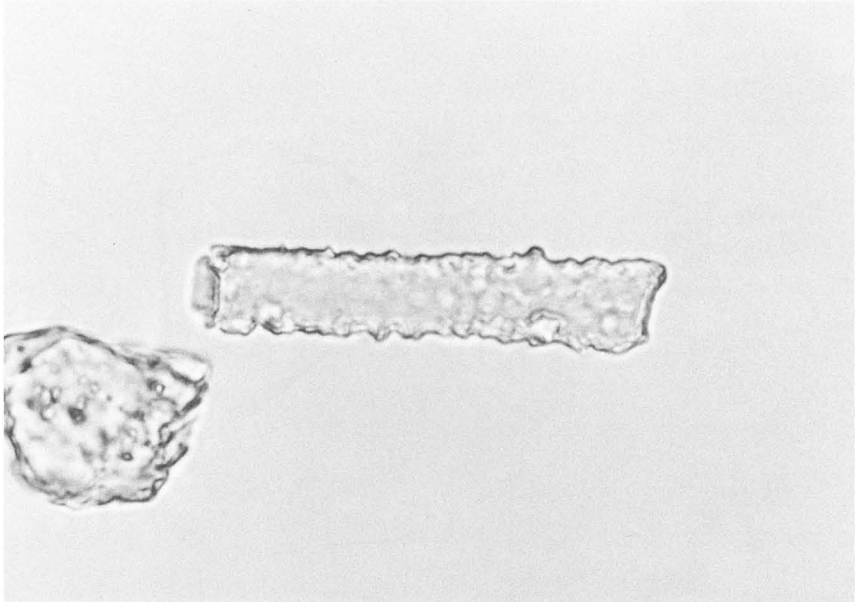


7



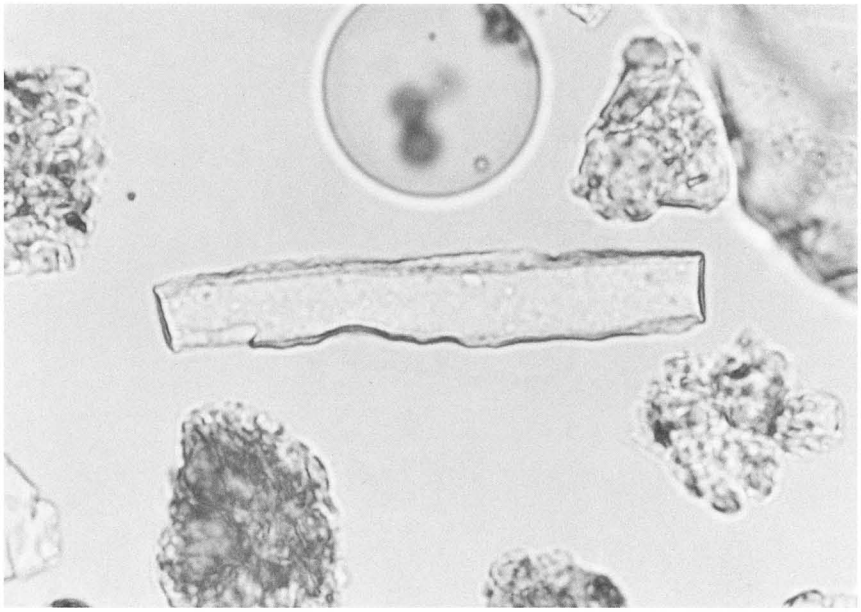
8

9



10

11



12

Ⅲ．神原Ⅱ遺跡における花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存しないこともある。

2．試　料

試料は、Ⅲ区F７グリッドから採取された第１黒色土層（試料1)、およびⅤ区K14グリッドから採取された第２黒色土層上位（試料５）と第２黒色土層下位（試料７）の計３点である。

3．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

1）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4．結　果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉10、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉７、シダ植物胞子２形態の計20である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

サワグルミ、ハンノキ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、タデ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

試料1からは、花粉がほとんど検出されなかった。試料5ではクリが優占しており、草本花粉の出現率は極めて低率で、イネ科、ヨモギ属などが検出された。試料7でもクリの出現率が高く、ニレ属ーケヤキ、トチノキなどが伴われる。草本花粉では、イネ科、タンポポ亜科、ヨモギ属が優占しており、シダ植物胞子の出現率も高い。

5．花粉分析から推定される植生と環境

第2黒色土層下位の堆積当時は、イネ科、タンポポ亜科、ヨモギ属、およびシダ植物などの草本が多く生育する陽当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクリ林が分布していたと推定される。第2黒色土層上位の時期には、クリ林が拡大したと考えられ、草本はあまり見られなくなったと推定される。クリは温帯に広く分布し、冷温帯と暖温帯の中間域で純林を形成するが、二次林としての性質も持っている。また、クリは比較的乾燥した環境を好み、果実は優良な食物として利用される。

第1黒色土層では、花粉があまり検出されなかった。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

参考文献

中村　純（1973）花粉分析　古今書院，p.82－110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原　新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態　大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村　純（1980）日本産花粉の標徴　大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村　純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza　sativa）を中心として　第四紀研究，13，p.187－193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉　考古学と自然科学，第10号，p.21－30.

表１　神原Ⅱ遺跡における花粉分析結果

分類群		試料		
学名	和名	1	5	7
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ		1	1
Alnus	ハンノキ属		1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属ーアサダ			1
Castanea crenata	クリ		286	48
Castanopsis	シイ属		1	1
Fagus	ブナ属			1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		4	1
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		1	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属ーケヤキ			6
Aesculus turbinata	トチノキ			5
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科ーイラクサ科	1	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	1	6	23
Polygonum	タデ属		1	
Impatiens	ツリフネソウ属			1
Cruciferae	アブラナ科	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	4		13
Asteroideae	キク亜科		1	2
Artemisia	ヨモギ属		13	21
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	5	19	73
Trilate type spore	三条溝胞子		2	8
Arboreal pollen	樹木花粉	0	294	64
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	1	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	6	21	60
Total pollen	花粉総数	7	316	124
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	3
Fern spore	シダ植物胞子	5	21	81
Helminth eggs	寄生虫卵	(—)	(—)	(—)
	明らかな消化残渣	(—)	(—)	(—)

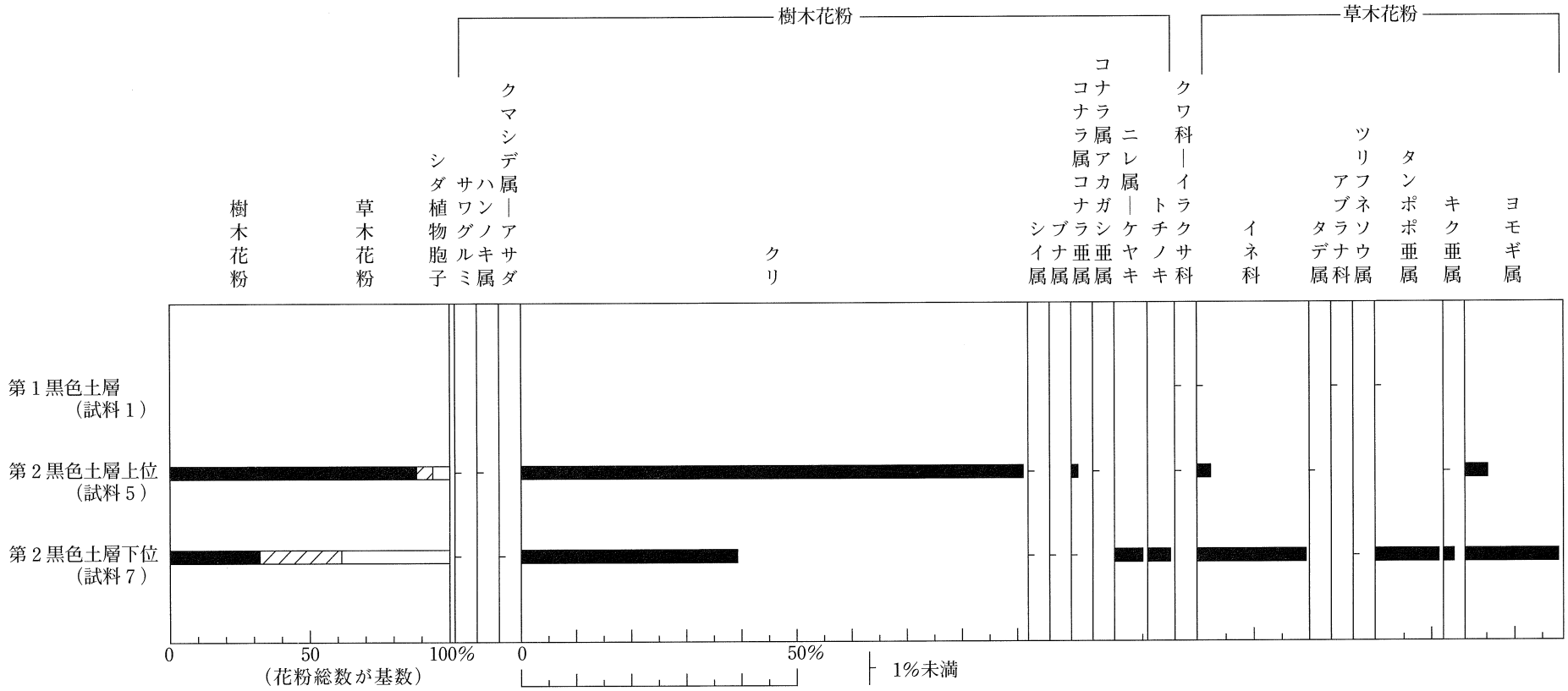
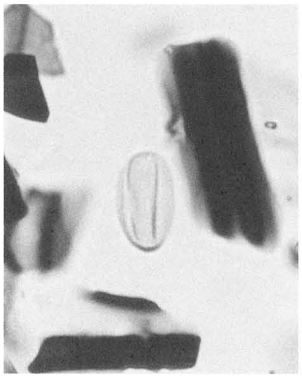


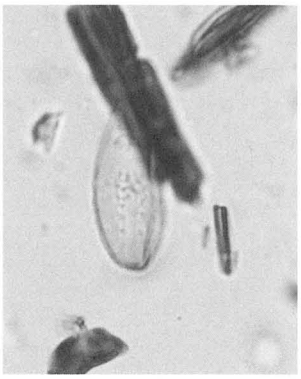
図１　神原Ⅱ遺跡における花粉ダイアグラム

神原Ⅱ遺跡の花粉・胞子



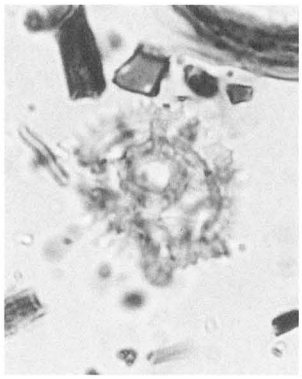
1　クリ

2　コナラ属コナラ亜族

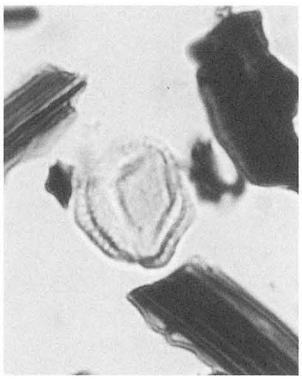


3　トチノキ

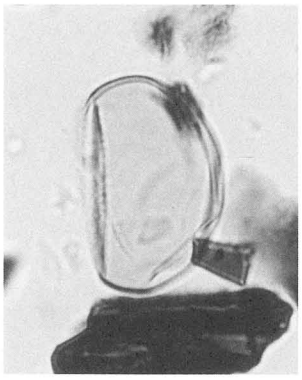
4　イネ科



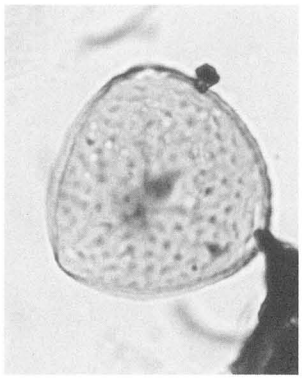
5　タンポポ亜科



6　ヨモギ属



7　シダ植物単条溝胞子



8　シダ植物三条溝胞子

0　10μm

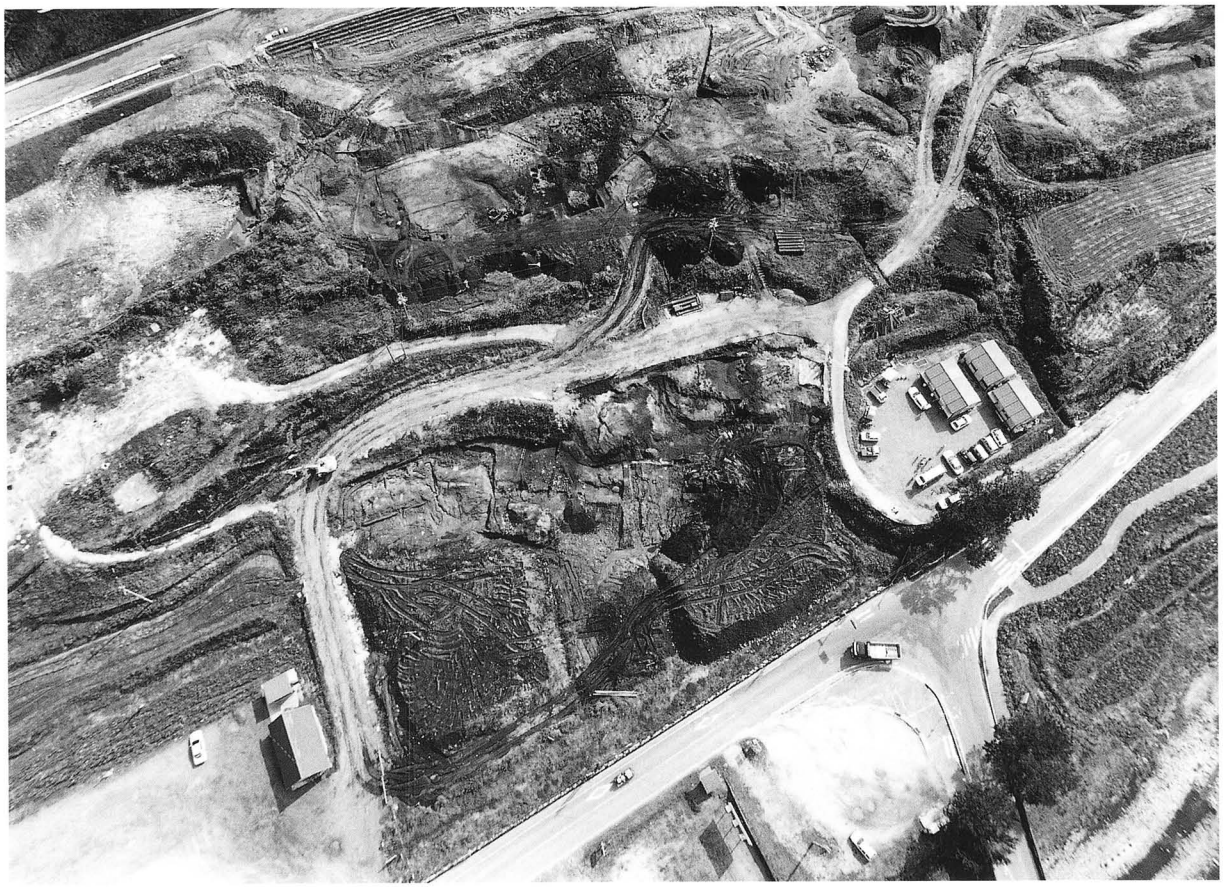
写　真　図　版

数字は図面の番号に対応

神原Ⅱ遺跡遠景（西より）

全景（南側上空より）

写真図版 2



全景（上空より）

第Ⅴ調査区全景（北より）

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ調査区（北より）

第Ⅳ調査区（北より）

写真図版 4

第Ⅰ調査区土層堆積状況（南より）

遺構検出状況（東より）

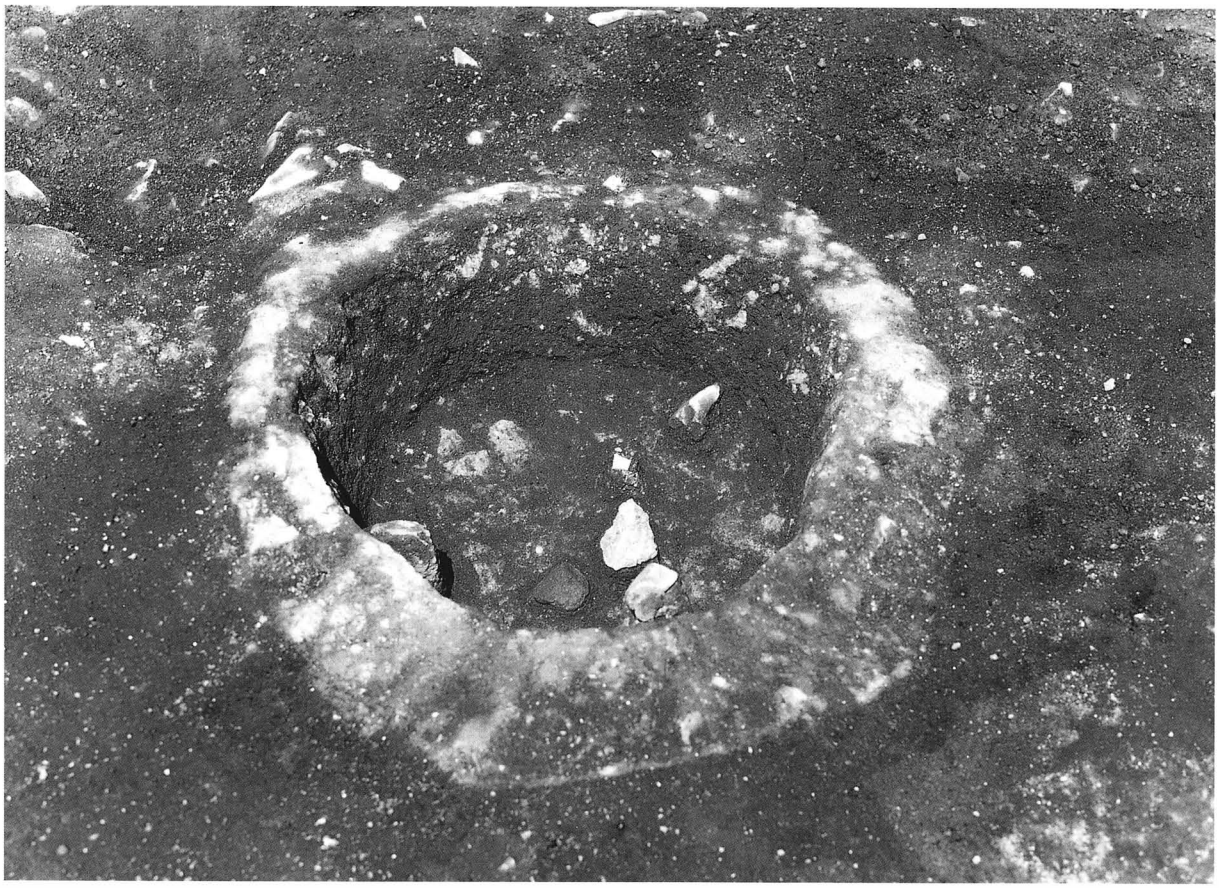
第Ⅰ調査区遺構検出状況（北より）

粘土貼土坑１（南より）

写真図版６

Ｎ６（東より）

Ｎ４（北西より）



Ｎ５（西より）

Ｎ３（東より）